110
765

曹洞宗大學講師 忽滑谷快天先生著

禪之妙味

東京 井洌堂發行

帝國圖書館藏

味

明治
39 11 14
内交

禪の妙味序

世に難解の書多からずとせず、しかも禪書の如きは蓋し難解中の最も難解なるものならん。禾山禪師の垂示に云く、習學之を聞と謂ひ、絶學之を隣と謂ふ、此二者を過る之を眞過と謂ふ。時に一僧あり問ふ、如何んが是れ眞過、禾山云く、解打鼓。又問ふ、如何んが是れ眞諦、禾山云く、解打鼓。又問ふ、即心即佛は問はず如何んが是れ非心非佛、禾山云く、解打鼓。又問ふ、如何んが是れ佛向上の事、禾山云く、解打鼓。又問ふ、萬法齊しく興る時如何、禾山云く、解打鼓と。始めて禪錄を繙く者、上記の如き文字に接せば其何の意たるを識る能はずして

茫然自失すべきなり。而して所謂禪錄なるもの多くは此禾山解打鼓の類にして吾人の之を閲するや恰も蚊虻の鐵牛を嚼むが如くにして喙を下す能はず。されば禪は廣漠なる林野の如く、其何れより入り其何れより出づべきか、殆んど其方隅を知るに苦しむ者多く、また萬仞の懸崖の如く、如何なる藤葛を攀ぢて登り、如何なる磴梯を蹈みて達せんかを知るに難し。

然り而して今や禪の何たるを知らんと欲するもの日に多きを加ふるを見る。此等初學の爲めに方隅を立て、磴梯を作るは目下の急務に屬す。是を以て予は不敏を省みず、先きに『禪學批判論』を著はし、組織的に禪の教理を說明せんと努めたるも尙ほ專門の學者にあらざれば領解し難き

處あるを免れず。乃ち『禪學講話』を公にして再び禪理を解說し、只管童蒙の參考に資せんことを期したるも是亦理論の一邊に傾いて吾人の修養に疎きの短を遣る能はざりしは予の深く憾みとする所なり。依て先賢の遺文を考索し、初心晩學の爲め最も悟り易くして且つ最も實踐に切なる者を選擇したるに、偶宏智禪師の提唱したる默照の二字に觸着し、潛かに思へらく、默は靜默の理にして照は觀照の義なり、靜默は止にして觀照は觀なり。之を寶珠に譬ふれば靜默は其堅剛の質にして觀照は其煌燿の光なり、質あり光あり以て寶珠全たし、默にし照、照にし默、禪や是に於て全たからんと、便ち守靜の用心を詳說して上篇二十餘節を形成し、觀理の妙味を縷述して後篇三章の

文と爲し、上下兩篇を合して『禪の妙味』と題し、茲に剞劂に附して世の始めて禪を學ばんする者の階梯となさんとす。讀者若し此書によりて禪味の何たるを解し、指を宗鼎に染むるの助緣たるを得ば予が幸之に過ぎたるはなし。朱子の云く、博く之を學び、審かに之を問ひ、愼で之を思ひ、明かに之を辯じ、篤く之を行ふと。伏て請ふ讀者予が謗陋の見を以て卿等が博學の材となし、審問の一助となし、愼思明辯篤行の資に供せられんことを。

明治卅九年十月達磨大師入滅の日

忽滑谷快天謹識

注意五則

一、本書を繙かんとする者は先づ序文を讀むを要す。

二、本論の骨子は宏智禪師の提唱せる默照の二字にあり。

三、本書は初學者の爲めにするを專らとし、多少の興味を喚起せんと欲して古今の事例を引證せり。

四、本書に引用せる事例は必ずしも歷史的事實と見るを要せず、されど吾人が恣まに作成したるものにあらず。

五、觀理を論ずる所は私意を以て先賢の心術を憶測したる點なきにあらず、これ吾人が免る能はざる境遇なり。

禪の妙味要目

上篇　守靜の妙味を論ず

第一　緒言……一頁
第二　禪定……二
第三　靜の一字……三
第四　禪病……五
第五　妄想……七
第六　拘泥……九
第七　心力の徒勞……一二
第八　榮辱……一五
第九、養氣……二四
第十　進退……二七
第十一　畸異……三一
第十二　洒落……三五
第十三　威儀……三七
第十四　憤恨……四〇
第十五　我見……四六

第十六　澄心……五五
第十七　閑靜……五八
第十八　十牛圖……六二
第十九　消極禪……七五
第二十　屑事……七九
第二十一　情慾……八一
第二十二　貧富……八二
第二十三　不倚一物……八九

下篇　觀理の妙味を論ず

第一　緒言……九三
第二　觀理……九六
第三　唯心觀……九七
第四　萬有一體觀……一一七
第五、死生透脫觀……一四一
第六　結辭……一七〇
附錄　坐禪儀……一七四

禪の妙味

上篇　守靜の妙味を論ず

忽滑谷快天述

第一　緒言

夫れ味の美たるや自ら之を嘗むるによりて始めて知らるべく、啻其美たる所以の說明を聽くのみにては之を知ることはできぬ。されば金鑄玉膾の滋味も龍肝鳳髓の珍羞も其佳味たり珍膳たる所以の說明を聞くのみにては徒らに垂涎の媒となるに止りて毫も吾人の枯腸を醫するに足らぬ。俗味尙ほ且つ然り況や禪味をや。

今や我國讀書界の人、禪を學び法を聽かんと欲して其食指を動す者は多々これあるべきも、未だ眞に指を禪鼎に染めて大牢の滋味を口にするものは寔に罕(まれ)である、是を以て吾人は禪家の粱肉を宰し、祖屋の盛饌を列ねて如

何に之を咀嚼し、如何に之を消化すべきかを說き、以て諸氏が一たび禪の妙味を感得して精神鍛錬の一助となさんことを冀ふのである。

第二、禪　定

抑も禪とは禪那なる梵語を省略したので、禪那は靜慮と翻譯して、吾人の心想を安靜ならしむるをいふのである。譬へば吾人の心想は器に盛りたる水の如くで、器が動轉すれば水も亦振盪する、然れども器を靜止すれば其中の水も亦靜閑に歸する。故に心水の波濤を靜めて智鋭の瑩然たるを得んと欲せば先づ吾人の身體を安靜の地に置かねばならぬ、吾人の身體を安靜の地に置くは正身端坐に過ぎたるはない。是に於て乎、祖師門下には坐禪を專らとするのである。思ふに端坐は吾人の姿態中最も中正を得たるものである、何となれば吾人は起立の姿勢にある時は頓倒し易く、安臥の狀態にある時は沈睡し易い、隨ひ而して起立の姿勢にある時は精神散亂し、安臥の狀態にある時は心想昏沈するを見る。之に反して正身端坐する時は身

神二つながら安靜にして顚倒困睡の虞なく、脈搏血行、緩ならず急ならず、心調情節、亂れず滯らず、從容優游、自ら高潔の氣品を養ひ光風霽月の襟懷を得るに至るのである。

第三、靜の一字を守れ

然れば則ち靜の一字は吾人が眷々服膺すべき所であると思ふ。

昔し王陽明は其齡十七にして親戚なる江西省の布政使參議の榮職にありたる諸養和の家に假寓したるに、偶、其の女に嬋娟たる一佳人ありて陽明と偕老を契ることとなり、愈々合巹の式を擧げんとする日に方りて、陽明は散步のついで許旌陽なる道敎の一寺院に至り、其殿側に仙骨稜々たる一道者の鹿眉鶴の如くにして盤膝靜坐するに邂逅した。陽明乃ち問ふていふ、道者は何處の人ぞ、道者答ふらく、我は蜀人なるが吾道の伴侶を求めて此に到れり陽明更に其姓名を問ふに道者のいふ、吾れ幼より外遊して姓名を知らず、世人我が時々靜坐するを見て我を呼びて無爲道者

といふと。陽明是に於て道者の狀貌を見るに白髮雪を欺く老齡なるに拘はらず精神健全氣力旺盛にして談笑の聲洪鐘の如くなるを以て其得道の人なるを知り、問ふに神仙養生の術を以てす。時に道者答ていふ、養生の秘訣は唯だ靜の一字に過ぐるのなし、老子の清淨、莊子の逍遙の如し、唯だ清淨にして逍遙するなりと。陽明是に於て乎恍乎として悟る所あり、道者と對坐して兀然槁木の立てるが如く、寢食を忘れ。日の既に暮れたるを知らず、佳人と合晉の式を擧ぐることをも忘る、諸養和は陽明の在らざるを見て大いに愕き使を四方に派して陽明の行方を探したるも遂に目的を達せず、翌日天明に至りて使者は道教の寺院を探したるに陽明は尙ほ道者と嚴然對坐して寸步も動かず。依て使者に呼び促されて始めて歸宅したりといふ。

王陽明は靑春十七歲にして早く旣に靜の一字に悟る所あり、靜坐を樂んで家を忘るゝに至る、洵に學界の龍鳳といふべきである。彼が後に儒と禪とを打して一團とし一派の道學を創唱したるも亦怪むに足らぬ、今の星羣派

文學者たるもの三たび反省する所ありて可なりである。

第四、禪病

斯の如く靜の一字を守るとは吾人が精神の鍛錬上重要の術である。併し靜を守るといふは强ち吾人の心想を遏絕して槁木の如く頑石の如くなるを可とするのではない、若し吾人の精神活動を抑止して無念無想となり、吾人の頭腦を空虛にして恰も虛器空宅の如くならしむるは到底不可能である、假設之を可能なりとするも畢竟無益のことであらう。されば禪家の公案に

昔し一人の老婆ありて庵主(一庵の主僧)を供養すること前後二十年、常に妙齡の女子をして食を送りて給侍せしめたるが、一日老婆は庵主の心操を試んとて女子をして庵主を抱擁して、正當恁麼の時如何と問はしめた、時に庵主のいふ、枯木寒巖に倚て三冬に暖氣なしと。女子歸て此事を老婆に告げたるに老婆は撫然としていふ我二十年只此俗漢を供養したりと。遂に庵主を追放して庵を燒却したりといふ。

蓋し庵主の禪は死禪にして活禪でない、枯木寒巖に倚りて一點の暖氣もない、強ひて心想を杜塞して故らに死灰の如くなる所、宛然石像の羅漢である、斯の如きは眞に禪の正覺を得たものでない、是れ老婆の爲めに追放せられたる所以であらう。「吾人の所謂靜を守るとは精神が其活動を止めるのではない、活動しつゝ其中正を失はぬをいふので、之を譬へば石臼が廻りて活動するも尙ほ其心棒は依然として靜止して動かぬが如くである。また譬へば獨樂が非常なる速度にて廻轉しつゝ一處に靜止して動かぬが如くなるをいふのである。孟子が心を動さずといふたのも這般の心地を指していひ、昔し板倉周防守重宗が茶臼を挽いて心を調ひたのも此用心に外ならぬと思ふ。靜を守るとは換言すれば落着ことで情波識浪の爲めに胸襟を紊されぬやうにするのである。兎角吾人は盲目なる感情に制せられて狂燥煩悶する傾向がある。此盲情の雲の爲めに理性の月を蔽はれぬやうにするが第一の用心である。王陽明は

山中の賊を破るは易く、心中の賊を破るは難し……心腸の寇を掃蕩し

以て廓清平定の功を收めば此れ誠に大丈夫不世出の偉績なり。

といふた。洵に陽明の云ひたる如く盲情は吾人が心中の巨賊なれば其跋扈跳梁を防ぎて之を薫育感化して理性の命令に服從するの習慣を造らねばならぬ。」

第五、妄想を除け

次に吾人が心中の靜謐を破るものは妄想である。妄想とは迷妄なる思惟憶想で、徒らに身心を苦しめ、心緒紛然として麻の亂れたるが如く、爲めに精神惱亂して狂疾を發し、或は沈鬱に陷りて甚しきに至りては自殺することがある。故に吾人は努めて妄想の戎狄を剿討して腦髓の廓清を計らねばならぬ。吾人の實驗する所によるに少壯有爲の人士が腦髓神經の衰弱を誘致し、或は病苦に沈吟し、或は沈鬱性を成し、或は厭世癖を成し、或は虛弱質となり、失心し落膽して煩悶の極、死を欣ふに至るもの往々あるは其原因多くは靑春の盲情に驅られて身體の攝生を愼まざると、妄思迷想を逞

うして精神の疲憊を招くに由るのである。伊藤東涯は心身の關係を論じて

苟も體飢ゑ氣乏しければ心之が爲めに病む、況や肢體變滅し骨肉消散す心何の寓する所あらんや……其老ゆるや鬚眉皓白なり筋力枯瘁すれば精爽亦荒廢す、斯身變滅の後、斯心亦變滅すること知るべきのみ、故に心血肉と相待ちて以て生ず、血肉ありて而して後心あり、心ありて而して後血肉あるにあらざるなり

といふた。吾人は之を以て千古萬古動かすべからざる鐵案と思ふ。廻へす返へすも精神の惱亂は身體の衰弱と伴ふことを忘れてはならぬ。されば こそ坐禪は正身端坐して身體を最も衛生に適したる狀態に安住せしむるを緊要とするなれ。身體が能く調ふ時は精神も自然に調ふて靜安を得るに至る。而して修養の功を積み、工夫の熟するに及んでは必ずしも靜坐を要するではない所謂

行亦禪坐亦禪

となつて起居進退、心を動かさざるに至るのである。中根東里が

老拙近來靜坐を勤め候に付靜立をも致候……靜坐は時を待ち處を擇ぶ事も有之候へども靜立には其差別なく、內にありても外にありても道路を往來するにも心まかせなるべし。

といへるは禪の心を體悉したるものといふべく、彼の愚仲和尙が唱へたる臥禪立禪の說と同揆一轍といふて差支ない。

第六、拘泥の病

凡そ吾人に妄想執著の多いのは餘りに世事に拘泥するより起る、例せば他人の富貴を見ては己れ其人の爲めに貧賤に陷りたる如く妄想し、己れ貴顯の地に登りては他人は皆其臣僕なるが如く妄想し、或は一知半解の學を以つて人生を洞觀したりと妄想し、或は焦螟の微軀を以て鯤鵬の欲を遂んと妄想し、或は老羸癃疾の身を以て神仙長生の術を得んと妄想し、或は愚者にして自ら賢なりと妄想するあり、或は醜女にして自ら美人なりと妄想するあり、太甚しき至りては世間萬般の事件を一より十まで悉く心に掛

け氣を揉みて心配する者もある。是の如きツマラヌ考ひ、ヨケイな心配を妄想といふのである。かゝる妄想多き人は左の如き文を熟讀玩味したならば其病を去るの一助となならう。元政上人が其草庵の壁に題する文に

不幸にして世を背ける墨の衣にはあらず、髪を結はせるむつかしさにあたまを剃り。茅の軒端、竹の柱に身を輕う爰にとめおき、樂む心から浮世を見るに、東西に走り南北に行く人。多くは身を思ふ事業にのみ足を空にして、吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲をい聞ても、燒てしていやりたいとばかり思ひ、後に何になる事ぞや。かく靜かならぬ事は人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さんとて岫を出で、深山の鹿は妻戀ふ世話に聲の限を鳴き明す、是を思ふに此の身程隙に樂な事なし。惠心の作の佛一體もてども、後世を願ふ爲にもあらず、持ち傳へたる道具なれば御宿申すまでなり。極樂へ行きて樂みたいといふ慾がなければ地獄へ落る恐れもなし。死ぬるまで生きて居ようと思へば年のよるもへちまとも思はず。雛のこぼれ種の朝顔も、ゆがまうがすぢろうが、あ

んなものと思ひ。時雨ふる夜の小夜嵐、吹かうと吹ぐまひと我身ひとりの苦にもならず。膝を容るゝ二枚敷一つにて事足り。雜煮くはぬ身には聞かせまいとはいはぬ鶯の聲も快く聞き。夜食もたぬ家にはさすまいともいはぬ依估最負のない窓もる月をながめ。寐る筈の目なれば眠たければ豈もかきこもり。あるく筈の足なれば、手の奴、足の乘物、こゝろの行く所へ迷ひありけど、盗みせぬ身なれば人も咎めず、覺えた事なければ忘れる事もなし。歳を數へた事なければ幾つやらしらず。あら樂や、人めが人と思はねば人をも人と思はざりけり。

深草の元政坊は死なれたり

我身ながらもあはれなりけり

只管世事にのみ屑々として俗塵の中に埋沒し。心を熱し、頭を炊まじめて悶ひ苦みつゝあるもの、此文を一讀せば恰も大いに汗したる人の入浴を試みたる如く、滿腔の汚塵を洗滌するの思ひがあるであらう、春日潛庵云く士君子塵世の中にありて擺脫開くを得て束縛する所とならず、擺脫淨き

を得て汚穢する所とならず、此れを天挺の人豪といふ。

潛庵の謂へる如く塵事に束縛せられず汚穢せられざるは眞に人豪のことなれども如何にせば擺脫の自由を得て汚穢束縛を免るゝか、これ吾人の深く省察を要する所である。

第七、徒らに心力を勞せざれ

大都、妄想も數多ある中にも透底如何ともする能はざる事を意に介して憂悶するより愚なるはない。例せば農夫が人力を以て如何ともすべからざる天候を絶えず其心にかけ、商人が一たび失ひたる利益を絶えず追憶して忘れず、兩親が死せる愛兒の齡を算へて絶えず涙を垂れ、老人が青春の榮華を想ひ起して絶えず老境の不遇をかこつが如きで、此等は全く無用なる心勞である、且つや天下の人、一人として人世の不如意なるを歎せざるはなく、死滅を恐れざるはない。されど人世の不如意なると死滅の避く可らざるとは人力の如何ともする能はざる所である、人力の如何ともする能はざ

る事を意に介し心に憂ふるとも何の所詮もないではないか。元來人世は偶人の意の如くなるべき筈のものでない、若し人世が偶人の意の如くなりて、限りなき慾望を有する個人の思ふが儘に變化し、朝變暮改、浮雲の如くなる個人の意志の如く自由になつたとせば人世は秩序なく法則なく紛糾錯亂し收拾すべからざるに至る。されば人世は吾人が意の如くならずして秩序あり法則あるこそ幸なれ。また死滅の避く可らざるは三歲の童子も知る所であらう、如何に工夫しても如何に計畫しても如何に煩悶しても死の手は必ず吾人に及ぶのである。然れば則ち吾人が死を逭れんとする一切の努力、一切の企圖、一切の工夫は全々無用である、吾人は斯く無要の企圖に身心を磨礱せんよりは寧ろ有益なる事業に貴重なる生命を捧げたら宜しからう。

昔し後漢の孟敏は甑を荷ふて之を地に墮したが顧みもせずして去つた。そこで郭林宗が其意を問ふと孟敏のいふ、甑は已に破れぬ之を視るも何の益あらんと

實に破れたる甑は再び拾ふて視ても何の益もない、然るに未練なる人は碎

けたる陶器の破片を合せて幾度か口惜涙を灑ぐ者が多い。大丈夫の世に處するは孟敏の破甑を顧みざるの意氣を要する、これ亦靜を守るの一法である。

昔し懶瓚禪師遁世して衡嶽の頂上なる石室の中に居を占め歌ふて曰く

世事悠々　不如山丘　臥藤蘿下　塊石枕頭　不朝天子　豈羨諸侯　生死無慮　吾復何憂

時に唐の德宗皇帝懶瓚禪師の名を聞き、使者を遣はして其の石室に到りて宣言すらく、天子詔ありて尊者を召す、宜しく起て恩を謝すべしと。禪師偶〻蕨火を撥き煨芋を尋ねて之を食ふ。寒涕垂れ流れて未だ答へず。使者笑ひ且つ涕を拭はんことを勸む。禪師曰く、我豈閑工夫あつて俗人の爲めに涕を拭はんやと。使者竟に之を致すことを能はず。帝聞て倍〻欽羨を加ふといふ。

懶瓚禪師が鴻德の人たるは言ふまでもなけれども禪師が只管に世に背きたる道風は今日餘りに稱美するには足らぬ。然れども俗より出て俗よりも俗

なる現時の僧風も亦太甚好ましからぬ。要は極端を避くるにある。如何に道人なればとて一切の世事を閑工夫として放擲し、山に入り野に伏して猿鶴と伍を同うする時は個人としては一切の煩累を解脫して安逸ならんも人類に對する義務に於て缺如する所がある。されば朝より暮に至るまで俗惡に沒了して、痔を舐りても車を得んとする卑陋なる心術とならんとは勿論戒むべきである。這は單に僧侶のみに限らず實業に從事しつゝある人人と雖も實業にのみ忙殺せられて、一も他に嗜好もなく、娛樂もなしとせば決して高尙なる氣品を保ち德操を全うすることはできぬ。されば實業の中に居て實業に溺れず、實業の外に一個高尙なる嗜好を必要とする如く、吾人は世海に處して隨波逐浪の客とならず、遠く世海の表に超然たる高標を把持せねばならぬ、換言せば世に處しては俗に溺れず俗を離れず、不離不即の中庸を要するのである。

第八、榮辱を以て意に介せざれ

世人の毀譽褒貶に心を奪はれざるやうにするも守靜の一法である。我國滑稽文學の泰斗たる十返舍一九の生涯は彼が著せる膝栗毛を現實にしたものであつた。

一九、或る臘月の除夜に債鬼の煩はしきを避けんと欲して一友を訪ひたるに、主人大いに歡び、共に痛飲して興闌なる頃、一九起ちて踊らんとして、歳德神の棚に其頭を打ちつけ、とりあへず

正月ははや神田まで來りけん

すぢかひにつる歳德の棚

と吟じ出したる滑稽に隣家なる酒店の主人、之を聞て一九を招くこと頻りなり、一九も否まんともせず、早速隣家に至れば、主人袋棚の戸に時鳥を畫けるを示していふ、時鳥は俗に冥途の鳥なりといへば、不吉此上もなし、先生請ふ歌を以て此不吉を拂ひ給へと、一九乃ち筆を走らして

月は笠鳥のかたちは簑に似て

これや蓑の山ほとゝぎす

と賛をつく。是に於て主人の喜び一方ならず、十二分に酒を侑めて一九を饗したれば一九酩酊して辭し歸らんとする時、ふと風呂桶のあるを見て、此桶拜借なるまじきやといふに、主人いとやすき事なりと答ふ、一九風呂桶を倒まに頭に被りて蹣跚跟蹌として道に出で、往來の人々に衝突することしば〳〵なり、かくして家に歸り。翌朝風呂桶に自ら若水を汲み入れ湯をたて、一浴を試み頗りに心地よしとて悅び居たるに昵近なる近江屋某なるもの新年の祝詞を陳べんとて來りたれば、一九之に酒を飲ましめ且つ入浴は如何といふに、某亦は何よりの馳走なりとて風呂に入る。一九はいそぎ屏風を引き廻らして之を掩ひ、某が脫ぎ置きたる紋附の上下を著けて潛かに家を出で、朋友等の家々を廻りて新年の祝詞を陳べたり。某は斯る事とは露知らずして風呂より出て見るに我衣服と主人の見えざれば、さては例の一九が惡戲ならんと主人の衣服を著て家に歸れば、暫くして一九は某の上下をつけて入り來り新年の御慶と唱ふるに、某も手を拍て大いに笑ひ、それより再び酒宴を催したりといふ。

一場の滑稽劇、一九は彌治郎、近江屋は北八の役を演じたる心地す。世の毀譽褒貶に躊躇する者の企て及ぶべからざる洒落なりといふべし。されど十返舍主人の飄逸滑脫の如きは天賦の材にして摸倣の及ばざる所あり、而して其弊や佚蕩となり、荒淫となり易き傾きがある。圓轉滑脫は惡しきにはあらねども餘りの圓轉滑脫は謹嚴方正の德を損ずる、これ古人が『圓くとも一かどあれや人心』と詠せし所以である。世人の毀譽を一々意に介して喜憂をなすは虛榮心に富みたる小人や婦女子のことである、大丈夫は自ら信ずること深ければ衆愚の喧囂に耳を假して心を勞することはない。

天桂和尙は自ら斷見外道と稱し機鋒峻銳にして極めて識見の高かりし知識なるが、世人の大に己れを嘲けるを聞いて、

まゝよやれすめばこそあれなにはは江に
よしといふともあしといふとも

と詠じて少しも世人の嘲罵を意としなかつた。天桂和尙の雍容自適したる高風は吾人の欽羨に値ひする。凡そ世に媚び人に阿るほど醜きはなく、外

面を粧ひ體裁を作るほど忌はしきものはない。

昔し唐の郭弘霸が侍御史たりし時、大夫魏元忠病に罹りければ僚屬のもの皆往いて其病を問ひたるに獨り弘霸後れて至り、强て請ふて元忠が便液を觀、即ち指に染て之を嘗め以て病の輕重を驗して曰く、甘き者は病瘳えず今幸に味ひ苦がし當に癒ゆべし、患ふる莫れと。然るに元忠は弘霸が阿諛の甚しきを惡みて朝廷に於て此事を公けに人に語り、それより佞人を呼んで嘗糞の徒といふとある。

然るに何時の代にも嘗糞の徒は重く用ひられて骨鯁の士は不遇に終るは歎すべきでないか。

千羊の皮は一狐の腋に如かず
千人の諾々は一士の諤々に如かず

といへる古語を能く〳〵味ふべきである。大は一國より小は一家に長たるものの眞に此語を體認せば國を殆うし、家を滅ぼすやうなことは決してない。また一方に於ては大才あり大器量を有する人にありても己れの用ひられざ

るを憤り世を罵り人を呵し、神を詛ひ物を惡みて遂には自暴自棄するに至る人がある、這は洵に痛ましく惜むべきの至りである。平賀源内が不世出の大材を抱いて世に用ひられず、遂に狂亂を發して死したるが如きは桂枝崑玉を糞土の中に捨てたるものといふべく、惜みてもなほ餘りある次第である。彼れ或時長崎より伽羅木を取寄せ嘗原櫛を造りて之を流行せしめ利を得たることあり、時に狂歌師なる木空卯雲は狂歌を源内に送る、源内此事を記して

用ひれば鼠の子も上尖竿をおぼえ、用ひざれば虎皮褌も地獄の古著店に釣さるとは、

とッと昔の唐人の寐言、眞實に呵らるゝより座なりに響めらるゝが快きは人情なれば、虛言と追從輕薄をいはねば、人、當世を知らぬといふ、抑も此當世といふもの、今ばかり有にあらず。祝鮀が佞有て宋朝が美あらずんば難乎今の世に免れんとあれば、昔より有來の當世にして、八百藏が助六は柏筵が助六なれども、人今更の樣に心得るも片腹いたし。我も此當世を知らざるにはあらねども、萬人の旨より一人

有眼の人をば只及ばずながら、日本の益をなさんとを思ふのみ。或は大諸侯の爲めに計りし事ども國家の大益なきにしもあらざれども、狡兎死して良狗烹られ、飛鳥盡て良弓藏る。細工貧乏人實嗚呼浮いかな我耳垂珠と悟を開き、露命をつなぐ營みに、當時賤しき內職にて糟を食ひ、其錢をせしめんと思ひ付しを、早くも卯雲木空君に尻尾を見出され、おくり給はる狂歌に、

醉て來て小間物見せの御手際は
仕出しの櫛もはやる筈なり

實にや己をしらざるに屈して、己を知るに伸なんといへば、此御答申さんとて、わがまゝ八百を書ちらす、固より己を知らざる人に見せるにはあらず、嵐音七が曰、アゝ氣が違ふたそうな、

かゝる時何と千里のこまもの や
伯樂もなし小づかひもなし

又曰く

鐘子期死して伯牙琴を破りしは世に耳の穴明きたる人なきを知ればなり。

この調子聞てくれねば三味線の
ちりてつとんと引て仕まうぞ

源内が千里の才は到底德川鎖國の代に用ひらるべきにあらず、彼れは遂に伯樂を見出す能はず、『ア、氣が違ふたそうな』といへるが如く眞に發狂して人を殺し鐵窓の下に斃れたのである。思ふに源内は火浣布を造り、エレキテルを製するには巧みなりしも靜の一字を守るには拙なるが如し、是れ彼が終を全うする能はざる所以である。諸葛孔明が、

我心秤の如し人の爲めに低昂を作す能はず

といひたる如く世人の批評や、憎愛の爲めに我心を攪亂せられず常に平衡を失はずして秤の私なきが如くなるは結構である。兎角吾人の心は憎の一方に傾き、或は愛の一方に傾き、或は喜の一方に傾き、或は怒の一方に傾き、喜怒憎愛の盲情の爲めに絶えず兩端に傾きて、平稱を得ることは頗る難い。されば吾人の努めべき所は一方に於て世の毀譽褒貶に心を勞せざると同時に他方には世を是非し人を批評して、恨みを買ひ爭を求むるの非なるをも

悟りて淵默葆光の道を蹈むも亦守靜の一である。芭蕉翁が座右の銘に、

人の短をいふことなかれ、人の長をとくことなかれ

銘に曰

ものいへば唇寒し秋の風

芭蕉が佛頂和尚に參じて古池の一句に禪學の眼を開いて祖門の龍象にも比肩すべき識見を有したるは彼が俳文の中に明確の證據がある。『天地風雅なり萬象風雅なり』といひ、『此風雅は佛祖の骨髓なり』といひ、『造化に歸れ』といふが如きを以て見るべきである。世を是非し人の長短を論ずるは徒らに恨を買ひ爭ひを求むるのみにあらず、己れの德を傷け兼て人を害する患ひあり、且つ情に任せて放言高論する時は憤怒、慨歎、眼を張り、眉を昂げ、唇を嚙み、腕を扼し、掌を撫し、言々句々怒氣を帶び、之に續く流涕大息を以てするに至る。故に側らより之を見れば全く狂人の如く憐むべきものである。かくては吾人が精神の平衡を保ちて德操を完うすることはできぬ。

第九、氣を養ひ膽を大にせよ

小量小膽にして殊に神經質なる人は能く〳〵觀念して心情の妄動を防ぎ、寛雅、豁達の氣象を養はねばならぬ。器局の狹小にして、怯懦に陷り易き弊ある人は下の如き事例を以て其心病を醫すを要す。

相州最乘寺の丁庵和尚の妹に慧春尼と稱する嘖世の女丈夫があつた。慧春は容姿艶麗なる淑女であつたが、其芳紀三十を過ぎて兄なる丁庵和尚に就て出家を求めた。時に和尚のいふ、『出家は大丈夫の事なり、兒女の輩は立ち難くして流れ易し、故に女人を度して法門を汚辱する者多し』と、慧春乃ち退て火爐の邊に行き、鋼鐵の火箸を燒き、赤熱して嬌面を烙き爛らし以て再び進で出家を請ふた。是に於て丁庵和尚も止むを獲ずして之を許したるに慧春は銳意に參禪して遂に悟る所があつた。此時に當りて鎌倉の瑞鹿山には衆くの禪僧ありて人々皆其門に登るを憚りつゝあつた。然るに丁庵和尚一日使者を瑞鹿山に遣はすべき要事出來したる

も門下の雲衲多くは之を難みて往くものがなかつた。此時慧春は挺然衆に抜んじて使命を奉じ鎌倉に赴いた。然るに鎌倉の衆僧中に一人の突飛漢ありて慧春が膽を破らんと欲したるにや、慧春が方丈に上りて主僧と對坐したる時、洗濯盤に茶を點じて之を慧春に與へた。慧春は少しも驚がずして盤を轉じて主僧に與へ、『此は是れ和尚常用底の茶盞、請ふ和尚喫せよ』といひたるに主僧も答ふるに語がなかつたといふ。また一僧ありて慧春の容色に心を奪はれ、切に悃情を通せんことを請ひたるに、慧春のいふ、いと易き事なり、然れども尋常の所にて相見ば人の知る所とならん、日を期して嶮難の地に入りて約を果さん、請ふ倍く勿れと。其僧大いに歡びて曰く、尼若し我願を許さば湯火と雖も辭する所にあらずと。かくして相約したる後一日丁庵和尚上堂して衆僧麕集したる際、慧春赤裸となり傲然として衆中に入り高聲に其僧を召して云ふ、吾汝と約あり速に來りて汝の欲を肆にすべしと。其僧驚走して逃げ去りたりといふ。慧春暮年に臻りて最乘寺三門前の盤石上に薪を積み、自ら火を放ち

て火焔中に入定した。然るに火焔熾んなる頃丁庵和尚來りて問て云く、尼熱きかと。尼烈火の中に聲を抗ていふ、冷熱は生道人の知る所にあらずと。恬然として猛火の中に坐化したといふ。

慧春が跌宕豪邁は其天性に出づるや謂ふ迄もない。されど彼が獅子無畏の安心は參禪によりて得たのである。故に局量偏小の人は是の如き事例に對して工夫を凝し、日夜に提撕して養ふ所深ければ自然に其性癖を矯正して寛厚大度の品性を形成することができやうと思ふ。併し慧春が壯烈なる意氣と其斗大なる膽力は欽すべきも、其麁豪なる風格は決して嘉すべきでない。兎角禪に參したる人士が謹嚴の態度を失ふは全く其弊習であるから學者たるもい注意を怠つてはならぬ。

更に讀者の參考として也有が袋の贊を擧げやう。

器は入るゝ物をして己が方圓に從へんとし、袋は入るゝ物に隨て方圓を必とせず。實なる時は肩に餘り、虛なる時は疊みて懷に隱る。虛實の自在を知る布の一袋。壺中の天地を笑ふべし。

器局狹小なる人は堅固なる器物の如く其内に入る一切の者をして己れが方圓の型に從はしめんとする。是に於て乎、人を容るゝことができぬ。之に反して大度鴻量の人は柔軟なる袋の如く入るゝ物の大小方圓に隨て之を用ふる、是に於て乎、人其用を爲すを樂しむ。且つそれ袋の物たる充實する時は千斤の重みあり、空虛なる時は紙片の如く輕し。大丈夫の出處進退も亦此の如くなりたきものである。神仙の棲むてふ壺中の乾坤も虛實の自由を得たる一布袋には及ばぬといへるは面白き譬喩でないか。

第十、進退を愼むべし

緇門の人として出處進退の宜しきを得たること天龍寺夢窓國師の如きは蓋し稀である。國師は世の諠騷を厭ふて總州退耕庵にて風月を伴として隱棲せられしに後醍醐天皇の鳳詔もだし難く宮中に詣り錦坐を賜はりて禪要を說き叡感斜めならず、强ひて南禪寺に出世せしめられたるは正中二年八月にして國師五十一歳の時であつた。それより嘉曆元年南禪の印を解いて煙霞

の生活に入らんとしたるも尙ほ處々に住山し、元弘三年天皇足利直義に勅して國師を召させられ、臨川寺の主とし給ひ、建武元年再び南禪寺に住して天皇の信嚮益〻深かりしが、京師兵亂の爲め南禪寺を退き、天皇も亦干戈倥偬の間に崩御ましました、其後足利尊氏が天龍寺を創して後醍醐帝の冥福を祈り參らせんとしたる時國師は之が開山と也、康永元年には光嚴上皇國師に就て衣盂を受けられ、天龍寺慶讃の時には勅使山に入りて錦衣紫袍を賜はり、光嚴光明兩帝百官を率ゐて御臨幸あり、盛名朝野を壓したるも間もなく辭して雲居庵に退休せられた、而して光明帝、足利直義、足利尊氏、皇太皇后等北朝の君臣皆國師に隨て弟子の禮をとり、觀應二年後醍醐天皇十三回忌の法要を修してより微疾ありて三會院に退休したるに道俗四方より雲集して衣盂法名を受くる者多く七日を出ずして二千五百餘人の夥しきあり、其間寂するや四衆號哭して鶴林の哀みを再びしたのである、國師世壽七十六にして入寂したるも僧尼を度する四千餘人、弟子の禮を執るもの一千有餘人、闢法の者五十餘員の多きに達し、王公より庶人に臻るま

で瞻仰せざるなく、芳名一代を震蕩し、後醍醐天皇以下七朝の師號を賜はつた、されど國師は九重の優詔に接して毫も褻漫の色なく、武將の歡待を受けて一も倨傲の風なく、瑤宮玉殿に出入して煙霞水石の心を失はず、人天四衆の渴仰を受けて閑雲野鶴の情を捨てず、功成りて之に居らず、名遂げて之を見る土芥の如く、璞玉渾金の如くなりしは洵に一代の鴻匠といふべきである、

月に嘯き雲に眠る處、古渡頭邊を離れず、和泥合水の時、常に孤峯頂上に居ず

といはれたるは能く自己の行履を道破したものと思ふ、國師は當時王公宰臣の歸嚮を受けたるも毫も權勢に阿諛せず卓然として衲僧の面目を保ちつつあつた、されば貞和、觀應の間、新院本院等の鳳輦親しく寺に臨みたるも之に對して送迎の禮を作さず、自ら其理由を記していふ、

原ぬるに夫れ佛法我朝に流通して已來七百餘載に迨び、三百年來佛法日に衰ふ、沙門の形に似て沙門に非る者多し、問ま貴曹高僧教庠大德ある

も其威儀亦弊れ、大都世俗に混ず、若し君王に値へば則ち蹐居恐屈して諸臣の禮に異らず……傳へ聞く大元一統の後、僧家接官の禮太だ篤きが故に緇流皆奴僕の如し……我朝縱へ相將の降臨あるも大衆迎送の禮あるべからず、僧寶傳に曰く神宗皇帝車駕相國寺に幸す、出迎の禮なし、此を以て之を思ふに臨幸の時亦必ず迎送の禮あるべからざる者か。……曲て人情に徇ふ時は世俗に混濫して遂に佛法の衰微を致さん、矧や是れ權勢に媚ぶるより、曲て人情に徇ふをや、曾に沙門の玄軌を失ふのみに匪ず、亦自他無信の罪を招かんこと必せり……我朝禪苑の衰耗を致さん、故に此を略記して以て後代に貽す。

と。以て國師が法を重んじ、道に篤きを見るであらう。狂て人情に徇ひ世に阿る者は他人の一顰一笑に心を勞して到底其精神の安靜を得ることはできぬ。故に夢窓國師の謂へる如く、

月に嘯き雲に眠る所、古渡頭邊を離れず、和泥合水の時、常に孤峯頂上に居す

てふ心操を持たねばならぬ。これ亦守靜の一法である。

第十一、畸行異風を避くべし

權勢に阿らず時潮に溺れざるは大丈夫の操守なるも、さりとて權勢に阿らず時潮の表に超然たりと稱して孤峭狷介、畸行異風、人に異るを以て高しとするの風は宜しくない。吾人は決して畸人を學んではならぬ、庸人の中にありて庸人の爲めに汚されざるを要するのである。俳人梅通のいふ、

世俗には姿にても心にても異樣なるを雅とし、手跡にても器物にても、ゆがみ、もじりたるを雅とす。唐物の道具店を雅物屋などゝいふも同樣なり。是は人我の我にて眞雅にはあらず。雅はみやびとも、たゞしくともよめる文字にて、天地萬物の德をいふなり。手跡も器物もすなほなるが雅なり。公家は公家の姿心、侍は侍の姿心、町人百姓は町人百姓の姿心にてあるが雅なり。さる樓へ上りけるに亭主の好みて造れるにや、幹を臥させ枝を結び、或は舞姫の袖をかざすが如く、あるは仁王のこぶし

をあぐるが如く、さま〳〵曲節を盡したれば面白く、をかしくして詠め居たるに、やがてあるじの出來りて、礬らるゝまゝに一の鉢を指し、此松を見給へや、たゞ枝葉すなほに何事もなく、聊かの曲節もあらねど、此頃の流行にて、人のもてはやし侍るといへり。思の外に覺えて、つくづく見入侍れば幹枝のすなほにて何となく風韻そなはりて愛でたし、其餘の曲節ある松は、やがて見飽して再び愛る心もなくなりぬ。

げに梅通のいへる如く、吾人は畸異にして不自然なるを以て風雅としてはならぬ、自然に生ひ茂れる松の何となく風韻の備はれる如く、吾人の德操も自然に性に從て養はれねばならぬ。世の禪に志すもの往々畸行を爲すを以て得意とし、禪者といへば一種變態の人物の如く思ひ、落語家や講談師が出鱈目に陳べ立つる一休和尚傳などを聞いて眞に禪僧の摸範なりと思へるは笑ふべきの至りである。眞の禪者は禪者らしからず、禪者らしきは未だ禪の臭味を脱せざる未熟の人物なるを知らねばならぬ。されば吾人は維摩經中に描かれたる維摩の如き人物を以て悟道せる居士の標本と見るを要

す、笏をひねくり、十德を著たるのみが居士ではないのである。努め〳〵ヒチクレたる變人とならぬやう心掛ねばならぬ。

俳人芭蕉の如きは只管に隱棲をのみ好みたる道者なれど人情に悖り世故に逆ふヒチクレ者ではなかつた、否、彼が人情に篤くして、其臨終の際に迄、破門したる門人路通がことを去來に遺囑して逝きたるが如きは古今の美談である。

芭蕉翁江戸にありし頃、祐天上人に歸依したる某の家に請せられ、上人とも面會し懇親を結びけるが、翁は其後何故ありてか絶えて上人を訪はざれば、上人より使僧を遣はされ頻りに招かれければ、翁も漸くにして上人を訪はれたり。時に上人久しく翁を見ざれば懷かしさに耐へずとて何故に斯く疎んじ給ふぞと問はれたるに、翁は莞爾と打ち笑ひ、上人には去る頃御弟子を破門せられし由承りたる爲めなりと答ふ。上人の曰く、彼弟子は僞筆の名號を作りて世に施したる罪輕からず、是を以て破門し侍るなりと。翁曰く、人一朝の過ちあるは其常なり、且つ昔く名號を弘

むるは誠罪教道の建立なれば、僞筆をも上人と尊ばるゝぞ思し立に叶へるに非ずや、又僞筆する程の御弟子こそ上人の寶なれ。惜い哉。人一人廢れさせしこと大事なり。今迄上人を尊敬せしは我愚かなり、我も聊か道の建立に心を置けるもの、何故詳しく諮られざりし、我の等閑に參らざりしも之が爲めのみと。上人覺えず手を拍ち、善哉〳〵、我過てり、子が温潤今我れ之を耻づといはれ、頓て弟子を尋ねて復歸を許しけるとなん。

蕉翁が慈愛深く物を憐み人を愛するの至誠は感ずべきである。太田南畝も亦風流洒落を旨とせる人物なれど人情には篤かりし。

十返舍一九ある時太田南畝を其邸に訪ひたるに南畝之を客室に待たしめ、刻を移せども面會せず、一九も餘りの待久しさに堪へずして遂に歸り去りぬ。其後一九南畝に遭ひたる時、先生何故に吾を客室に打捨て置きしぞと詰れば、南畝笑て曰ふ、貴殿こそ吾を弄びたれ、吾は足下と快く飲まんと欲せしに不幸にして囊中無一物なりしかば庭中の桐を下駄商に賣

りて辛うじて錢を得たりしに足下は早くも去りてあらず　是れ吾を弄びしにあらずやと。

以て洒落跌宕の中に謂ふべからざる親愛の籠れるを見るべし。天桂和尚が鬼をも挫がんずる機鋒を以てして尙ほ小蟻を憐み熱湯を地に捨つるを禁じたるが如き、古人が用意のある所を知るべきである。然れば則ち畸言異行を以て高しとするも亦未だ精神の善く調はざる證左であるといふて宜しい。

第十二、似て非なる洒落を戒むべし

洒々落々として事物の假相に執著せざるは守靜の用心として大切のことなれども、似て非なる洒落は大に戒むべきである。

王陽明が許泰、張忠等の讒奏に逢ひ、進退全く谷まりて蕪湖に留まりし時、一夜默坐して波浪の岸を拍ち、汩々として聲あるを聞き歎じて曰く、一身を以つて謗を蒙る、死せば則ち死せんのみ老親を如何せんと。門人を顧みて謂く。此時若し一の孔ありて以て父を竊み以て逃るべきあらば

吾れ亦終身長く往て悔いずと。

陽明が孝は古今其匹儔を得る罕なり、老佛の虚淡を學びて其弊に陥らざるは最も稱すべきである。由來禪は假相に執著するを嫌ふが故に動もすれば倫常を破りて顧みざるの弊に陥り易し、大いに戒しむべきである。

王陽明は其祖母岑太夫人の訃を聞き、又其父海日翁疾あるの報を得て、上疏して歸省を請ひたるも、適福州の叛徒鎮定の命あり、重ねて寧王の變に遇ひ、歸省を乞ふて止まず、四度上疏して請ふ所あり、海日翁の病篤きを聞いて職を棄て逃れ歸らんと欲し、一日諸友に問ふ、吾れ逃れ回らんと欲す何ぞ一人の贊行者なきやと。門人周仲曰く、先生思歸の一念亦相に執著するに似たりと。陽明良や久くして曰く、此相は安んぞ能く執著せざらんと。

假相に執著するを嫌ふとて孝道を廢すべきではない、孝を捨て慈を離れ親を顧みず子孫を遠けて以て洒落なり高潔なりとするは大邪見である。

王陽明曰く、君子の所謂瀉落は曠蕩放逸の謂に非るなり。乃ち其心體は

慾に累はされず、入るとして自得せざることなきの謂のみ。夫れ心の本體は即ち天理なり、天地の靈覺は所謂良知なり、君子戒慎恐懼の工夫は時として或は間斷あることなければ則ち天理常に存して其昭明靈覺の本體、自ら蔽ふ所なく、自ら援る所なく、自ら餒ゆる所なく、動容周旋して禮に中り、心に欲する所に從ふて矩を踰えず、斯れ乃ち所謂眞の瀉落なり、是の瀉落は天理の常存に生じ、天理の常存は戒慎恐懼の間斷なきに生ず、孰れか畏敬の心は反つて瀉落の累となると謂ふや。

洒落と曠蕩とを同一と心得たる野狐禪者は能く此文を以て藥石とすべきである。

第十三、威儀を莊重にすべし

かゝれば靜を守り定に安んせんには威儀を嚴にして苟も惰容頽姿、自墮落の風あるべからず。

昔し足利直義が勅を傳へて友梅和尚をして萬壽寺に住せしめんとしたる

に和尚固く辭して就かず、良峯に潛匿すること二年に迫ぶ。依て赤松則村親しく良峯に往きて闕を排して懇請したるが、通身汗を出し、後に人に語りていふ、吾れ百萬の軍を馳突したる勇士なるも、今老師の面前に頃刻跪請するに威稜人に迫りて怯懾して兒の如くなりしと。

以て如何に友梅和尚が威儀の嚴然たるを知るべきである。高祖道元禪師示し給はく、

丹霞天然禪師は木佛を燒く、是れらこそ惡事と見えたれども一段の說法の施設なり、彼の師の行狀記を見るに坐するに必ず儀あり、立するに必ず禮あり、常に貴き賓客に向へるが如し。暫時の坐にも必ず跏趺して叉手す。常住物を守ること眼睛の如くす。勤修するものあれば必ず之を賀す。少善なれども是を重くす、常途の行狀ことに勝れたり。彼記をとゞめて今の世までも叢林の龜鑑とするなり。

世人が木佛畫像を禮拜するに反して丹霞は木佛を燒いて薪としたる有名の禪僧である。然れども丹霞は磊暴なる振舞を好んだ人ではない。否、寧ろ

謹嚴方正なる禪僧であつた。威儀を儼にし進退坐作を閑雅にするは守靜の方便として缺くべからざる所である。

高雄の僧文覺上人は豪邁跌宕にして繩墨に制せられざる荒法師なるは何人も知る所なるが、西行法師を惡むこと甚しく、常に謂ふ、我若し西行を見ば彼が頭を打割らずんば止まずと、然るに或年高雄の法華會に西行來り會して文覺の坊に就て一宿せんことを乞ひたれば、文覺は豫て期したることゝて、松の大木の如き腕を摩して待つ所に西行入來れり。それより懇談して深更に及び舊知音の如くなりき。翌朝に至りて西行辭し還りたる後、徒弟等文覺に何故平生の大言に背けるやを問ひしに、文覺のいふ、彼法師は文覺に打たるべき顏つきにあらず、却て文覺をこそ打たんずれと。

以て西行の威儀儼然として犯すべからざる風采を想見するに足る。且つや威儀を整ふるは繪を畫き、文字を寫し、弓を射り、砲を放ち、劍を擊ち、詩歌を詠ずる等萬般の藝術に缺くべからざる所である。されば、にや、歌仙

藤原俊成は常に古き淨衣を著け、正坐して桐火桶を抱き、心を凝らして歌を詠じ、藤原定家は南面の障子を開き、遠く外を望んで、衣を整へ正坐して筆を執るを常とした。古より有名なる歌人が寢そべりかへりて大の字なりになつて歌をよみたる者は一人もない。

第十四、憤恨の情を制遏すべし

また憤怒怨恨ほど甚しく吾人の心を攪亂するものはない。愼み戒めて怒瞋を發せぬやう注意するを要する。高祖大師示してのたまはく、

惡口を以て僧を呵責し毀呰すること莫れ、設ひ惡人不當なりとも左右なく惡くみ毀ることなかれ。先づいかにわろしといふとも、四人已上集會しぬればこれ僧體にて國の重寶なり。最も歸敬すべきなり。若は師匠知識にてもあれ、弟子不當ならば慈悲心老婆心にて敎訓誘引すべし。其時設ひ打べきをば打ち呵責すべきをば呵責すとも、毀呰謗言の心を發すべからず。先師天童和尙住持の時、僧堂にて衆僧坐禪の時、眠りを誡しむ

るに履を以て打ち謗言呵責せしかども、衆僧皆打たるゝを喜び讚歎しき。或時亦上堂の次でに云く、我れ既に老後今は衆を辭し菴に住して老を扶けて居るべけれども衆の知識として各々の迷を破り道を授けんが爲めに住持人たり。是に依て或は呵責の詞を出し、竹篦打擲等のことを行ず。是頗る怖れあり。然れども佛に代て化儀を揚る式なり。諸兄弟慈悲を以て是を許し給へといへば、衆僧皆流涕しき云々

天童古佛が徹骨徹髓の親切、老婆心の溢るゝ所、眼に見るが如くである。瞋恚は火の如くカッと一時に燃えたつものなれば兎角制し難き情なれども方便して之を抑止すれば忽ちに散じてしまう。瞋恚の盛なる時は佛祖の大悲を心に念ずるが好方便なれども何人にも行ひ易きは數息觀である。數息觀とは吾人が呼吸二息の中宜しきに隨て一息を數ふるのである。即ち自己の呼息若くは吸息を一つ二つ三つ四つ五つと算へて、更に還て一つ二つ三つ四つ五つと計へ、幾回も〳〵も之を反覆すると自然に精神は落ちつく者である。瞋恚の次に吾人の心を動搖するものは爭論。諍鬪である。禪は無

諍三昧とさへいへば爭はずして勝つのを緊要とする。塚原卜傳は劍道の玄妙を極めたる達人なるは人の能く知る所である。

卜傳諸國武者修行の折り、江州坂本邊より船に乘りて矢橋の浦に渡らんとしけるに船中に四十歳ばかりの髭黑く骨大なる男子ありて頻りに劍術を自慢し傍若無人の高言を吐きける。卜傳始めは狸寢入してありしが餘り片腹痛さに彼男子に向て、御高論の程耳を驚かす計りに候。但し劍術の高慢は聊か心得難し、吾等も若年の頃より隨分修行しつれど元來不器用にて未だ全く用にたち申さず、然しながら稽古の御蔭を以て人に勝たんことを欲せず、只人に負けぬやうに工夫する外なしといひければ、彼男子カラ〳〵と高笑して、さあらば御坊の劍道は何流ぞと問ふ、卜傳答ふらく、右に申す如く人に負けぬを旨とする故に無手勝流と申すと、男子問ふ、無手勝流ならば御坊の腰に帶したる兩刀は何の爲ぞと。卜傳曰く、以心傳心の二刀は我慢の鋒を切り折て惡念の萌すを斷ち去るなりと。彼男子曰く、然らば吾御坊と仕合せんに手なくて勝ち申さんやと。時に

卜傳莞爾として笑ひつゝ言ひけるやう、吾等が心性の利劍は禪家の所謂活人劍と對するもの、暴惡なれば忽ちに殺人劍となると。其時彼男子大いに怒り船頭に向て、此船急ぎ押し著よ、陸に上りて勝負を決すべしと敦圉に、卜傳少しも駭かず船頭を始め乘合の人々に潛かに目くばせしていふ、思ひ設けぬ仕合なれど互に申募りたる儀なれば今は早辭し難し、併し陸に上ての勝負は往來の迷惑なるべければ彼處に見ゆる辛崎の離島にて人に負けぬ無手勝流を見參に入申すべし、此船中の人々には急ぎの旅行も侍るべけれど今日乘合の不肖、島まで船押させて御見物賴み入と て船を頻りに漕せけるが、彼島に著くと等しく彼男子はヒラリ岸に跳び上り足蹈み直し太刀を拔き、御坊遲しと罵れば、卜傳は、某の流は氣を臍下に收めざれば立合ぬ習なり、姑く待給はるべしといひつゝ、裝をとりて高く夾み腰に帶したる兩刀は船頭に預け置くとて拔き捨て、水棹を押し立て船邊に立上り、スワヤ對岸へ跳り上るかと見れば左はなくて船を沖合に突き出し自ら艪を押して立去らんとするに、彼男子、卑怯なり

御坊何故此方へ上らぬかと高聲に呼はりければ、卜傳、何しにそれへ參るべき、若し殘念に思召さば水中を游ぎ越し、向の地へ來らるべし、一則の話頭を授けて引導せん、無手勝流とは是なりと高笑して漕き退く、彼男子地段駄蹈み、憎し、汚し、返せ、戻せと聲を限りに罵れども卜傳耳にも入れず、一町計隔て扇を開き打ち靡き、吾流の極秘傳、定めて殊勝に侍りなん、さらば〳〵と言ひ捨て山田村へ驅け上り野路を指して去りけるとぞ。

敵と諍はずして敵に勝つ卜傳が無手勝流能く禪の本旨に契ふたものである。以心傳心の兩刀は我慢の鋒を切り折り惡念の萌ゆるを斷ち去るといひ、吾流は氣を臍下に收めねば立合はぬといふが如き玩味すべき文字である。これと異音同調なる話しは、

本間孫四郎資氏、無雙なる射御の達人にて鹽谷判官高貞が龍馬を後醍醐帝に進奏したる時、資氏召し出されて試み乘りたるに飛龍の雲を動かし、猛虎の山を翔る如く見る人感激して肝を消さぬはなかりしといふ。或時

門下の高弟、資氏に向ひ乘馬の秘術を問ひけるに、棧を過ぐるに口訣あり、これ第一の大事なり、然れども此故實は未熟の族に傳へ難しと云ふ、是に於て高弟頻りに其口訣を懇望しける。資氏然らばとて師弟乘り連れ三里計も行きて谷川に架したる棧あるに至り、資氏先づ棧のもとにてユラリと馬を降り、此處こそ大事なれ、吾等が秘術を能く見候へと云ひながら、馬の口をとりて徐ろに棧を渡りて再び馬に乘りけり。高弟は目をも離さず之を見て奇異の思ひをなし、何條の御傳授とも更に辨ふる處なしと不審しければ、資氏さればとよ、此谷川の分際、設ひ棧なくとも一鞭あてたらましかば最と安く飛び越すべし、まして棧上を乘らんに何の仔細か侍るべき、然ども資氏乘りて渡らば却て吾邊に危難を傳ふると云ふ者なり、凡て棧を乘るのみにも限らず、軒端わたしなんどいふ術も皆人の目を悅ばするまでの儀なれば、相搆へて自今以後無用の所作を好むべからず、危き功名はせぬに如かじ、若し畢竟大事の業といふは其身を全うせん爲めなり、若し止むとを得ず敵の多勢に相圍まれ、脫るゝ方な

きに於ては死を一途に決する事、忠と云ひ義と云ふ弓馬の家の肝要なり。穴賢、人に傳ふべからず、藝術の極秘傳これまでにて侍るとて打述て歸りしとぞ。

弓馬鎗劍何れか身を衛る藝術にあらざる、若し藝術を頼みて自ら危きに陷らば始めより藝術なきには如かず。能く游ぐ者は溺れ、能く御する者は落つとかや、豈管に藝術のみならんや、身を修め道を行ふ者は必ず此心得がなくてはならぬ。卜傳が無手勝流は無詩三味にして資氏が藝術の秘傳は祖師の心印とも見るべきである。

第十五、我見を去るべし

瞋恚といひ諍鬪といふも畢竟は我執の強きより起るが故に我執を除くは守靜の一法である。されば伊藤仁齋も

己れを忘るゝは則ち聖に入るの要路。己れを有とするは則ち邪に陷るの深坑、慎まざるべけんや。

といふて居る。何事にも自己を中心として事物を考ふるは凡夫の妄情にて最も憐むべきである。豚は世界を以て己が爲めに造られたりと思ひ、獅子は百獸を以て己が食物として造られたりと思ひ、虱は天下の人を以て己が爲めに生活すと思はん、人も亦是の如く自己を中心として萬物は己が爲めに備へられたりと妄想しつゝある。是に於て乎、私利私慾の念熾んにして衝突紛爭の絶え間がない。我執强き時は賢者も其德を損じ、智者も其才を昧まし、仁者も其惠を失ふ。竹馬抄に、

よくもわしくも我しつる事なればとて其儘に心をも通し振まふは第一の難なり……坐禪する僧達などは、生れつきより利根なる事はなきも、心を閑かに諸事に明かなりとある。古語に、

君子の力は牛に勝れり、然れども牛と爭はず

といへるも我執を張りて人と諍はざるをいふたのである。古へより我見の角を振りたてゝ、人と爭ひたる法師も多きが中に叡山の大衆ほど横暴を逞うしたものはなからう。天龍寺落成のきざみ、足利尊氏奏して後醍醐天皇

の七回忌法要を勤修し光嚴上皇の御臨幸を請ひ、夢窓國師を導師とせんとしたるに、叡山の僧徒は禪宗の盛大を惡み國師の芳譽を嫉みて移牒していふ、

夢窓法師邪法を興張す、是れ罰せざるべからず、聖天子の靈跡を以て自住の禪室となす、乞丐の僧棲を以て勅願寺と稱し、將に帝怒を動かさんとす、奇怪の甚しきなり、王法佛法の滅期といふべし。宜しく夢窓を罰し急に犬神人に命じて其寺を破毀すべし。

と罵り、三塔會議して上疏していふ、

我祖師比叡山を闢き……以て國家を鎮護す、今達摩宗に歸依し龜山の皇居を點じて天龍寺を建て以て勅願所と爲し、將に供養を行はんとす、是れ亡國の兆、大敎陵夷の甚しきなり。夫禪法は四敎三觀の惡敵、不立文字の宗は則ち三密四曼の違文なり、宋主之を興して蒙古國を奪ふ。今日域に蔓衍す、法滅將に近きに在んとす。請ふ速かに天龍寺を毀ち、疎石(國師の諱)を流さん云々。

と嗷訴して止まず、日吉神輿を京に入れんと謀り、衆徒數輩上皇の宮に至り三千の大衆の奏狀を上りて陳辯すらく、

禪法興行中古來數、山門の訴を煩はす、後鳥羽院の朝、榮西能忍等此宗を京師に弘め、因て南都北嶺の騷動を致す……建久に僧源空專修念佛を興張し、山門抗訴して之を止む。延いて嘉祿に至り猶ほ餘殃を戒め、法然が墳墓を毀ち、其徒弟隆寛、幸西、空阿等悉く之を放流す、此等の先蹤鳳文未だ朽ちず、山門の申す所、固より新儀に非ず、若し之を疑ば則ち有職に問ひ史冊を披かば掌を指して明かなり……抑も亦之を聞く、寺を造り僧を度するは禪宗の本分に非ず、達磨、梁の武帝に對へし功德なしと稱す、故に寺を叢林と稱す、是れ樹下石上を以て其居と爲せばなり。今其本旨を忘れて輙ち末を事とし、傑閣壯麗なるを作り、泉石風流彫琢して費を廢す。之に加ふるに飲食衣服、器玩醫藥、之を異方に求め、之を絶域に搜し、門徒黨を結んで權家に出入し、輙ち佛事と稱して民の家財を竭す、其風日に月に益甚し、眞子單傳の正宗、見性悟道の本旨、

安くに在るや、關東先代の亡ぶる前鑑遠からず、後嵯峨、龜山、後宇多の三朝、禪法に歸依す、今其繼體如何ぞや……是を以て群議して疎石を遠竄して禪院を灰燼に付せんと欲し、三塔咸盡く扼腕して起つ、耆老慰諭して且く折中し宜しきを酌み、疎石を放ち勅願を廢し、車駕の臨幸を停むれば則ち衆怒を安んずるに足り而して事靜定せん云々

と放言して喊々として神輿を中堂に動かし、九重に迫らんと揚言したるも門主の應せざるが爲めに之を强迫して曰く、

禪徒の風、翫ぶ所の者は莊老、外敎を以て極となす、修むる所の者は胸臆邪念、心を以て師と爲し、經論聖敎、徒に溢るも閑する莫し、名を佛子に假り、居を叢林に卜し、世財を糜し、國法を貪る、是れ特り外道たるのみにあらず抑亦國賊にあらずや。況や疎石の威儀、八宗曾て傍例なし、五家其義を聞かず、佛像を彫り、精舍を起して經義に依らず、先哲を守らず、山水を搆へ以て緇素の心を誑かし、樓閣を造り以て貴賤の眼を眩ます。疎石の如き者は固より遠島に放流すべし……我叡慮は王城の民

に在て維に魑魅妖怪を鎭め以て十善を護る。今禪徒の爲めに漸く將に陵夷せんとす云々

といひ强ひて貴主をして訴へしめたるも志を得ず、止むなく東大寺に移牒して曰く、

近ごろ禪法年を逐ふて倍增し、今天龍寺供養の儀、勅願たり、駕將に親臨せんとす、彌陀の威光、諸宗殆んど面目を失ふ、舊典を檢するに萬乘、駕を促して百司儀を備へ以て供養を遂る者は唯貴寺と當山とのみ……當今京の内外なる大小の禪院を擧て悉く之を破毀し、疎石を捕へて遠く之を竄し、以て永く禪法の跡を絶つに如かず、請ふ速かに一旅を起し以て九重の聽を驚さんことを云々

更に興福寺に移牒して曰く、

近年禪法天下に喧しく暗證の黨人間に充滿す、本寺本山の威光、白日蔽はれ公家武家の偏執、迷雲晴れず、若し禁遏せざれば諸宗殲滅せん云々

と南都の僧徒を煽動し、熾んに示威、脅迫、恫喝を加へたるも何等の効果

なく天龍寺の慶讃は無事に其盛儀を畢り、夢窓國師は毫も彼等衆徒と爭はずして倍、公武の歸嚮敬信する所となつた。思ふに山徒の謂ふ所、一に我見を本とし、猜忌、嫉妬、傲慢、執拗の振舞なれば自ら山門の威光を傷けたに過ぎぬのである。嗟乎、道に志す者、何ぞ早く我執を去らざる、我執一たび去れば渙然として氷の溶くるが如く心意の暢達して、謂ふべからざる樂みを感ずるであらう。王陽明が壁書に、

氣を動かし勝を求め、傲を長じ非を遂ぐるを得ざれ。務めは默して之を成し、言はずして信ずるにあり。其れ或は己の長を矜り、人の短を攻め、粗心浮氣、嬌めて以て名を沽り、訐くを以て直と爲し、勝心を挾みて憤嫉を行ひ、族を圮り群を敗るを以て志と爲さば則ち日に講じ時に習ふと雖も、此れに於て亦益なからん

とある。況や日に講じ時に習はずして徒らに粗心浮氣、勝心を挾みて憤嫉を事とするをや。勝心を挾みて事に當る時は却て敗るゝを常とす。碁を圍み、雙六を弄び、球を打ちなどするにも勝たん〳〵と心掛けて氣をあせる

時は眼眩みて不覺をとること多し。富田五郎左衛門入道勢源は有名なる中條流の劍客であつた、

永祿三年の頃、勢源濃州に遊びしに國守齋藤義龍の師範役たる梅津といへるは神道流の名人にて、勢源の來りたるを聞き、弟子を遣はして仕合を申込み、是非共中條流の小太刀を見たしと所望した。然るに勢源のいふやう、愚僧は兵法未熟なれば望みに應じ難し、また中條流には仕合といふことなしと。梅津此答を聞いて、我兵法は關東に隱れなし、勢源も此梅津には及ぶべからず、設ひ當國の主たりとも仕合に於ては容赦すべからずと高言しければ、齋藤義龍仄かに梅津の大言を聞き使臣を遣はして勢源の旅宿に就て梅津と仕合の儀を所望した。其時勢源は中條流には仕合なし、無益の勝負は好まざる所なりと只管に辭したれども、梅津が過言は他國迄の聞りなれば偏へに仕合願はしとて强ひて所望せられ、止むなく承引に及んだ。是に於て義龍は大いに喜び仕合の場所は武藤淡路守の宅と定め七月廿三日辰の刻に行ふべき旨を達した。梅津は之を聞て

其夜より勝利の儀を神々に祈誓しつれど、勢源は心さへ直ければ祈らずとても可なりとて供人四五人を召しつれ、淡路守宅に往き、薪の中より一尺二三寸の割木を見出し本を皮にて卷きて用意し、梅津は弟子數十人をつれ、木刀の長さ三尺四五寸なるを八角にけづり錦の袋に入れて持せ、器量骨柄人に勝れて見ゆれば必定梅津の勝と人々取沙汰した。梅津は檢使に向て願くは白刃にて勝負仕り度しといふに、勢源は對手は設ひ白刃なりとも我は此木刀にて宜しと答へたれば、梅津も木刀と定め、空色の小袖、木綿袴にて木太刀を右脇に構へたる氣色は龍の雲を起し虎の風に向ふが如く、眼は爛々とし電光の如くであつた。時に勢源は柳色の小袖、半袴をきて立上り、割木を提げ優然として立ちたる風情は牡丹花下の睡猫の如くであつた。二人氣合を入るゝや、梅津は忽ち小鬢より二の腕を打たれ、つゞいて頭を打切られ、流血斑々たる中にも木太刀を取直して振上げ打込めば、勢源少しも騷がずして再び梅津が右腕を打てば、梅津は勢源が前に倒れ持ちたる木太刀は勢源が脚下にわたるを一脚に蹈み折

りて飛ぶ。梅津起き上りて懷中の脇指を拔きて勢源を突かんとするを勢源一刀に打倒した。義龍勢源の秘術を感賞わりて多くの贈物をなしたれども勢源少しも受けずして歸國したといふ。

見よ、梅津は勝負の心あり、勢源は勝負の心なし、前者は龍虎の如く荒れ、後者は睡猫の如く靜かなり、勝敗の數是に於て定る。必ずしも劍相打ち、刀相磨して後知るべきではない。治心の術も亦是の如く、勝負の念が胸裏に往來するやうでは早晩破綻を生じて其効を全うすることはできぬ。

第十六、澄心の方便

心を靜かにし氣を淨むる手段としては古來種々の法あれども、心を一處に定住するを主とするので、例せば手掌の上に眼を注ぎて心を定住し、或は目前三尺の地を凝視して精神を安住し、或は鼻頭の白きを見て心を安じ、或は精神を眉間にあらしむる等、何れも精神の散亂を防ぐに外ならぬ。精神の散亂を防ぐとは雜念を起さぬやうにするのである。譬へば吾人が理髮

店に往きて鼻の孔を剃らるゝ時の如くするのである。鼻の孔を剃らるゝ時に方りて眼前の姿見鏡に映ずる往來の人を見て、老婆の畸形を笑ひ、下婢の肥滿を嘲り、犬の諠譁を喜び、猫の魚を盜むを叱したならば、幾度か吾人は鼻を斬られるであらう。されど餘念なく精神を鼻孔に集て靜かに坐する時は理髮師に鼻を斫らゝる憂はない。また彼輕技師を見るに精神は常に其脚頭に安じつゝあり、若し輕技師にして演藝中、餘念を交へて其情婦などを思ひ、精神の散佚を來さんか忽ちにして高所より顚墜するや必せり。要は一心の亂れざるが技藝の根本となるのである。されば猫は靜かにして能く鼠を捕へ、鷺は眠れるが如くにして能く魚を捉へる。不倒翁紙製の達磨が七顚八倒して能く其中正を失はざるは其胸中虛淡なるに因る。船は中虛なれば水に溺れず。杯は中虛なれば酒を盛り、人は虛心坦懷にして始めて道の器たるに足るのである。

大綱和尙或時瓢を畫き之に題して曰く、

瓢や、瓢や、汝眞桑瓜の位もなく、西瓜の暑を拂ふ德もなし、しかれ

ども氣も輕く、中空くして無欲なれば、仙人も汝を友として酒を入れて腰に携へ、或は駒を出して樂めり。汝瓜の類に居て庖刀の難にあはざるは智なり、餘を押へて追れしむるは仁なり、羽柴公の馬印となりて强敵をくだくは勇なり、汝性は善なりといふべし。

うかうかとくらすやうでも瓢賣の
胸のあたりにしめくゝりあり

瓢賣の中空にして智仁勇の三德を兼備し、胸のあたりに占めくゝりある所大いに稱すべきである。また船に醉ひ滊車に醉ふなどの苦しみも虛心の者は能く免れ、神經質の者は多く之に苦しむ。是皆精神の然らしむる所なれば努めて虛靜を以て精神を養はねばならぬ。

白隱禪師或時兵庫にて船を傭ひたるに同舟の人々皆月に對して談笑しつつあり。白隱禪師は獨り兀然として坐定し、其儘甘睡しけるが、其夜颶風暴かに至り、全舟の人面色土の如く、神を祈り佛に禱りて生命を全うせんとし、手巾を以て頭を縛するあり、土器に對して嘔吐するあり、轉

顛狼藉、死尸の如く氣息奄々たるあり。此大混雜の中にありて白隱禪師一人斯聲雷の如くなれば、船主も大いに驚歎していふ、吾海上を往來すること多年、未だ曾て白隱の如き大膽の僧を見ずと。

これ白隱禪師が精神の虛靜なるの然らしむる所にして決して怪しむに足らぬ。予は本年六歲なる小童を携へて老母と共に靈岸嶋より滊船に搭じ熱海に向ひたるに海上不穩にして婦女子の船暈に苦しむもの多く、老母亦眩暈して殆んど起つ能はず、予は努めて靜坐したるも猶ほ頭痛を免れず、獨り六歲の小童は波濤の懼るべきを知らず、酣睡昏々として母の懷ろに臥したるが如くであつた。是亦虛心坦懷の德である。

第十七、神を閑かにし氣を定むべし

王陽明逆賊宸濠を討て之を滅ぼし偉勳赫々たりし時、張忠、許泰、劉暈の三姦は陽明を妬み、如何にしもして其芳名を傷けんと計りたるが、王陽明は南人なれば必ず騎射に習熟せざるべしと推測して、之に出りて陽

明を辱しめんと企て、演武に託して射技を較べんと提言した。されど陽明は謙卑して之を辭したるも彼等は豫め思ひ設けたることとて再三再四迫りて止まず。陽明止むを得ずして對ていふ、某は書生なり何ぞ諸公と射を較べん。諸公請ふ先づ射よと。三姦以爲らく陽明果して射を習はずと、意氣大いに倨りて相謂て曰く、吾等先づ射て而して後王先生の射を見んと。軍士をして的を千百二十步外に設けしめ、三人雁行して進み、張忠中に居り、劉暈許泰は左右に立ちて的に向ふ。南北二軍の兵士は東西に立ち列びて之を看るもの堵の如くであつた。三人は弓を彎くこと滿月の如く、箭を放つこと流星の如くにして一發また一發、見る所の兵士叫聲山岳を動かし、遂に九矢を放ちたるが單に許泰の一矢のみ鵠の上に中り、張忠の一箭鵠角に中りたるのみ。是に於て三姦少しく愧ぢて辯疏していふ、聖駕に隨ひしより久しく弓箭を執らず、爲めに疎を生じたり、王先生の射を敎へられんことを求むと。王陽明辭讓すれども許さず、乃ち弓矢をとり來りて手を擧げて許泰等に向て曰く、下官固より初學、笑はれ

て止まんのみと。陽明從容として獨り射場に立出づれば衆人環視し、三姦は眼を光らし、笑を含みて之を觀る。此時陽明神閑かに氣定り左手は泰山に托する如く、右手は嬰兒を抱くが如く颯的一箭、正に鵠心を貫く。軍士連聲に喝采して其巧妙を稱す。許泰等心中大いに快らずしていふ、是れ偶然のみと。陽明更に兩矢を發したるに皆的中したれば軍士歡呼の聲天地に震ふ云々。

陽明神閑に氣定りといへる所に眼を著けて見るべきである。胸中に一點の之乎者也を入れず。氣海丹田に力を充たすは禪にのみ必要なのではない、所有藝術に此心得がなくては其玄妙には達せられぬ。

塚原卜傳諸國を修行して常州に歸り、最後に其家督を立んと欲して三子の技倆を試んと欲し、木枕を以て暖簾の上に置き、先づ嫡子を召したるに、彼は見越の術を以て之を見出し、其木枕をとりて座に入りたり。卜傳また前の如くにして第二子を召す、第二子暖簾を開かんとするに木枕飛び落ちたれば刀を按し愼んで座に入る。次に前の如くにして第三子を

召したるに第三子暖簾を開かんとする時木枕上より落ちたれば忽ち刀を拔て之を斬りて座に入りたり。卜傳嫡子彥四郎が精神の落着たるを感じて之に相傳を許したりといふ。

祖師門下の相傳も亦之に似たるものあり、

達磨大師門人に謂て云く、時將に到らんとす蓋ぞ各其所得を言はざる。時に門人道副曰く、我見る所の如きは文字を執せず文字を離れずと。尼總持曰く、我解する所の如きは慶喜が阿閦佛國を見て一見更に再見せざるが如しと。道育の曰く、四大本空、五蘊有に非ず、我見る處一法の得べきなしと。最後に慧可、三拜して位に依て立つ。是に於て達磨慧可に法を傳へて第二祖となす。

見よ、達磨の門人道副、道育、尼總持、三人の見地尋常にあらず、其謂ふ所大いに稱すべきものあり、然るに慧可は一言をも費やさずして從容として三拜したるのみ。而して第二祖の月桂冠は此人の頭上に落ちた。達磨の慧可に相傳を許したるとト傳の劍法を彥四郎に許したるも事實は全く異れ

ども其著眼の點は同轍といふて宜しいと思ふ。兎角悟道には悟道の蹤跡を殘して却て眞の悟道とならぬことがある。空理を悟りては空見に墮し、實相を悟りては實相に礙げられ、眞如を悟りては眞如に妨げられ、常に胸中に之乎者哉が往來する、されば眞に空理を悟りては空見を忘れ、實相を悟りては實相を忘れ、眞如を悟りては眞如を忘れて、恰も鳥の空を忘れて自在に飛び魚の水を忘れて水中に逍遙するが如くなるを妙とするのである。

蒼虬翁が茶人藤井某を訪ひたる時、骨董店より持ち來れる唐物の盆あり、泥畫にて桃李の中に婦人の立てる姿を描けり。極めて古雅にして愛すべし。然れども其畫なかりせば更に妙ならんと評し合へりといふ。

古雅なる盆も慾ひに畫のある爲め却て其雅致を損する如く、悟道も慾ひに識見ある爲め却て眞の悟道を傷くるのである。

第十八、十牛の圖

古來佛敎には五十二位の階級と稱して吾人が修行の次第順序を說いてある

けれども、今は單に空想と化了して吾人が實際の修養に資するには足らぬ。また禪門にては一切の階級を掃蕩して頓悟の法を示すのであるから吾人が修養の次第を詳說した書物がない。然れども梁山の十牛圖なるものがあつて初心を啓發するに最も適して居る。十牛圖は吾人の心を牛に譬へて以て精神練磨の順序を說いたので、本文は實語のみ多くして頗る了解し難いから、茲には其大意を說き和歌のみを記さう。

第一は尋牛の圖で人が山野を迚りて野牛を尋ねんとする圖が畫いてある。這は孟子の所謂放心を求むるのである。吾人の心が毫も修まらずして、懵々然たること夢の如く一生涯を終る者は未だ放心を求むるの志なき人である。然れども一度反省し來りて心牛を求めんとする志を發したる情態である。されど心牛其の物は何處に居るか一向に見當がつかぬので、空しく無人の山野を彷徨するのである。佛語にて謂はゞ自心是佛なるを知らず、佛性の財寶は自心の倉庫にあるを忘れたる有樣である。譬へば狂人が自己の頭腦のあるを忘れて東奔西走するが如きをいふ。其歌に曰く、

たづね行く深山の牛は見えずして
たゞ空蟬の聲のみぞする

同歌に云く、

たづね入る牛こそ見えね夏山の
梢に蟬の聲ばかりして

第二は見跡の圖で漸く野牛の足跡を見出した所を描いてある。這は本心の何物たるを研めんと欲して或は典籍を繙き、或は師説を聞き辛うじて心の蹤跡を發見し、學道に一の方針を得たる情態にして、心牛の遊べる方向を見出したる有樣である。然れども徒らに文字の痕跡を追ひ、佛性の寶庫は自己の有なるを知らず、山野の中に於て岐路に迷ふの感あり。譬へば數多の器物は皆黃金なりと知れども、其黃金が果して眞か僞かを辨じ兼たる風情である。また譬へば狂人の疾少しく愈えて自己の頭腦は肩上にあるを知りたるも、未だ眞の頭腦なりや將た僞物なりやを知らざるが如くである。其歌に云く、

心ざしふかき深山のかひありて
しほりのあとを見るぞうれしき

同歌に曰く、

おぼつかな心づくしにたづぬれば
行へも知らぬ牛のあとかな

第三は見牛の圖で野牛を追跡して遂に之を見出し、其喜び言はんかたなく、希望と熱心とを以て牛を捕へんとする所が畫いてある。即ち學者が研究の結果、佛性は自心の寶庫にありと知りて從來未だ曾て見ざる所の心性を始めて瞥見し其喜びに堪へず、雀躍しつゝ見色聞聲の上に之を捕へ得んと希望する狀態である。譬へば狂人が自己の頭腦は眞に我肩上にありて、しかも汗は決して僞物にあらず、二六時中彼が聲を聞き色を見、香を嗅ぎ味を嘗むるは此頭首の力なるを悟りたるが如くである。其歌に曰く、

青柳の糸の中なる春の日に

つねはるかなる形をぞみる

同歌に云く

ほえけるをしるべにしつゝ荒牛の
かげ見る程にたづねきにけり

第四は得牛の圖で野牛を捕へて繩を以て鼻に貫きたる所が描いてある。然れども元來野牛なれば芳叢を戀ふて止まず、野性頑强にして牧し難く、動もすれば鼻頭の繩を絶ちて逃げ去らんとするを强ひて純熟せしめんとする有樣である。即ち佛性は自心に具有するを知りたれども、心猿意馬常に狂奔して胸襟穩かならず、瞋恚、貪欲の野性頑强にして制し難く、寸時も油斷する能はざる狀態である。譬へば狂人が自己の頭腦の所在を確知し、見聞覺知は此頭腦によるを認めたるも、腦中に疾病ありて頭痛を感じ、日夜醫藥の力に依て之を治療しつゝあるも動もすれば安眠する能はずして、再び狂態に復らんとするの徵候ある如くである。其歌に曰、

はなさじと思へばいとゝ心うし

これぞ誠のきづななりけり

同歌に云く、

とり得てもなにかと思ふあら牛の
つなひく程に心つよさよ

第五は牧牛の圖で野牛も漸く人に馴れて頑强なる獸性を磨消し、鼻繩を放つとも奔りて山野に逃匿せず、また他人の苗稼を食ひ荒すことなく、人の命に從て荷物をも運ぶ有樣が描いてある。即ち吾人が自己の心性は修養薫育の功によりて心猿意馬の野性を磨礱し、念々相續して清淨恬淡となり、美色好聲の中にありて心之に汚染せられず、紅塵萬丈の中にありても常に煙霞水月の情を忘れず、心牛純熟して羈鎖の累を免れたる有樣である。譬へば狂人の腦患は醫藥の効によりて次第に恢復し、最早頭痛を訴へず、狂疾を再發する虞れなく、腦中に清爽の氣が充ちて毎夜安眠することができるやうになつた。されば向後は狂人、否、病人にあらずして常人と伍して差支なきが如くである。其歌に曰く、

日數へて野かひの牛もてなるれば
身にそふかげとなるぞ嬉しき

同歌に云く

たづねきしまきのうね牛とりえつゝ
かひ伺ほどにしづかなりけり

第六は騎牛歸家の圖で野牛も能く馴れたれば最早逸走する憂もなく危害を加ふる虞れもないから、これより其牛に騎て笛を吹きつゝ愉快に我が家を指して歸る所が描いてある。即ち自己の心性を捕捉して修練純熟の結果、誘惑に陷るの憂なく、粗強なる妄情に驅らるゝ虞れなければ、起居動靜、佛性の光明を現はして、任運に自適するが故に樵子の村歌を唱へ、兒童の野笛を吹いて樂むの感がある。これ所謂心牛に騎りて本家鄉に還るのである。譬へば狂人が其腦病全く平愈して渾身爽快を覺え、食慾增加して如何なるものを食するも甘味津々として快く、或は馬に跨りて郊外に遊び、或は笻を曳いて山水の勝區を探るが如くである。其歌

に曰く、

すみ上る心の空にうそぶきて
たちかへり行く峰のしら雲

同歌に云く、

かへりみる遠山路の雪消えて
心の牛にのりてこそ行け

第七は忘牛存人の圖で、愈牛に騎りて家山に還りて見れば最早牛も必要はない、自宅の中に高枕安臥ができるのであるから故らに牛に騎りて往來するを要せぬ、そこで牛を忘れて人のみ居る所が描いてある。即ち心性といひ佛性といふも能く〳〵悟了し來れば別事があるではない、自己の本家鄉に安住するまでの騎りものにして一たび家鄉に安着したる以上は魚兎を得て筌蹄を忘るゝ道理にて金の鑛を出で、月の雲を離れたるが如き境界である。譬へば狂人の頭痛も全く恢復して頭腦の健全になるに隨ふて頭腦のあるを忘れたるが如くである。兎角吾人は身體の一部に病

ある時は其局部の存在を忘るゝことができぬ。之に反して局部が充分健全なる時は其存在を忘れる。例せば脚痛ある時は脚部の存在を常に感知し、肺患ある時は肺の存在を忘るゝことはできぬ。然れども肺の健全なる人は何處に肺があるか知らずに居るを常とする。されば吾人が頭腦の存在を忘れたるは頭腦の健全なるを證すべく、禪者が心牛を忘れたるは心牛の愈々純熟したるを證するに足るのである。其歌に曰く、

よしあしとわたる人こそはかなけれ
ひとつ難波のあしと知らすや

同歌に云く、

しるべせん山路の奥のほらの牛
かひかふ程にしづかなりけり、

第八は人牛俱忘の圖で人も牛も全く忘れて何物もなき一圓圈が描いてある。即ち我家郷に高枕安臥して風月を伴として優游自適する喜樂の情が身に充ちて自身の存在を忘れることができぬ。然れども身心二つながら

調適して陶然として自得する時は自己の身心をも忘るゝに至る。故に牛も人も二つながら忘却して安閑の極に達したのである。されば吾人が心性も忘れ、佛性も忘れ、凡も聖も、佛も衆生も一時に忘れ去りて絶學無爲の人となつたのである。譬へば身心二つながら快樂を覺え、快味の身に充つる間は自己の存在を感ずるけれども眞に無爲の樂を得たる時は自己を忘れて羽化登仙する如くである。其歌に曰く、

雲もなく月も桂も木もかれて
はらひはてたるうはの空かな

同歌に云く、

本よりも心の法はなきものを
夢うつゝとは何をいひけむ

第九は返本還源の圖で牛もなく人もなく山は綠に水は淨く、百花は錦を織り、衆鳥は皆々として歌ひ。金烏玉兎其明を競ふ所が描いてある。即ち吾人が佛性を忘れ心性を遺れ、凡も聖も、迷も悟も一時に忘れ去りて

絶學無爲となれば、一切掃蕩し盡して何物もなく空の茫々乎として捕ふべからざるが如くなるかといふに却て左樣ではない、生佛凡聖俱に忘れたる所に始めて自己本來の面目が現れ來りて吾は本來清淨なる心性を具有して居た、吾は本來佛であつたと覺るのである。されば厭ふべく、捨つべき罪惡の世と思ふた娑婆が直に清淨の世界となり、煩惱即菩提、娑婆即淨土となるのである。然れば一切の相對差別を悉く掃蕩し去りて迷もなく、悟もなく、凡夫もなく、聖人もなく、是もなく、非もなく、禍もなく、福もなく、大小方圓曲直長短の差別なく皆平等絶對なりといふも、其所謂絶對平等とは空々茫々として一物も定相なく、萬象森羅の混沌たる有樣をいふのではない、ヤハリ空は青く花は紅ゐに、山は綠に水は白き其儘平等なり絶對なのである。されば一遍上人が初めて法燈國師に參見したる時の歌に、

となふれば佛も吾もなかりけり
南無阿彌陀佛の聲ばかりして

とありたるに、國師之を肯はず、未だ徹せずと評せられた。後に至りて上人

すてはてゝ身はなき物と思ひしに
寒さきぬれば風ぞ身にしむ

と歌ひて國師の印可を蒙つたと傳ふるも這般の消息をいふた者であらう。然れば則ち禪の極意は決して空理にあるのではない、空理は一切の妄想執著を拂ふ爲めの方便觀であることを心得ねばならぬ。更に譬へていはゞ吾人の身心が病患に苦しみたる間は人世の何物を見ても不愉快にて、人生は不如意なり、人生は蜉蝣の夢なり、人世は苦界なり、人生は修羅場なり、罪惡の團塊なり、人間は魑魅なり惡鬼なりと思へるものが、一旦豁然として大悟し來れば天地全く一變して人生の恒久を喜び、人間の本性清淨なるを樂しみ、世界の天國なるを瞻仰するやうになるが如くである。其歌に曰く、

法のみちあとなきもとの山なれば

松はみどりに花はしらつゆ

同歌に云く、

そめねども山は緑になりにけり
おのがいろ〳〵花もなきなり

第十は入塵垂手の圖で五欲六塵の世界に入り、紅塵萬丈の市街に往來して慈悲の手を垂れて同胞を救ふ所が畫いてある。即ち自己本來是佛なりと大悟して、人世を顧みれば同胞兄弟は生死の苦海に仇なる月日を送り、蟹觸の諍ひに日も亦足らず、互に相屠りて其肉を食はんとし、生きては佛性の光明を失ひ、死しては暗黒世界の鬼となる。是に於て憐愍の情に堪へず、救濟の手を垂れて和光同塵の方便を回らすのである。されば第一より第九までは向上門の修行にして第十は向下門の施設である。また第一より第九までは智門の進修にして第十は悲門の退歩である。譬へば吾人が一切の病患を除いて身心共に健全にして福德長壽の幸を得れば四海同胞の病患に對して同情を表し、之が救治に全力を盡すが如くである。

其歌に曰く、

手をたれて足はそらなるおとこ山
かれ、たる枝に鳥やすむらん

同歌に云く、

身を思ふ身をぞ心は苦しむる
あるに任せてあるぞあるべき

道を學び身を修めんと欲するもの此十牛圖を參照して工夫鍛錬せば必ず大いに益する所があらうと思ふ。

第十九、禪の消極的方面

斯の如く吾人の所謂守靜とは但に虛を執し空に坐するのではない、故に老莊の所謂虛靜とは其趣を異にする。莊子に曰く、

顏回曰く吾以て進むことなし、敢て其方を問ふ。仲尼の曰く齋せよ。顏回曰く、回の家貧し、酒を飲まず、葷を茹はざる者數月、此の若くなれ

ば則ち以て齋と爲すべきか。曰く、是れ祭祀の齋にして心齋にあらず。回曰く、敢て心齋を問ふ。仲尼曰く、若ぢ志を一にせよ、之を聽くに耳を以てする無くして、之を聽くに心を以てせよ。之を聽くに心を以てする無くして之を聽くに氣を以てせよ。聽くは耳に止まり、心は符に止る。氣は虛にして物を待つ者なり。唯道は虛に集る。虛とは心齋なり云々。

老莊の所謂の虛は餘りに消極的なるやの感あり、且つ虛を以て極致とするは吾人の好まざる所にして禪の老莊と異る點も亦こゝにある。禪の消極的方面と老莊の學とが類似しつゝあるは爭ふべからざる所である。六祖檀經に、

外は一切善惡の境界に於て心念起らざるを名づけて坐となし、自性を見て動かざるを名づけて禪となす

とあるなど、精神の靈動を制する點は同一である。されば禪の消極的のみに著眼する人は禪と老莊との差別を發見するに苦るしむ。これ吾人が十牛圖を引證して讀者の參照に供したる所以の一である。淺邊幸庵老人の話し

に、

鈴木昌三(正三か)は鈴木七右衛門とて旗本にて七百石なり、四十有餘にして逐電し數日行方知れず。爰に上田宇右衛門……常に七右衛門と念頃なり、或時山に入る處に高嶺に烟一筋登る……然るに其道荊棘茂りて山に登ることならず、家來にいばらを苅せ又は脇へ結付など心勞して……彼嶺に上り烟の上る所を見るに岩窟の中より出る也……內を見入けるに……法師一人空より藤蔓の太きを下げて夫に腮をかけて……眼を見開き居て側に有髮の者一人、生木を火に燃して前後を見ず火を吹き居ける……宇右衛門心を附て見るに……七右衛門なり……宇右衛門岩屋に入り扨逐電の故を問へば發心の志を語る。藤にて腮を懸置くは眠る時唯縮まる故に眠らざる爲めなり……側に居申有髮の者はとかく貪著なく火を吹て計居る此者を七右衛門に問へば予が弟子也、總べて火を吹く時は諸の念慮生せざる者也、彼に心をこらせん爲めに火を吹する也……火を吹ば諸の念慮消する故に藥也と昌三いへり。

とある。藤蔓に腮を懸けて眠らず、火を吹て諸念を消すが如きは古聖の未だ爲さゞる所にして消極主義の惡弊ともいふべし。此の如きを以て禪と思ふは愚の太甚しきである。禪の消極的方面は吾人の雜念を去りて清淨の心體に歸らしむるのである。金蘭齋が四十二歳の十月、

合笑今入地。永謝人間春

の二句を記して絶息し、數刻にして蘇生して、

不惑既加二百年風月人

と附加して傍に蹲踞したる猫の背を撫で、汝再び主翁を見るに至りしは至幸にあらずやとて笑へるが如きは寧ろ禪の守靜に契ふたものである。何となれば生死の大事に當りて惑はず、心の靜寧を破らざればなり。また一日俳人蕉雨が一旅客に何方へ往かるゝぞと問ひしに、傍に落ちたる朴の葉に、

どこの土にならうも儘よ落葉哉

と記して出したるが如きは旅人の平生の安心の境界も見えて頗る奥ゆかしく思はるゝ。

第二十、屑事を忽せにすべからず

また守靜の用心としては衣食の如き些事をも忽せにしてはならぬ。古人も惡衣惡食を耻る者は與に語るに足らずといふたが、强ちに粗惡の衣食を必要とするではないが、衣食の爲めに心を奪はれぬやうにするは守靜の用心である。譬へば田舍人が命から二番目の金側の時計を携へて東京見物に來たやうに、金側の時計のみが心に掛つて、往來の人を見れば皆蹇蹇の如く思はれ、宿屋に泊りても隣室の客や下女までが盜賊の如く思はれ、時計が氣に掛りて眠られず、床の間へ置いて見たり、蒲團の下に入れて見たり、枕の下に置いて見たり鎖を手に卷いて眠らうとしたり、遂に安眠することもできぬ始末となる。また妙齡の婦人が美服を著けて外出したやうに、埃がつきはせぬか、皺がよりはせぬか、袖口がきれはせぬか、裾が汚れはせぬかと心配して手も足も自由に動かず、人の地面に水を撒くを見ては其飛沫を懼れて遠く逃げ、人の粗服を著くるを見ては己れに近いて吾衣を汚す

を恐れ、戰々兢々として一刻の安心もできぬ。這は勿論極端なる例なれども六尺の丈夫にありても餘り衣服粧飾に心を用ふる時は之に精神を奪はるるは吾人の實見する所である。故に靜の一字を守る者は宜しく素朴を旨とし衣服は質の良きを求めて其外觀の美なるを好まぬがよい。飲食にありても左の如く他滿と饑渴とは精神を亂るの恐れがある。

ジョンソンが食卓につくや恰も器皿に固着せしが如く、更に哺宴の禮を守らず、大賓貴客の席にあらざるよりは一語をも言はず、傍人話柄を開かんとするも知らざる擬して答へず、前額に青筋出しで鼻息荒く貪食し、若し兎肉に臭氣ありて菓子の牛酪に酸氣あれば彼は之を食はざれども直ちに鵜呑にして、而して他くまで貪りて腹脹るゝ時は大聲を擧げて談論し、……議論の句を結ぶ毎に鯨の如く息を吐いて數碗の茶を啜るを常とす。

彼は犀の如く笑ひ狼の如く食ふ。

昔てカンバアランド侯を訪ひし時、ジョンソン幾度となく茶を乞ひけれ

ば、侯爵夫人呆れ果て曰く、君は幾碗を以て滿足し給ふや、既に十一碗ならずやと。ジョンソン平然として答ふらく、十一碗なるか。然らば更に一碗を乞ふて一ダースとなさんと。

ジョンソンが健啖大食は吾人の摸倣するを好まざる所。これ大いに精神を動搖せしめ、人品を墮落せしむる原因である。滋味美食を貪りて金盞玉脂に心を奪はれ、旨酒芳醇に涎を流すは元より不可なり、さりとて糲飯羹汁を甘しとして乞食的生活をなすを以て道人と思ふも亦僻見に外ならぬ。要は飲食の爲めに心を勞せず、晨朝に食する所は正午に之を忘れ、正午に食する所は黄昏に之を忘れて可なりである。

第廿一、情慾を逞うすべからず

飲食よりも更に吾人の心を動轉せしむる者は性慾である。

詩人ナッシュは少年の時情婦の汗衫を漉したる酒にあらずんは飲まず、情婦の靴を細斷して油揚となし舌鼓を打て之を喰ひたりといふ。

某宴席に有名なる美人入り來りたるに一少年は切に美人の靴を乞ひ之に三鞭酒を酌ぎ恭しく之を捧げて其健康を祝したるに列座の客は皆之に傚ふて更に媚びんと欲して使丁に命ずるに其靴の調理を以てす。是に於て料理人は先づ其尖を包める絹を割きて寄物とし、靴底を腩に切り、木製の踵を薄片に刻みて之を牛酪にて煎りつけ、皿に盛りて卓上に運びたるに諸客一同手を拍ちて美人萬歳を唱へ、熊掌牛舌の美味の如く頓首して賞翫したりといふ。

這は西洋にありたる事例なるが、性慾戀愛が男子を愚ならしむるの極は斯の如きものあり。其精神の靜寧を害するや知るべきのみ。此事については多く語るを要せぬであらう。

第廿二、貧富の爲めに心を移すべからず

性慾に次いで吾人の心を紊亂する者は利慾である。

圓覺寺の佛源禪師は信徒の施物を蓄積して猥りに費さず、人以て吝嗇と

なし、之を毀る者多かりき。然るに同寺池魚の災に罹りて宏大なる伽藍の烏有に歸したるに、禪師平生蓄積する所の財を出して之を再建せしむ。人其財を惜む所以を問ふ、禪師曰く、君子は財を惜しむ、之を用ふるに道あればなりと。

嗚呼、禪師の心操の如きは天下の龜鑑たるに足る。かくてこそ利慾の爲めに絆されざる人といふべけれ。

岐阜縣中津川なる十八屋と稱する素封家の主人は常に雇人を戒めて燐寸の函を捨てしめず、其用ふべき間は新しき函より燐寸を出して舊き函に擦らしめ、夥しく空函を溜めて馬に一駄の空函を同所の燐寸製造所に賣り渡したるが、一駄の燐寸皆悉く同製造所の商標ありしといふ。

主人の儉德は以て萬古に語り傳ふるに足る。利慾深くして爲めに絶えず心を煩はす人は左の如き事例を見て其病に砭するがよい。

三井養安は越前府中の人、醫を業とし、無慾正直にして人樂禮を贈ること多ければ之を返戻するを常とす。或人養安を訪ひしに養安の聲として

地中にてオーと答ふ、人其奇怪なるを驚きつゝありたるに、養安井中より煙管を口にし草鞋を著けて出で來れり。其故を問へば炎暑にて堪へ難きが故に井中にて涼みしなりと答ふ。彼れ大阪に遊びて日々道頓堀に往き乞食の繩を弄する技を觀る。旅舍の主人其故を問ふ。養安曰く、我乞食の技を悅ぶにあらず、他人の之を觀るもの多く錢を與へずして去るが故に我毎日百錢を以て其不足を補ふなりと。

血を分けた虱いじらし更衣

また俳諧寺の一茶は有名なる逸人であつた。

加州公或時柏原に來りし時、一茶を召せども應せず、乃ち侍臣をして金梨地の蒔繪の箱に入れたる美麗なる書畫帖に俳句を索めけるに一茶辭して筆を執らず、强ひて乞はるゝ儘、缺け損じたる硯の埃を打拂ひ唾液を以て墨をすり、

子供等がのゝ樣といふ梅の花

と書す。使臣其亡狀を憤りけれど已むを得ず主君に復命せしに、加州公

興悅斜めならず、報酬として黃金十兩を贈らしむ。一茶戶を閉ぢて之を受す、强ひて贈らんとするに然らば三分丈を申受けんとて餘は皆返戾したり。其後加州公紫檀の硯箱に美事なる硯を入れて一茶に贈られたるに人々珍品なりとて來り觀る者夥しく、殊に骨董商某垂涎して止まず。一茶觀る者多く、煩しきを以て之を某に附與し、某は之を江戶に賣りて數百金を得たりといふ。

何のその百萬石も笹の露

這は餘りに瓢逸無欲に過ぎたるが如し、然れども錙銖の利に齷齪して仁義を忘れ人情を蔑ろにして耻を知らざる當世氣質に比すれば雪と墨の相違あるを知るべし。熟ら思ふに富みて奢らざるは難く、貧しくして濫れざるは易し。艱難に生きて安樂に死するが庸人の習ひなれば、利慾を逞うして鉅萬の富を積む時は却て其身に禍ひすることあり。設ひ禍ひなしするも其子孫多くは奢侈遊惰に流るゝは數の免れざる所である。

北條泰時常に人に語りていふ、我不肖の身を以て天下を治めたること一

に明惠上人の御恩なり。其故は承久大亂の後、或時法談の次に、如何なる方便を以てか天下を治むる術候べきと尋ね申したりしかば、上人仰せらるゝは……世の亂るゝ根源は何より起るぞといへば只慾を本とせり此慾心一切に變じて萬般の禍となるなり。是天下の大病にあらずや、是を療せんと思ひ給はゞ先づ此慾心を失ひ給へ、天下自ら勞せずして治るべしと。泰時此敎訓を承りしに心肝に銘して深く大願を發し、心中に誓て此趣を守りき。……此の如く萬づ小慾に振舞し故にやあらん、天下日に治まり諸國年を逐て安穩なり云々。

されば北條泰時が天下を治めたるも利慾の爲めに心を亂さず一に正義公道に遵ひたるに由るのである。

龍牙曰く學道は貧を學ぶべし、貧を學びて後、道方に親し

と。古人曰く身貧にして道貧ならずと。能く〳〵思ふべきである。高祖大師の垂示に云く、

古人云く良田萬頃より薄藝身に隨んにはしかず、施恩は報をのぞまず、

人に與へて悔ること勿れ。口を守ること鼻の如くすれば萬禍も及ばずといふべし。行ひ高ければ人自ら重んじ、才多ければ人自ら歸伏するなり、深く耕して淺く植うる猶ほ天災なり、己を利して人を損する豈果報なからんや

吾人は貧苦其物を好むのではない、身貧にして道も亦貧なれば一の取るべき所はない、また貧困の人必らずしも有道の君子ではない、然れば人は各相當の資產を要するは勿論である、而して鉅萬の富を累ぬるも之を用ふるに宜しきを得れば一も咎むべきではない、否、大いに奬勵すべきである。

ジョン、ラスキンは英國著名の文豪にして且つ慈善家、改革家、道德家として全世界に隱れなき人物である。

ラスキンの父の遺產は約百六十萬圓の巨額に達したるも自ら用ひし所は僅かに其十二分の一に過ぎずして、餘は皆公共の博物館、美術學校、圖書館等を起し、貧民救護所を設け、貧家の子弟に學資を投じ、自ら慈善事業を經營し、產業組合の主義によりて資本と勞働との調和を計らん爲

に明惠上人の御恩なり。其故は承久大亂の後、或時法談の次に、如何なる方便を以てか天下を治むる術候べきと尋ね申したりしかば、上人仰せらるゝは……世の亂るゝ根源は何より起るぞといへば只慾を本とせり此慾心一切に變じて萬般の禍となるなり。是天下の大病にあらずや、是を療せんと思ひ給はゞ先づ此慾心を失ひ給へ、天下自ら勞せずして治るべしと。泰時此教訓を承りしに心肝に銘して深く大願を發し、心中に誓て此趣を守りき。……此の如く萬づ小慾に振舞し故にやあらん、天下日に治まり諸國年を逐て安穩なり云々。

されば北條泰時が天下を治めたるも利慾の爲めに心を亂さず一に正義公道に遵ひたるに由るのである。

龍牙曰く學道は貧を學ぶべし、貧を學びて後、道方に親し。と。古人曰く身貧にして道貧ならずと。能く〳〵思ふべきである。高祖大師の垂示に云く、

古人云く良田萬頃よりも薄藝身に隨んにはしかず、施恩は報をのぞまず、

人に與へて悔ること勿れ。口を守ること鼻の如くすれば萬禍も及ばずといふべし。行ひ高ければ人自ら重んじ、才多ければ人自ら歸伏するなり、深く耕して淺く植うる猶ほ天災なり、己を利して人を損する豈果報なからんや

吾人は貧苦其物を好むのではない、身貧にして道も亦貧なれば一の取るべき所はない、また貧困の人必らずしも有道の君子ではない、然れば人は各相當の資產を要するは勿論である、而して鉅萬の富を累ぬるも之を用ふるに宜しきを得れば一も咎むべきではない、否、大いに奬勵すべきである。

ジョン、ラスキンは英國著名の文豪にして且つ慈善家、改革家、道德家として全世界に隱れなき人物である。

ラスキンの父の遺產は約百六十萬圓の巨額に達したるも自ら用ひし所は僅かに其十二分の一に過ぎずして、餘は皆公共の博物館、美術學校、圖書館等を起し、貧民救護所を設け、貧家の子弟に學資を投じ、自ら慈善事業を經營し、產業組合の主義によりて資本と勞働との調和を計らん爲

め十四萬圓の資金を投ずるなど其佳言善行擧げて算すべからず。

財を用ふることラスキンの如くにして始めて『君子は財を惜しむ、之を用ふるに道あればなり』といふことができやう。

栂尾の明惠上人は北條泰時が丹波の國なる大庄一所を寄進せんとせし時、辭して曰く、かゝる寺に所領だにも候はゞ住する僧ども、いかに懶惰懈怠にふるまふとも、所領あれば僧食闕く事なし、衣裳補へぬべしなど思ひて無道心なるものこもり居て……合力歸敬の輩もなければ隨ひ衰微して荒廢の地とのみなれり云々とて受けられずして止みぬ。

これ亦服膺すべき訓戒である。畢竟するに禪の要は貧富の爲めに心を動かさゞるを善しとする、されば下に記す所の夢窓國師の行狀の如きは吾人の摸範とするに足る。

元德元年秋九月廿九日北條氏僧疎石をして圓覺寺に住せしむ、疎石固辭す、寺僧涙を揮ひ說て曰く、既に佛光の業を承け肯て此寺に居らず、將た何人をして斯道を振興せしめんとするやと。竟に起て命を受く。時に

凶歉にして寺資糧に乏し。疎石戚容なし。寺檀信徒某氏、財を商船に託して元の鄞州に至り其利を倍蓰せんとす。之を聞て曰く、此財を以て佛門に歸し來世に結緣するに如かずと。乃ち三百萬疋を以て寺に寄す。寺資遽かに豐なり。疎石喜色なし。衆其雅量に服す。

國師が貧富の爲めに心を奪はれず、法喜禪悅の味に飽き、恰も氷壺玉鑑の清秋に懸るが如く一點の妄想をつけざる心地は洵に吾人の欽仰を値ひする。守靜の妙味は實に這裡にあると思ふ。

第廿三、一物にも依倚すべからず

澤庵禪師が柳生但馬守宗矩の爲めに、譬喩を劍法にとりて禪旨を示されたる語錄の中にも「心の止まらぬ」こと、即ち精神の一物に執著せざることを主としてある。曰く、

石火の機と申す事の候……石をハタト打つといなや光りが出て……間も透間もなき事にて候、是も心の止るべき間のなき事を申候、早き事

と計り心得候へば惡敷候、心を物に止め問敷といふが詮にて候……西行の歌に、

世をいとふ人とし聞ば假の宿に
こゝろとめなと思ふばかりぞ

と申す歌は、江口の遊女の讀みし歌なり……「こゝろとめなと思ふばかりぞ」心得所と可存候……禪宗にて如何か是れ佛と問候はゞ、拳をさしあぐべし、如何か佛法の極意と問はゞ、其聲未だ絶たざるに、一枝の梅花となりとも、庭前の柏樹子となりとも云ふべし。云ふ事の吉凶を撰ぶにてはなし、止らぬ心を尊ぶなり、止らぬ心は色にも香にも移らぬなり、此移らぬ心の體を神とも祝ひ佛とも尊び、禪心とも極意とも申候。

吾人の所謂靜を守るとは澤庵和尚の所謂「止らぬ心、移らぬ心」なり、不動の智なり、澄湛の念なり、黄白に動かず、旨酒に移らず、好言に迷はず、名利に惑はず、脅嚇に慴かず、威武に屈せず、權勢に阿らず、鐘鼓管絃に亂れず、震天動地に恐れず、常に秋月の玲瓏たるが如く、湖水の湛然たるが

如く、寶鑑の瑩々然たるが如くにして喧囂熱鬧の中に處して胸裏淡々たること水の如く、迅雷烈風の中にありても靜かなること山の如くである。古人これを指して火中の蓮といひ、紅爐上一點の雪ともいふた。かくして一心一たび靜かなる時は萬理自ら通じて妙味謂ふべからざるものがある。守靜の妙味と謂へるは此事である。

上來吾人は守靜の用心に就て大要を陳べ畢りたれば之より下篇に於て觀理の妙味を述べねばならぬ、何となれば守靜は禪の消極的方面にして之を以て禪を盡したりとは言ひ難く、且つ世人往々此方面のみを見て禪の全豹と誤解しつゝあるからである。

念慮一寂靜、應酬千里論、
人心宜主靜、明月不沈波
中江藤樹

下篇　觀理の妙味を論ず

第一、緒　言

吾人は上篇に於て靜の一字を守るの要を說きたるが、這は古人の所謂、

舵柄手にあれば平瀾淺瀨も意の如くならざるなく顚風逆浪に遇ふと雖も沒溺の患を免る

といへるが如く、精神の舵柄を手にして情識の波浪に覆沒せられざるが爲めの用心に外ならぬ。圓覺經に、

一切の時に居て妄念を起さず

とあるは即ち守靜の極を道破したるものにして、能く精神の靜安を得る時は、智鑑昭々として能く萬理を照して誤りなきに至る。故に同經に、

無礙清淨の慧は皆禪定に依て生ず

といひ、法華經にも、

閑處に在て其心を修攝し安住して動かざること須彌山の如し。

とあり、又同經に、

深く禪定に入りて十方の佛を見る

とある。王陽明は終焉の際に、

門人周積を召して吾去らんと曰へるに周積涕泣して遺言を求めたれば、陽明微笑して曰く此心光明復何をか言はんと、少時にして瞑目溘逝した。

これ陽明が靜を守りて達したる安心立命であらう。されど禪は氷壺玉鑑の清白裏に坐著するを嫌ふ。故に古人も「老僧は明白裏に居らず」といひ、「沒蹤跡の處に身を藏さず」といひ、「清白の中にゐらず」といひ、「冷湫々地に住せず」といひ、「法身邊に坐著すべからず」と戒めて虛明一片の處に留る時は之を以て禪病となし、恰も黃金の鎖を以て繫がれたるが如き不自由の人とする。

これ即ち「金屑貴しと雖も眼に入れば翳をなす」の道理である。是を以て百尺竿頭更に歩みを進め、懸崖萬仞の處に身を投じ、從來珍重し來れる一物を拋下せねばならぬ。乞兒飯椀を打破すといふは這般の消息である。譬へば、直江山城守が伊達正宗に向て、拙者の手は戰場で采配を執る手で御座る

といへば正宗は、左樣か我手は戰場で采配をもとり、雪隱で糞も拭く手であるぞ。

と喝破せられたやうに、采配を執るのみでは擔板漢の嘲りを免れぬ。采配もとり糞をもふくの自由は何事にも必要である。流石は獨眼龍だけありて其言ふ所、大いに禪味を帶びて居る。また譬へば萬乘の寶位に即ける帝王も偏へに萬乘の貴きを守りて億兆の賤民を無視したらんには眞に明君とは謂はれぬ、されば九重の雲の上に居て賤が伏屋のことを忘れず、萬乘の位を視ること弊屣の如くにして始めて天下を有つの德が具はるのである。故に王陽明も、

胸中須らく常に舜禹は天下を有つて與らざるの氣象を有すべし

といふた。即ち舜王禹王の如き賢君にありては天下を有ち萬乘の貴きに居るを以て光榮とせず之に執著せず、其得喪を以て胸中に介せぬのである。是舜禹の舜禹たる所以である。禪を學ぶものも亦是の如く心を靜め氣を潔くし、世塵に染まず、俗臭に汚れず、神を凝し、念を全うし、高きに居り、

清きを守るのみでは充分でない。何となれば這は消極一片の禪である、更に積極的に進に入り細に入りて精神の活動を爲さねばならぬ。精神の活動とは他なし、能く萬境の中に往來して衆理齊しく通じて障礙する所なきを謂ふのである。之を譬へば消極の禪は枯木の如く、積極の禪は百華の如くである。此兩面を打して一團とする時は枯木再び花を開き石女起て歌舞するの妙がある。故に吾人はこれより少しく禪の積極的方面なる觀理の妙味を論じやうと思ふのである。

第二、觀理とは何ぞ

却説觀理とは道理を觀察することにて、吾人の心鏡が宇宙の眞理を照して毫も誤らぬやうにするのである。吾人が上篇に於て縷述したる守靜の用心は眞理を觀察するに先ちて必要なる準備である。譬へば鏡面に凹凸ある時は其中に映する影像は其眞相を失ふが如く、吾人の智鏡が安靜にして平かならざる時は之に映じたる萬象の影も亦其眞を得る能はざるが如くであ

る。また譬へば天上の月は同一なれども大海に映する時は自ら雄大に見え、湖水に映する時は自ら優美に見え、流水に映する時は動搖して止まざる如く見え、汚水に映する時は惡臭を放つが如く見ゆる。これ皆月の眞相を得たるものではない。是を以て吾人は汚水を澄ましめて其濁濁を去り、流水を停めて其動搖を防ぎ、湖水海水を靜めて風濤の險を去り、以て其中に映する月の影像を全からしめんとするのである。されば守靜は心鏡を平かにするの準備にして觀理は心鏡が萬象を映するの活用である。

第三、唯心觀

然れば吾人は先づ如何なる道理を觀察すべきかといふに、初學の者にありては三界唯心の理を觀察するをよしとする。禪に所謂三界唯心の理とは哲學上に唱ふる所の唯心論、又は權大乘敎に示す所の萬法唯識といふが如き、乾燥なる議論ではない。吾人が常識にて一見明瞭なる眞理である。即ち花鳥風月の風雅も愁人の眼にありては血涙の種となり、紅燈綠酒の優艶も君

子の身にありては汚毒を蒙るの思ひがある。蛣蜣は糞堆を以て金殿瑤臺とし、蜉蝣は一日を以て百年の長きに比し、蟭螟は蚊睫を以て一宇宙の大と爲し、鯤鵬は滄溟を以て一掬の水とする。これ事物其物に大小美醜があるのではなく、之れを見る心に差別があるのである。這は何人が考へても一見明瞭なる眞理でないか。古人が「一心生せざれば萬法咎なし」といひ、「心生ずれば種々の法生じ、心滅すれば種々の法滅す」といへるも此旨に外ならぬ。かゝる明々白々の理は哲學者や宗教家の六づかしい說明を聞かずとも何人も悟り得べきことゝ思ふ。宗鏡錄に、

內に善心あれば佛を見、內に惡念あれば鬼を見る

とある如く、惡人より見れば警察官は皆惡鬼と同じく、善人より視れば彼等は皆其保護者たる佛である。古へより水禽の飛び起つを以て大軍の來襲と誤り、杯中の弓影を以て蛇となし、朽木を以て鬼となし、燐光を以て幽靈としたる例は勝て計ふべからず。

昔し足利義滿の時に羽蟻多く飛べりとて管領始め凶變の兆として憂懼し

たるに或人之を義堂和尙に告ぐ。和尙云く、世間の妖怪は只だ人の一念の中にあり、一念不生前後際斷すれば何の吉凶かこれあらん、是の如く觀ずる時、吉は他より吉、凶は他より凶、總て吾に關せず、但一念頓忘すれば是即安樂の世界なりと。幾もなくして羽蟻飛散し去るといふ。

羽蟻を以て凶變の兆とするは何たる愚見であらう、凶變を惹起するものは羽蟻其物に非ずして却て羽蟻を凶變の兆と妄想する所の愚見其物であらう。古へより或は彗星の光芒を見て杞憂を懷き、或は流星の明滅を眺めて眉をあつめ、或は螢火の群るを見て冷汗を流し、或は蛙族、群鳥の往來にさへ膽を消す儕もある。これ畢竟吉凶禍福は一心源頭にあるを知らざるの致す所である。世人は往々吉日凶日といふ、されど其不合理なるは一目瞭然でないか。某の月、某の日に吾人は母を喪ひたりとせよ、某の日は吾人にとりて大凶日たるや論ずる迄もない、されど世界民衆の多き、此日を以て生るゝもの幾十萬人、また此日を以て婚嫁するもの幾百千人、また此日を以て位階を進め、此日を以て事功を竣り、此日を以て巨利を博し、此日を以

て芳名を揚ぐるもの幾人ぞや。故に此日を以て忌日とする者あり、吉日とするものあり、災日とするものあり、令辰佳節とするものあり。さるを滄海の一沫に等しき凡夫の身を以て己れに利ならざる一事件の發生したればとて某日は凶日なりと斷ずるは笑ふべきでないか。家相、人相、方位などに關する迷信も亦之と同しいのである。苟も常識を具へたる者は斯ゝる迷信を懷いてはならぬ。宜しく一心源頭に溯りて吉凶禍福の由て來る所を知らねばならぬ。かく三界唯心の理は見易く解し易い筈へであるが世人は此理に安住することのできぬ人が多い。

尾の道市の濟物寺なる物外和尚は孤落不羈、加ふるに劍法に熟達し、また俳句を善くし、三原侯の敬信する所となつた。或時三原侯畫師に命じて一幅の丹青を求めたるに孤雁の圖を作つた。其時侯は色を變じて曰ふやう、雁は群を爲して飛ぶべきもの、今孤雁を見るは國亂の兆なりと。左右に侍する者平身低頭、惶懼して爲す所を知らず。物外之を聞て早速參殿し、孤雁の圖に題して、

初雁や又あとからも〳〵

と記したるに侯大いに喜び、侍臣も始めて安堵したといふ。

三原侯の迷信、物外和尚の禪機、兩々相對して面白い對比でないか。肇法師の曰く、

萬物を會して自己とする者は其れ只聖人か

と。吾人は及ばずながら聖人を冀はねばならぬ。六祖大師曰く、

汝等諸人自心是佛、更に狐疑することなれ、外に一法として建立するなし皆是自心、心は萬種の法を生ず。

と。人世は苦界であると思ふも吾人の心一つ、人生を修羅場とするも、人生を極樂とするも、文明の鴻業を完うするも、野蠻蒙昧の古へに復るも、人類の永久を計るも、人類の絶滅を來すも、吾人の心一つである。

賣茶翁は肥前の人にて出家して元昭と稱し苦學遊方、筏海梯山、萬里を遠しとせずして臨濟曹洞の名匠を訪ひ、造詣する所深かりしも自ら足れ

りとせず。後に肥前に歸り、其師化淵和尚に侍すること十四載、化淵入寂の後、飄然去りて京師に來り、小亭を搆へて通仙と名け爐を開き茶を煎じて往來の人に鬻ぎて餘生を送る。それより春花秋月を伴として或は蓮華王院松樹の下に茗を煎じ、或は法住寺翠竹の陰に爐を開き、或は大佛閣前の杜若池邊に茶舗を開き、或は鴨河の邊、或は東福寺松嶺の下、或は相國寺楓林の下に晏坐して茶を賣り以て人間妄想の睡りを覺した。

翁が自警の句に、

夢幻生涯夢幻居　了知幻化絶親疎
貪榮萬乘猶無足　退步一瓢還有餘
無事心頭情自寂　無心事上境都如
吾儕苟得體斯意　廓落胸襟同大虛

とある。また翁は老後に多年使用したる仙寛と稱する茶籃を燒きたるが其時の語が如何にも面白い。

我從來孤貧、無地無錐、汝補佐吾曾有年、或伴春山秋水、或鬬松下竹

蔭、以故飯錢無缺、保得八十餘歲、今既老邁、無力于用汝、北斗藏身將終天年、却後或辱世俗之手、於汝恐有遺恨、是以賞汝以火聚三昧直下向火焰裏轉身去、轉身一句且如何

却火洞然毫末盡、青山依舊白雲中

見よ、心淨ければ世界清し、心平かなれば何の不平かこれあらんや。此理に達せざるが故に自心、自心を苦めて、

繩なきに自ら縛す

るのである。夫れ方位の善惡を論じ、禍福を家相人相に歸し、日時の吉凶を迷執する者は皆悉く此無繩自縛の痴漢である。且つそれ運命を以て天に在りとするは牡丹餅を棚にありとするより一層覺束ない。若し亦天にありとすれば人間には一向關係がない、運命が人間にありてこそ始めて運命の爲めに心を勞する價値があるではないか。

吾人は卯歲の時より不惑を過ぎたる今日に至るまで一回も神佛に對して自身の福利を祈つたことがない。幼少の際は神佛の何たるを知らねば、祈誓

などする考は無論なかつた。それより十四歳にして出家し禪門の教理を聞いて神佛の賴むべからざるを知つた。禪僧の中には佛天の加護を仰ぐとか、先佛の冥助を乞ふとかいふ人は澤山ある。さりながら禪の唯心觀の上より見れば其所謂佛天と稱し、先佛と稱するものは自心である。故に自心の佛に歸依し、自心の法に歸依し、自心の僧に歸依するのである。華嚴經にも此旨を明示せられてある。

世人が私利私福を神佛に祈るも亦洵に愚の太甚しきである。神佛は卿等が使丁や手代ではない、一々卿等のヨマヒ言を聽いて之に應答しては居られぬでないか。人間が聞いてさへ癪に障るやうな我儘なる祈願を神佛にして居る。神佛にして若し卿等の思ふが如く威神力があつたならば卿等は忽ち神佛の譴怒に觸れんこと疑ひない、幸にして神佛は右樣の力がないから幸なのである。萬一天命とか神命とかいふものがあるとしても人事を盡すより外に致し方はないでないか。吾人の心さへ安靜にして一點も疑著する所がなければ神に祈ることも佛に誓ふこともいらぬ。古人云く、

大都心足身還足　只恐身閒心未閒
祇得心閒隨處樂　不論朝市與雲山

と。心さへ閑なれば處に隨て自適せざるはない筈である。

越後の良寛上人遁世して自ら五合庵と號し、市中を托鉢して米五合を得れば歸りて其餘を求めず、或人其苦行を慰めたるに、

住なれてこゝも廬山の夜の雨

といひ捨てられたといふ。

以て其優游晏如たる境界を見るべきである。凡そ世間の事物には幻相と假相と實相とあるを知らねばならぬ。幻相とは夢幻の如く全く虛妄なる相である。次は假相で假の相であるから暫時あつて後にはなくなる。其次は實相で眞實の相であるから永久に滅びない體である。譬へば麻繩を見て蛇と思ふは幻相である。此相は元來虛妄にして實在するのではない。次に麻繩を視て繩と思ふは假相で麻が假りに繩の相を現はしたに過ぎぬ。また次に麻繩を見て直ちに麻と觀るは其眞相に達したのである。世間普通の人にあ

りては多くは幻相と假相のみを見て實相を視ない。そこで迷執が多いのである。例せば太陽を見ては其直徑一尺ばかりの火球にて吾人に便利なる道具であると思ふ、これ所謂太陽の幻相である。また星學者は太陽の大さを計算し其炎熱熾盛なる一大世界なるを觀察する、こは所謂太陽の假相である。また科學者は太陽球體の成分を審査して其物質如何を研めんとする、こは所謂太陽の實相を知らんとするのである。古人が、

花は愛惜によりて散り、草は忌嫌を逐ふて生ず

といひたるが如きは事物の幻相に惑ふたのである。此幻相と假相とに惑ふて心を煩はさぬやうにするが唯心觀の要旨である。

肥州龍雲寺の宗俊和尚が同寺に住山の時、同國八戸城の南に圓藏院なる寺あり、亡僧の墓地に毎夜妖火の燃ゆるありて人民怪み怖れ、多くの巫覡に請ふて祈禱し、幽怪を禳はんとすれども火勢益〻烈しくして如何とも能はず。和尚之を聞て黄昏潛かに墓邊に往き坐禪して夜に入りしに妖焔の熾んに上るを見る。乃ち念ずらく、

種々幻化自覺心生、且道幻盡覺盡時如何

と、更に一喝を下して曰く薪盡て火滅すと。妖火言下に滅して復燃ゆることなかりしといふ。

燐火の燃ゆるは毫も怪むべきことではない、さるを迷信の徒は以て幽魂の致す所とする。是に於て乎百怪千妖、人を襲ふて止まず、憐れむべきの至りである。また、

永正年間三浦の道寸、北條早雲と戰ひ敗北して自殺し其從卒も亦成く殺されたり、時に其子荒次郎なるもの素より驍名あり、大劒を揮ふて戰ひ人之に敵するなく、自ら到て死したり。然るに彼が死屍の眼精爛々として宛然生けるが如く、人々之を憚り怖れて手を下す能はず。或は經を誦し、成は呪術を以てするも寸効なし、依て總世寺の宗孝和尚に就て之を濟度せんことを請ふ。和尚乃ち、

うつゝとも夢とも知らぬ一眠
浮世のひまをあけぼのゝ空

と詠じ、威を振ふて一喝を下したるに死屍言下に脱落して枯骨となりたりといふ。

これ亦宗孝和尚が迷信の暗鬼を驅除して、幻化の本源は凡夫の一心源頭にあるを示されたのである。聞くならく易者は易の判斷を乞ふ人を呼んで幽靈といふ、然る所以は彼等は皆迷ふて出るが故なりとぞ。愧づべし慚づべし、唯心の理に達せざるものは皆易者の所謂幽靈である、故に吾人は死者の幽魂を怖れんよりは先づ自心の迷執を恐れねばならぬ。妖火は常に吾人の心頭に燃えつゝある。更に他の事例に徵せんか、

花ならば探りても見ん今日の月
明月や坐頭の妻の泣く夜かな
明月をとつて呉れろと泣く子かな

と三句並べて見るに、第一句は盲人が花ならば探りても見んものを、目なし烏の哀しさには今日の明月を見ることができぬといふ意味で、盲人が觀月をする風流に一種の悲哀が現れてある。次の句は絶對に悲痛の句で一向

に風韻がない。また第三句は明月を玩弄物と心得たる小兒の有樣で一種の滑稽を添へて居る。却説、中秋の明月は何人が見ても同一であるべき筈であるが、坐頭の妻より見れば涙の種子、小兒より見れば玩弄物となる。月に二樣の別があるのではない、見る人の心の幻相に差別があるのである。

古歌に、

寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も
心なければ苦しみもなし

といへるも此意に外ならぬ。小兒は大人に比較すると寒暑の爲めに苦しむのが少ない、何となれば彼等は遊戯に心を奪はれて氣候風雨に心を留めぬからである。之に反して大人は炎暑に遇ふては炎暑に心を苦しめ、嚴寒に遭ふては嚴寒に念を注ぐ、是に於て八十度の炎暑は九十度に感じ、九十度の炎暑は百度に感ずる、それと同しく霜を見ては早くも氷を踐みたる如く感じ、氷を踐みては早くも雪を積みたる如く感ずるのである。

吾人が疾病に於けるも亦斯の如くである。心氣の薄弱なる人は傳染病に感

じ易く、且つ一朝其病に罹る時は恢復困難にして死を招くことあり。これ精神の堅確ならざる爲め、恐怖憂愁して生活機能の減退するに由るのである。かくして精神の鍛錬未熟なる人は治療し得べき輕症にても空しく斃れ、些細なる病毒にも忽ち感染して苦患を惹起する、故に吾人は努めて剛强なる精神を養はねばならぬ。

吾人の鄉里に赤痢の流行したることがあつた。其時予が親戚の少年某は非常に心氣薄弱の男であつたが、憐れや少年の兄の子が赤痢に罹りたるに、少年は身も世もあらぬ思ひにて、嚴重に離隔し居たるも、遂に赤痢を發して日ならずして黃泉の客となつた。

此憐れなる少年の如きは赤痢と聞いては最早棺中に入りたる如く思ひ、落膽失心して其儘死去するのである。殊に神經に關する病症の如きは心機の一轉は病狀に大變化を生せしむることは吾人の實驗する所である。如何なる病氣にも轉療地養の効あるは生活狀態の變化に心機の一轉が伴ふからである。

永平寺現住森田悟由禪師が頸背の間に瘍の生じて重患に陷りたる時、赤十字病院にて橋本博士監督の下に大切開を行ふた。然るに其經過極めてよく、意外に早く全治したれば一同驚くばかりであつた。これ禪師が泰然として病室に晏坐し、病の身にあるを忘れたるが如くなるの致す所である。

然れば醫師たるものも單に患者の身體に藥石を施すのみでなく、其精神に向て刀圭を加へねばならぬ。高祖大師の垂示に、

大慧禪師、ある時尻に腫物出ぬれば、醫師此を見て、大事の物なりといふ。大慧云く、死ぬべきや否や、醫師曰く、ほとんどあやうかるべし、大慧云く、若し死ぬべくんば愈坐禪すべしといふて、猶ほ强て坐しければ、其腫物うみつぶれて別の事なかりき。

古人の心かくのごとし、病をうけては彌坐禪せしなり。いまの人病なうして坐禪ゆるくすべからず。病は心に隨て轉ずるかと覺ゆ、世間に、しやくりする人に、虛言して、わびつべきことを云つげぬれば、それをわ

びしつべき事に思ひ、心に入て陳せんとする程に忘れて其しやくり留りぬ。

我もそのかみ入宋の時、船中にて痢病せしに惡風出來て船中さわぎける時、病を忘れて止りぬ。此を以て思ふに學道勤勞して他事を忘るれば病も起るまじきかと覺ゆるなり

とある如く、氣を轉ずることが病氣には何より善き藥石である。予は一婦人が大洪水に遇ふてヒステリーの全治したる實例を見た。此の如きは世に類例多き事實なるや疑を容れず、然れども病を輕んじて徒らに元氣のみ勝つ時は必ず大患を惹起するから醫療を怠るは宜しくない。要するに三界唯心の觀を凝して萬事一心源頭に溯りて之を求め、外目をふらぬやうにするが初學の勉むべき所である。されば華嚴經にも[若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば應に法界の性は一切唯心造と觀ずべし]とある。既に唯心觀を成就すれば吾人の精神は差別の樊籠を脱して鳳凰の千仞に翔るの慨があるであらう。少しく鄙俗なる話しなれど刈谷無隱居士の談に

祇園新地に老妓來吉といふがあつて、無隱居士と多田東燕とが來吉を聘した時、多田は來吉の馴染ゆゑ、乃公も年が寄つた御前も婆々になつたモー念佛でも唱ひ後世を願ふて極樂旅行の支度でもしてはどうだといふと、來吉は居直り、私も一旦はさう思ひましたが、一夫れはいけません。檀那マ！よく御考ひなさい、舞妓の時から此婆々になるまで、永い月日に御世話になつた檀那たち、又交際をしたり、御目にかかつたりした人さまは、みんな地獄に御出遊ばす御方ばかりゆゑ、地獄へ參りますと御馴染もあり知つた人もあり、賑かで宜しうありますが、極樂には知つた人もなく御馴染もなく淋しく私もモー地獄行と極めました。殊に私も永い月日には地獄に行くべき罪はたんと造りました、其罪を持ちながら地獄に行くのを嫌ふのは間違ですよ、ドーか地獄に參るなら閻魔樣の御酌でもして閻魔樣を迷はせ、丸裸かにして、家も土藏もなんな捲き上げ、地獄の破産するまでヤッテ見たう御座います。檀那樣もドーセ地獄行でせうねと喝破したといふ

老妓の饒舌驚くべきである。若し眞に彼女が口にする如く脚下に實地を踐んだなら、劍樹刀山も遊戯場となり、地獄の鑊の中にて都々逸を歌ひながら睾丸を洗ふこともできやうと思ふ。夢窓國師が慧林寺にての山居の偈に

青山幾度變黃山
浮世紛紜總不干
眼裏有塵三界窄
心頭無事一牀寬

と吟せられたるも同じ心である。一切の是非、一切の得失、一切の苦樂、一切の迷悟、皆悉く吾人が精神の幻影であると悟り得たならば地獄も天堂も、鬼も佛も、神も魔も一掃し去ることができる。

昔し南朝の忠臣菊池武時入道寂阿は有名な大智禪師に師事して參禪の功を積んだのであるが、元弘中後醍醐天皇より菊池小武大友の三家へ綸旨を賜はり、探題北條英時を誅戮すべしとの命あり、然るに小武大友の二人は途中より變心して逆賊に與し、却て英時と共に菊池を討んと計りける。寂阿之を傳へ聞き、斯る不甲斐なき者共と大事を談じけるこそ惜しけれ、去り乍ら英時が方に未だ大兵は集まるまじ、不勢なる所に押寄て

討とるべしと、嫡子武重始め百五十騎を率ゐ元弘三年三月十三日菊池を發し英時が博多の城に攻め寄せんとて、既に櫛田社の前を打過んとするに如何にしけん寂阿が馬足をとゞめて進まざりければ寂阿大に怒て、介者は拜せず、まして物祟する邪神に我何ぞ下馬せんやと、箭を取てつがひ

武士のやたけ心の一筋に
思ひきるとは神は知らずや

と詠じて神殿の扉をはたと射たりければ馬行くこと元の如し。然るに英時の方にては思ひ設けたることにて城門を開いて切て出、雙方入り亂れて戰ふに菊池方うち勝て二百餘人を討捕、英時も既に危く見えしが小武大友八千餘騎にて英時を援ひ、菊池の軍を十重二十重に取り圍む、寂阿今は此迄なりと決心し、武重を呼び、汝は是より肥後へかへり、死殘りたる郎黨を集め再び義兵を擧ぐべしといふに、武重、仰せとも存せず兎も角も安否は共に決すべしとて中々落行べき體もなし、寂阿大いに怒り、

汝が日頃の思慮に相違したる返答かな、凡そ小信を守りて大義を忘るは良將勇士の辱る所なり、我は朝家の爲めに命を爰に止む、汝は爰を遁れて節にあたつて命を奉るべし、遅速わりと雖も何れか死を免れんや、時移るにとく〳〵といさめしかば、武重は離別の涙に袖を濕ほしながら父が遺訓にしたがつて五十騎ばかりを引分て肥後をばさして落行きける。

寂阿今は思ふ事なしとて敵中に駈け入り散々に敵を蹴散し戰ひたるも衆寡敵し難く、殘兵僅かに二十騎、寂阿始め皆五ヶ所六ヶ所の傷を負ひたれば各々敵と刺違へて死んとて二十騎と共に敵と引組〳〵落重りて死にけるとぞ。

武時入道寂阿が沈毅剛邁にして大義に殉したる振舞は感ずるに餘りある、且つ其子武重を殘して再擧を計る所、楠公が櫻井驛の心操と同一なるも後者は廣く世人の知る所となり、前者は殆んど湮滅して傳はらざるは惜むべきである。彼が楠田社の神扉を射たる勇姿といひ「武士の」歌といひ、自ら禪錐の鋭脱するを見る。寂阿が師事したる大智禪師が温泉山の吟に、

地獄顛倒一念中　一念回向本來空
空々寂々非他物　樹々松青躑躅紅

とある、これ亦唯心觀を陳べたのに外ならぬ。

第四、萬有一體觀

吾人は既に唯心觀の一班を說き了りたれば、これより萬有一體觀を述べやうと思ふ。上述の如く人世の吉凶、是非、得失、利害、長短、迷悟、凡聖等一切の相對は皆宇宙の幻相、假相の上に在るので、深く宇宙の實相に達して見れば此等は皆自心の幻影であつたと知ることができる。果して然れば此等の一切差別の妄見を掃蕩すれば宇宙の眞相は絕對平等なりと悟入することができる。これが萬有一體觀である。然れば禪門にては萬象の差別相對を一掃して平等なる理體を見、是もなく非もなく、凡もなく聖もなく、迷悟なく、得失なく、空々茫々たるものを宇宙の本體と見るのかといふに、全く左樣ではない。一切の差別を掃蕩するは差別の妄見に執著して自由を

失ふの病を治めんが爲めである。換言すれば差別中に平等あるを悟らせんが爲めである。一度差別の妄執を離れて本體平等の道理を覺了したならば、心を平等の本體界に遊ばしむるは宜しけれど、平等平等とのみ心得て其地に住著するは一種の病である。何となれば這は亦平等の妄見で差別の迷執と兄弟の間にある。故に差別に執せず平等に偏せず、差別中に平等あり、平等中に差別あり、現象即實在、實在即現象と體達するのが萬法平等觀である。

譬へば人類には人種の別あり、種族の別あり、血統の別ありて同一血統を受けたる人々の中にも甲乙の家族各差別あり、同一一家にて同一の兩親より生れても其子は兄弟姉妹一々差別がある。また同一身體の中にても左右の兩手は其發達と力量を異にし、左右の眼、左右の耳、左右の脚皆一々他と異りたる所がある。されば一身の中にても四肢百骸一々差別あるは事實である。然れども此等の差別の中に兩手は相類し、兩眼は相似、兩脚は相對し、四肢百骸相依り相合して平等に一身を形成し、また兄弟姉妹は相似

相合して同一親に屬し、各個の家族は相類し相合して一種族となり、各個の種族は相應じ相合して一人種となり、一一の人種は相類し相合して一人類を平等に形成しつゝある。さすれば差別を離れたる平等は眞の平等ではない妄想で、平等を離れたる差別は眞の差別ではない迷執である。かくして平等の義邊を理と稱し體と名け、差別の義邊を事と稱し相と名づくる。されば本體と現相とは同一物にして、事象の外に理體があるではなく、理體の外に事象があるではない。事象と理體とは渾然として一なのである。果して然れば宇宙萬象とても萬象其物の表に別に超然たる一本體があつて之を維持して居るではない、また宇宙の事象は離れ〳〵になつて偶然集散離合して居るのではない、必ず本體ありて之を統一しつゝあるのである。即ち宇宙其物は渾然として本體と事象との融合したものである。換言せば現象と實在との圓融したるものである。

かく考察し來る時は宇宙は一大活物にして、本體又は實在といふも活動性のものであること疑ひないと思ふ。前に引證したる大智禪師の詩にていへ

ば

空々寂々非他物　樹々松青躑躅紅

とありて平等なる本體は一切の是非得失の差別がないから空々寂々であるやうだが他物ではない、平等の本體は松の綠、躑躅の紅なるが其眞相である。傳大士の偈に

有物失天地　無形本寂寥　能爲萬象主　不逐四時凋

とある。天地未開以前より存在する所の本體がある、此本體は元來平等にして普遍なれば差別事象の形相はない、然れども萬象の主となりて春夏秋冬、春は花、夏は杜鵑、秋は月、冬は雪となりて常に露現して居るとの偈である。また臨濟禪師の語に

赤肉團上に一無位の眞人あり、常に汝等の面門に在て出入す

とある。一無位の眞人とは無位無官無籍無業の人で一切の差別の位置に居らず、利害得失を離れたる本體である、此眞人は常に吾人の面門に出入して居るから見よと示したのである。されば本體といひ絕對といふは凝然たる死物ではない、常に萬象を生起する活物である。此理に達せざるが故に權大乘にては眞如即ち本體界が死物となつてしまうのである。クセノファネスが

萬有即ち一體、一體即ち神なり

と道破したるも朦朧ながら此意を言ひ現はしたのであらう。伊藤仁齋曰く

天地は一大活物、物を生じて物に生せられず、悠久窮りなく、人物の生死あるに比せざるなりと。

天地は一大活物といへるはさすがに仁齋の見識である、されど天地と萬物とを引離して別に見たる痕跡あるは惜むべし。人物の死生も天地活動の波瀾ではないか。仁齋又云く

夫れ四方上下を宇といひ、古往今來を宙といふ、六合の窮りなきを知る時は則ち古今の窮りなきを知る。今日の天地は即ち萬古の天地、萬古の天地は即ち今日の天地、何ぞ始終あらん、何ぞ開闢あらん　此論以て千古の惑を破るべしと。

萬有は同一體で渾然として圓融しつゝあるとすれば必然的に其無始無終なるは知られねばならぬ、萬古の天地は即ち今日の天地、今日の天地は即ち萬古の天地とは仁齋の名言である。然れども仁齋が千古の惑を破るべしといふたのは適當でない。此の如きは禪門の宗師が家常の茶飯である、フエヒテル云く

地球は活物なり、能く生物を分娩す。地球は常に自己の職分に必要なる規則正しき運動を爲し、又自己の心に隨意なる不規則の所業をなす

と。ボールゼンも以爲らく全宇宙は活けりと。かく西洋にありても上スピノヅサより下へッケル、ケーラスの徒に至るまで宇宙の活物なるを信じつゝあるは東西其揆を一にするといふて宜しい

天地萬象は既に一體なりとすれば吾人と山河草木とは一體にして同一なる生物と見るより外はない。禪門に

有情非情同時成道

といふ名言があるが、有情とは情識ある生物、非情とは情識なき無生物で

ある。此等生物も無生物も同時に悟道して居るとの意で、頗る難解の文字であるが、萬有一體の理に達して見れば當然のことゝ謂はねばならぬ。中江藤樹が

人は小體の天にして天は大體の人なり。我心は則ち大虛なり、天地四海も我心中にあり

といひたるも宇宙と吾人と同一生物にして渾然一體たる所に著眼したのであらう。藤樹は又

萬の物皆大本より生ずれば四海の人悉く連れる枝なり

といふて這般の消息を明言した。中根東里は

人は天地の心なり、故に天地は人の身なり……宇宙即ち是人、人即ち是宇宙、宇宙は人の大全なり

と公言し、また

天地も己なり、萬物も己なり、天は己が高きなり、地は己が厚きなり、日月は己が明かなるなり

といひたるは天地と自己と泯然融合したる境界で謂ふべからざる妙味があると思ふ。王陽明曰く

人的良知は是れ草木瓦石的良知なり、若し草木瓦石に人的良知なくんば以て草木瓦石と爲すべからず。豈唯草木瓦石と爲すのみならんや、天地も人的良知なくんば亦天地と爲すべからず。蓋し天地萬物は人と原是一體なり。其發竅の最精なる所、是人心一點の靈明なり。故に五穀禽獸の類は皆以て人を養ふべし。藥石の類は皆以て疾を療すべし。只此一氣を同くするが爲めの故に能く相通ずるのみ

と。這は王學の萬象一體觀である。禪は此理を吾人が日日に應用する所に於て妙味があるのである。其一例を擧げんか

六祖大師が法性寺に止宿したる時、暮夜に幡の動くを見て二僧の對論するを聞く、一僧云く風の動くなり、一僧の云く幡の動くなりと。往復難詰すれども理に契はず。六祖云く風の動くにあらず幡の動ぐにあらず仁者(二僧指す)の心動くなりと。

心の一字を面白く活用したものでないか。また

李翺が朗州の刺史たりし時、藥山禪師を景慕し、屢々請すれども應せず、李翺乃ち特に藥山に入り禮を整ひて禪師の前に詣る。禪師端坐して經を看、故らに顧視せず。李氏云く面を見んよりは名を聞くに如かずと、乃ち袖を拂て出んとす。禪師召して云く李翺と。李氏頭を回らす。禪師曰く、何ぞ耳を貴て目を賤くするやと。李氏遂に禮拜して起て問ふ、如何なるか是道と。禪師手を以て天を指し、復た淨瓶を指て云く、會すや、李氏曰く會せず。禪師云く雲は青天に在り水は瓶に在りと、李氏因て頓悟し偈を呈していふ

練得身形似鶴形　千株松下兩函經
我來問道無餘事　雲在青天水在瓶

これ亦大道即ち天地の本源、眞如の妙用を自己の左右に使ひ得る活作略である。また

李翺が歸宗に問ふ、敎中に須彌に芥子を納るといふは渤即ち疑はず、芥

子に須彌を納るると是妄談にあらずやと。歸宗曰く、人傳ふ使君は萬卷の書籍を讀むと然りや否や。云く然り。宗曰く、公は頂より踵に至るまで都て椰子の大さの如し、萬卷の詩書何れの所に向てか著くると。

李翺以爲らく須彌山は高大なれば其中に芥子の小を納るといふは何の不思議もない、然れども芥子の小の中に須彌山の大を納るといふは倒逆的なる妄言であらうと。這は李氏が未だ萬象一體の理を活用すること能はざるの致す所である。芥子に須彌を納れ、須彌に芥子を納るとは萬有の一體にして互に泯融するを譬ひたに外ならぬ。既に萬有は一體なりとすれば大も小も細も麤もない筈である。さるを李氏は須彌を大とし芥子を小とするの偏執を離れず、徒らに文字に追隨したるは惜むべきである。禪を學ばんとする者は宜しく慕直に其大意を領すべし、文字言句を追ふ時は永く葛藤に桎梏せらるゝの虞がある。譬へば歌仙が錦腸を披く時は天地を動かし鬼神を感せしむるといふ、されど文字通りに天地が震動し鬼神が泣く譯ではない。狂歌師宿屋飯盛の吟に

歌よみは下手こそよけれ天地の
　　動き出してはたまるものかは

とある。畢竟文學言句は草を打つて蛇を驚かす手段と見てよいのである。

鼎州の文殊禪師に一僧あり問ふ、萬法は一に歸す、一何れの處にか歸すと。師曰く、黃河九曲と。

茲に萬法とあるは萬有のことで、一切萬象は其歸著する所は同一元である。然れども其一元は如何なる處に歸するかとの疑問である。古今哲學者宗教家の中に一元論を唱へた人は澤山ある。然れども其一元は果して何なりや、一元の本質は如何と深く論究した人は少い、此僧の問ふ所は一元の本質果して如何といふにある。而して文殊禪師は直ちに黃河の水の九曲して流るる其儘の姿を以て答へられた。今は黃河に要點があるではない、歷々分明に目前の事象の中に一元の活動しつゝあるを示したのである。若し黃河なる葛藤を攀ぢたならば黃河の水の澄むまでは領悟することはできぬであらう。上述の如く禪門の問答は萬有一體の理を活用して一塵一芥にも無限絶

對の理を含むの妙を示してある。西人の諺にも

一切の物は、皆全宇宙を寫す鏡なり

とあり。程伊川の語にも

衆物必ず表裡精粗あり、一草一木皆至理を含む

といへるは佛教に所謂「一色一香として中道に非るなし」てふ格言と相似たるを見る。然れば則ち大道といひ、一元といひ、絶對といひ、本體といひ、眞如といふも一色一香一草一木を離れたものではない。さるを玄妙と稱し、幽微と唱ひ、深奥といふて徒に六づかしくのみ心得たるは大なる間違いである。若し眞に玄妙を論じ、幽微を闡き、深奥を發いたならば吾人が舉手投足も玄妙なり幽微なり深奥なりといはねばならぬ。王陽明の詩に

饑來喫飯倦來眠　只此修行玄更玄
說與世人渾不信　卻從身外覓神仙

とある如く、平生茶飯の常事中に幽玄の道はあるのである。

投子和尚に一僧ありて問ふ、一切の聲は是佛の聲なりと然りや否やと。

師云く然りと。僧曰く、和尚、屎沸盌鳴聲をなす莫れと。師便ち打つ。

又問ふ、麁言及び細語皆第一義に歸すと然りや否やと。師云く、然りと、

僧云く、和尚を喚て一頭の驢と爲し得んやと、師便ち打つ。

一切の聲は皆佛の聲、法の聲、眞如の聲にして一切の麁言も細語も皆第一義に歸するは謂ふ迄もない。然るを此僧は此理を實地に踐み左右に活用する力がなくして空しく没言放語するのみである。これ謗法の罪といふべし。之に反して眞に此理を體認して之を起住言語の間に活用せば十二時中佛祖を供養し、先聖古賢の德に酬ゆるといふて宜しい。

加之、萬有一體觀の中に神を遊ばしむる時は理として通せざるなく、事として妙ならざるなく其快味謂ふべからざるものがある。古へより一能一藝に遊ぶ人さへ其中の興趣は限りなく深く且つ遠い。されば

慈鎭和尚(諱慈圓)の弟が奈良の一條院門主たりし時或年八月十五日夜に人人打ち群れて、今夜は慈圓坊の歌よみ給ふならんと評し合へり。之を耳にしたる門主は翌日に至り、比叡山なる兄の慈鎭和尚に書簡を贈りて云

ふ、一山の貫首たる貴き御身にてありながら、日夜に詠歌にのみ御心を寄せ給ふは釋門の本義に背き給ふにあらずや。昨夜觀月について人の御噂申すを聞き、世上の風評も如何あらんと思はる。願くば歌道を思ひ捨てさせ給へと。慈鎮和尚は其弟の好情を謝して一首の歌を添へて返書した

皆人の一つの癖はあるものを
われには許せ敷島の道

是に由て之を觀れば和歌に遊ぶの嗜味も亦格別であらう。芭蕉門下の園女は丈夫の氣魄ありて俳諧に造詣深かりしは何人も知る所なるが、彼女が雲虎和尚に答ふる文に

來書の旨趣拜見申し候。不求眞不求妄者大道の根源、誰も存する處、憚ながら珍からず候。一心源頭に上りての所作、柳は綠、花は紅、唯其の儘にして常に句をいひ、歌に綴りて遊び申候ことに候。無益の口業にて候はゞ一切の經も無益の口業にて候。法のくさきことを嫌ひにて我平日

の行は念佛と句と歌となり。極樂へ行くはよし、地獄へ落つるはめでたし。

誰か見ん誰かしるべき有にも非ず
無きにもあらぬ法のともしび

とある。以て園女の見識と其遊ぶ所の樂みを見るべし。中江藤樹が天地の間に己れ一人生きてあると思ふべし。天を師とし神明を友とすれば外人に賴る心なし

といひ。また

君子安樂の本體は吾人方寸の中にあり

として、道を樂みたるは最も稱すべきである。此の如き學者の用心は禪を學ぶものゝ參考とすべきものである。奥宮慥齋は悟道の樂みを陳べて

其疑ふ所益〻大に、思ふ所益〻窮して頭より踵に至るまで、通身渾て是一大疑團となりて思竭き意喪し、心斷ち神失ひ、然る後恍然脫然、乍ち此疑團を打破せば則ち悶々黑窣、進退俯仰して精神發超し、生來未だ曾

て夢にだも見ざるの一大活路を得ん……是れより以往は、上に徹し下に徹し始めに徹し終に徹し、初學より以て聖人に至るまで一條の路程たるのみ……夫れ苟も一旦此に見るあらば則ち其行掩はず其質未だ化せずと雖も、蓋し其見る所は則ち鬼に質し聖を俟ちて復疑惑すべきなし。而して經傳に說く所を見るに千言萬語盡く吾の舊言陳語の如けんといふて居る。慥齋の所謂悟道は禪の悟道と其趣を異にするは勿論なるも其樂みに至りては一であらう。吾人も一旦萬有一體の妙處に悟入し、起居俯仰の間に之を活用したならば其樂み測るべからず。恰も陸象山が

我は六經を註せず、六經は皆我註脚なり

といふた如く、一切の經卷は皆吾人が悟道の註脚となり、古今の聖賢は皆吾人の使徒となるであらう。否、天地間の萬象を以て吾人が悟道の註脚とするであらう。呆菴の曰く

此經雖然無文字
展則量包大千界
八萬法門皆揭示
卷之不盈方寸地

天地を以て經卷とし、萬象を以て文字とし、之を卷て方寸の間に收むるは萬有一體觀の妙味である。陸象山の句にいふ

從來膽大胸膈寬、虎豹億萬虬龍千、
從頭收拾一口吞、有時此輩未安恬、
哮吼大嚼無毫全、朝飲渤澥水、暮宿崑崙巔、
崑崙巔、連山以爲琴、長河爲之絃、
萬古不傳音、吾當爲君宣、

這は象山が十七歲の作なりといふ。以て彼が如何に豪岩卓犖なる人物なりしかを知るに足る。蓋し彼が十三歲の時、宇宙の二字に就て省悟する所ありて、宇宙は即ち吾心、吾心便ち宇宙といへるより見れば其溢畜する所深く且つ大なるに由りて斯の如くなるに至つたのであらう。朝に渤澥の水を飲み、暮に崑崙の巔に宿し、連山を以て琴となし、長河を之が絃となす、萬古不傳の音、吾當に君が爲めに宣ふべしといへるは禪僧が無情說法の話を提唱するが如く、山岳爲めに震ひ、巖石爲めに點頭するの慨がある。ま

た横井小楠の詩には

帝生萬物靈　使之亮天功　所以志趣大
神飛六合中
道既無形體　心何有拘泥　達人能明了
渾順天地勢

といふ句がある。然れば愛國者が志氣を大にし、憤然蹶起して國家の爲めに命を致すも、學者が人類共通の無盡藏たる眞理の研覈に一身を犧牲にするも、仁君が萬民を以て其子とするも皆其思想の源底を探れば天地と心を齊うし、自然と其德を一にするを見る。藤原惺窩云く

天の本心は天地の間にあるほどの物をさかえるやうにわはれみ給ふなり。かるがゆゑに人となりては人に慈悲を施すを肝要とするなり

と。然り、洵に惺窩の言、然り。天地の本色は萬有の化育にあり、故に吾人が慈悲同情の行ひは天の本心に契ひ宇宙の化育を輔くるものとす。萬有一體の理よりせば是亦當然の推理である。高祖大師の垂示に云く

故僧正建仁寺におはせし時、獨りの貧人來りて曰く、我家貧うして絶煙數日に及ぶ。夫婦子息兩三人餓死しなんとす。慈悲を以て是を救ひ給へと云ふ。其時房中に都て衣食財物等なし。思慮をめぐらすに計略つきぬ。時に藥師の像を造らんとて、光の料に打のべたる銅少分ありき。是を取て自ら打折り、束ねまるめて彼貧客に與て曰く、是を以て食物にかへて餓をふさぐべしと。彼の俗よろこんで退出しぬ。時に門弟子等難じて云く、正しく是れ佛像の光なり、之れを以て俗人に與ふ。佛物己用の罪如何ん。僧正の曰く、誠に然り、但し佛意を思ふに佛は身肉手足を割きて衆生に施せり。現に餓死すべき衆生には設ひ佛の全體を以て與ふるとも佛意に合ふべし。亦云く我は此の罪に依て惡趣に墮すべくとも只衆生の餓を救ふべしと云々。先達の心中のたけ今の學人も思ふべし忘ること勿れ

と、又示して云く

道心者といふは昔しより三國みな貧にして身をくるしくし、一切を省約

して慈あり道あるをまことの行者といふなり

と。榮西禪師の心操、我高祖大師の清節、仰げば愈〻高く、鑽れば愈〻堅しといふべきか。また

昔し慈心僧都一日庭前にて草を食ふ鹿を見給ひ、人をして之を打ち追はしめらる。或人問ふ、師は慈悲なきに似たり、草を惜みて畜生を惱ましめ給ふかと。僧都云く、否、吾若し鹿を追はずんば此鹿ついに人に馴れて惡人に近かん時、必ず殺されん、われ之を憐むが故にうち追ふなりと。

古人の心を用ふる是の如し、豈思はざるべけんや。これを天地と心を同うすといふのである。

却說、上述の如く萬有一體觀に安住して天地の心を以て心とし一點の疚しき所なければ此に越したる樂みはない。山鹿素行の詩に

天空海濶小茅屋　四序悠々春色長
笑殺淵明無卓識　北窓何必羲皇

といふ句があり、また

有井無田貧亦極　綫支伏臘意悠々
平生不作顰眉事　直以百年當一遊

といふてあるが如何にも素行が安身立命と見える。愚俗の眼にて見れば君子の窮厄に處するは憐れむべきが如くなるも深く君子の胸中に立入りて洞察すれば却て羨むべき境界である。

詩人董澐なるなのが其齡六十八にして王陽明を師として道を求めたる時、董澐が鄕里の子弟は澐が勞苦を憐れみ、翁老いたり何ぞ自ら苦むと是の若きやとて招き還らしめんとしたるに、澐云く、吾幸に苦海を逃れ、汝等の自ら苦むを憫れむ、顧て吾を以て苦むとなすや、吾方に馨を渤澥に揚げて羽を雲霄の上に振ふ、安んぞ能く復た網裏に投じ樊籠に入らんやと。

彼が自適の狀を想見するに足る。貧富とか名譽不名譽とか、利不利とかいふことが絕えず吾人の胸中に往來して吾人を惱ます間は眞に道を樂しむものとはいへぬ。眞に道を樂む時は貧富も窮達も吾人を惱ますに足らぬやうになる。賣茶翁の偈に

優遊方外樂天眞　九々老翁生計貧
一箇錢筒纔濟餓　半窓僑居好安身
館前車馬泯喧寂　爐內笑談忘主賓
寄跡聖林行樹下　松風拂盡利名塵

とある。また通天橋畔に茶を煮ると題して

楓樹林中水石邊　茶烟籠錦擁通天
松風自共泉石響　何識人間有此仙

と吟じた。如何なる人も皆翁の如く遁世脫俗せよといふではないが、何人も俗に居て俗に染まざるの操守がなくてはならぬ。芭蕉翁の門人、支考は正德元年八月十六日に自ら歿すと稱して踪跡を晦まし、『阿難話』と題する追善集をも自ら上木して越中に隱匿したるが、世人が一向稱贊してくれぬから鐵面皮にも三年の後に再び世に現はれた。

風雅を尙び高潔を專らとしたる蕉門にも是の如き卑陋の人が出た。支考が俗惡と賣茶翁が遁世飄逸とを攪き雜せたなら當世に相應した人格ができや

うと思ふ。禪語に

手に任せ拈じ來て不是あることなし

とあるが吾人は一切の事物を偏執せずして自由自在に用ふるの手腕を養ふを可とす。兎角吾人は習慣に拘束せられ、思想の惰力に左右せられて自在を失ふ傾向がある。例せば日本婦人の或者は結髮の舊風に羈絆せられて他に其美質を發揮すべき方法を考へず、支那婦人の或者は纏足の惡風に拘泥して不具、不自然に甘んじ、日本男子の或者は家居坐禮の陋習を貴として之を改むるを嫌ひ、基督敎徒の或者は神を人間の如く考ふる思想の習慣を脫せず、佛敎徒の或者は敎祖を超人とする舊思想を脫する能はず、太甚しきに至りては己れの信ずる所と全々反對なる習慣を維持して得意としつゝあるは笑ふに耐へたり。故に吾人は一切の事物に拘泥せざるやう心を用ゆるを要す。若し事物に拘泥せざる時は吾人は自在に事物を利用することができる。禍をも轉して幸となし、敵をも轉じて身方とし、毒藥をも轉して良藥とし、賓を轉じて主とし、主を轉じて賓とするの活用をなすべきであ

る。譬へば

俳人素行が行脚の時、路傍の一茅屋に宿を求めたるに一人の老婆出來りていふ、出家ならば一宿を許さんと。素行乃ち僧なりと稱して投宿したるに、老婆佛壇に燈火を點じて讀經を請ふ、素行心中大いに困しみたるも、今更に詮かたなければ、何氣なき體にて行李を開きて俳諧七部集を取出して蕉門の名士の名を讀み、『其角、嵐雪、丈草、去來、野坡、北枝、杉風、凡兆、支考、惟然、土芳と繰廻し〳〵て鉦を打ちつゝ讀み上げ、遂に化の皮を現はさずして一宿したといふ。

これと同じく禪者は物に中りて動著せず、手に任せて何物をも拈し來て活用するを可とする、例せば

榮西禪師が初めて禪宗を熾んに弘められた時、適、畿内に大風災あり、是に於て禪宗の流行を嫉む輩は流言を放ちて讒奏した。依て土御門天皇は有司に勅して禪師を放逐せんとするの議があつた。榮西禪師は之を聞て少しも憂へず、門弟に告ていふ、我事成れりと、依て奏していふ、風は

天地の氣にして人力の如何とする能はざる所なり、若し能く風を作す者あらば其人は必ず靈なるべし。明主は此人を放逐すべからず云々と。

かくして群小の讒奏は却て榮西禪師の幸となつて禪宗勃興の緒を開いた。

禍福二つなしとは此を謂ふのである。然れば惡人に遇ふも却て濟度の因緣なりと喜び、災害を蒙るも「限りある身の力ためさん」と思ふて憂へず、貧窶に處しては「身貧にして道貧ならざる」を努め、富貴に居ては人を惠み財を施し、盛名を博しては浮雲の空を行くが如く、稠人の中に立ちても孤峰頂上にあるが如くなれば

かくれ家は今は求めじ何處にも
さて住ふこそ靜かなりけれ

てふ境界となるであらう。是を動中に靜を得、靜中に動を得るの自由といふ。

明治十三年に東京に大火ありて本所區の邊まで烏有となりたるが、此時中根香亭翁用事ありて本所なる燒け跡に至りたるに偶、原坦山和尚に邂逅

した。香亭問ふ、和尚何處に行くやと。坦山云く、予は知人の類燒を聞きて之を見舞はんとて來れり、然れども彼が住處を忘れて今や彷徨しつつありと。香亭曰く、其姓名は何とか爲すと。坦山云く、斯の如き大火なれば姓名も如何になりしやを知らずと。

香亭は禪學に造詣ある人なれば坦山との問答にも坦山は火災に托して禪を談ずるの痕を見る。然れども坦山が豪放洒落の狀は此問答にも躍如として現はれて居る。坦山は事物に動着せず萬事に偏執なくして能く時世に適應して禪の眞骨頭を打した偉人である。吾人は既に萬有一體觀に就て一言したから、これより少しく死生透脫觀に關して陳べて見やうと思ふ。

第五、死生透脫觀

生死は人間の一大事たるや論なし。されば吾人人類の苦辛經營は皆悉く個人的又は種族的生活の爲めにして此等の生活を度外にしたる。企劃は文明も道德も無意味に了るを常とする。何となれば倫理といひ道德といふも畢竟人類の高尚なる生活にして文明といひ野蠻といふも高尚なる生活と野卑

なる生活に外ならぬ。故に學を講じ理を明かにするも生活を外にしたる學理は活ける人類には無用の長物である。然れば則ち生、即ち生活が吾人に緊切なると同時に死も亦忽諸に附すべからざる大事となる。何となれば死は個人的生活の停止にして、個人の絶滅は人類の絶滅を意味するからである。是を以て禪門にては生死の問題を解決するを一大事とする。然るに佐藤一齋は

釋は死生を以て一大事と爲す、我は則ち謂ふ。晝夜は是一日の死生にして呼吸は是一時の死生なり、只是尋常の事のみ

といふて居る。佛敎にて死生を一大事とするは吾人が前に陳べた通りである。晝夜が一日の死生にして、呼吸が一時の死生なるは三歲の童子も之を知る。故に佛敎には刹那生滅の說あり、萬象の遷流生滅を瀑布に譬へ、旋火輪に喩へてある。一齋が評言は惜い哉正鵠に中つて居らぬ。然れば生死の大問題は如何に解決し、如何にして生死を透脫するかといふに、高祖大師は

生死は佛の御命なり

と示されて、生死は嫌忌すべきにあらず。人類の死生、萬象の榮枯生滅は佛即ち絶對の活動なり生命なりと觀ずるのである。例せば一草一蟲の枯死は草蟲たる個體其物の變化に止まりて草蟲全體の生命より見ば何等の增減もないのである。且つや個體の枯死は全種の生存上絶對的必要の事項である。譬へば木葉の年々歲々秋に落ちて春に生ずる如く、新陳代謝して生命を新たにするは生物の常である。かくして禽獸蟲魚の死滅も人類の老死も齊しく落葉地に敷くの光景であるから、頓て春陽駘蕩の來るべき準備なのである。故に死は決して哀しむべきものでない。

加之、天地は一大活物にして不生不死無始無終の存在なりと悟りたる已上は吾人の死亡は但に個體の分裂に過ぎずして、吾人が短促なる生命を捨て宇宙の無限なる生命の中に歸るのである。即ち有限に死して無限に活きるのである。然れども吾人は決して死を奬勵するのではない、不自然なる死は最も吾人の恥辱とする所である。何となれば假設天災地變によりて不自

然の死を遂げたりとするも、亦は吾人が自然の勢力を利用するの智に缺如する所あるが爲めである。況や人生の憤闘に敗衂し落膽して自殺するが如きは最も男子たる者の醜辱とする所である。

また個體的の死亡は宇宙の萬物が活動しつゝある以上は到底免るゝ能はざる所なれば之が爲めに絶えず吾人の心を惱ますが如きは愚と謂はねばならぬ。また大切なる生活を繼續せんが爲めに日夜に生活の爲めに痛心して却て生命を短縮するも癡と謂はざるを得ぬ。故に吾人の生活するや、西人のいへる如く

生くべき時に死せんと欲するの怯懦を免れ、また死すべき時に生きんと欲するの怯懦を免れねばならぬ。古來邦人は死を輕んじ、些細なることにも一命を捨つるを以て勇士と思ふの弊がある。這は大なる誤解にて「生くべき時に斃死せんと欲するは最も卑しむべき怯懦である」故に西諺にも

生きるは死するより更に勇敢なり

とある。之と同時に死すべきに當りて生きんと欲する程醜きことはない。

其生くるや明日死するが如く、其死するや永久に生くるが如くせよ

これ吾人が座右の銘なり。其生くるや今日を以て限りとして義務を果し、明日死するも悔ゆるなきを期すべく、其死するや永久に生くるの思ひをなして毫も死を惧れず、これが吾人の死生觀である。老子以爲らく

吾に大患ある所以は吾身あるが爲めなり、吾身なきに及びては何の患かあらん

これ未だ死生の間に自由を得たといはれぬ。何となれば吾身を邪魔にするが爲めである。吾身を邪魔にするやうでは超然として死生の外に立つことはできぬ。式亭三馬が辭世の句に

善もせず惡も作らず死ぬる身は
地藏もほめず閻魔叱らず

とあるが、頗る禪味を帶びて面白い、生きては善惡の念が胸中に往來し、死しては地獄と天堂とが心にかゝるやうでは死生の樊籠を透脱したのでない。三宅尙齋の詩に

富貴壽夭不二二心一　但向二面前一養二誠心一
四十餘年學二何事一　笑坐二獄中一鐵石心

なる一絶がある、吾人は生きて精神の堅固なること此詩の如くありたいと思ふ。また

莊田琳庵は龜山侯に仕へ群小の爲めに擠排せられ、直諫して用ひられず、獄に下りて其首を斬られんとする時、絶命の詩を朗吟した

迫二慕胡忠簡一　英名萬古流　浩然同二正氣一　一笑隕二儂頭一

死して琳庵の如くならば死も亦光榮ありと云ふべし。惜し哉、琳庵が絶命の辭には從容として迫らざる高風が缺けて居る。然れども死生の間に晏如たる境界は一朝に至るを得べきにあらず、學ぶ所深く、養ふ所篤くして次第に其域に進むのである。伊藤仁齋の云く

學者當に悟門の自ら開くを竢つべし、我より之を開發する勿れ。眞積み力ひること久うして怡然として理順ひ、渙然として氷の如く釋く、之を悟門自ら開くといふ。永く己れが有となりて終身失はず。蓋し實德の到

る所にして專ら智見を事とする者の得て及ぶ所にあらず。正に之を實智といふ。

と、黄檗和尚も亦いふ

千日慧を學ばんよりは一日道を學ぶに如かず

と。然れば則ち死生の大事を明むるも之と同じく眞積み力むると久うして後、手に得、心に應ずるのである。徒らに博く讀み、多く紀するのみにて、智見を鋭くしたりとて實德を養ふことはできぬ。是を以て吾人は百科の書を渉獵せんよりは寧ろ退いて自ら工夫し、師を尋ぬ道を訪はんよりは自然に對して觀念を凝すをよしとす。王陽明の句に

潛魚水底傳心訣　棲鳥枝頭說道眞

といひ、また

高歌度與清風去　幽意自隨流水春
千聖本無心外訣　六經須拂鏡中塵

云々といふ句がある。潛魚棲鳥に對して安心の訣を求め清風流水に對して

心鏡の塵を拂ふたならば千聖不傳の妙術を發見して六經を以て我註脚とすることができやう。呆菴云く

參玄旨外討便宜　恰似擔泉帶月歸

江南是處梅花海　探得春風第一枝

禪の玄旨に參ずる者は飛華落葉といはず、艶櫻素梅といはず、皆以て我師とするに足る。ヘンリイ、ウッドの語に

精神は砂石中に眠り、草木中に夢み、動物中に力を集め、人の靈魂に於て自醒自覺する

といふてある。さすれば砂石心、草木心、動物心、孰れが一大心海の一滴ならざらん。精細に看取すれば到る處に餘師があるであらう。高祖大師示して曰の給はく

古人の云く、聞くべし、見るべし、得るべし。又云く、得ずんば見るべし、見ずんば聞くべしと。いふ心は聞かんよりは見るべし、見んよりは得るべし、未だ得ずんば見るべし、未だ見ずんは聞くべしとなり

と。實に吾人の學問は聞いて之を語るに過ぎず、所謂耳口三寸の學なり。更に造詣深きものは能く道を看取して誤らず、しかも未だ智見の分際を免れず、更に修養を累ぬるに至りて始めて自得するを得、自得するを得れば千經萬論皆吾有となるのである。生死の透脫は耳口三寸の學にては企て及ぶべからず、宜しく精を勵まして工夫をせなければならぬ。

昔し塙保己一は勾當の職に昇らんが爲めに天滿宮に祈りて日參し毎朝心經百卷を讀誦して千日に至らんと誓ひ、九十日にて勾當の榮職に就くを得たり。しかれども一身の計を爲さんよりは、世の爲め後の爲めにせんとて群書類從を編集せんとの大志を發し、天滿宮にちかひ心經百萬卷の願をたて、半ば讀まんほどに千部の書を集め、讀み畢へなんまでには上木の功なりぬかしとて、これより朝には鹽たちし、日毎に寅の時より起き出、百卷づゝの看經怠らざりしといふ。

塙翁が絶世の精力、篤學の心がけ、萬代の鑑とやいはん。かくてこそ大業をも奏しつれ、吾人の惰弱放逸なる翁が傳を讀みて流汗の背に浴きを覺ふ。

古人は二十年三十年を坐禪辨道に費やして積年の疑團を消融したのである。然れば吾人も及ばずながら歩々實地を蹈みて早晩大成を期せねばならぬ。惟ふに吾人は單に死を惧れざるのみにては何の所詮もない。華嚴の瀑に命を落し、阿蘇山の噴火口に身を投じ、鐵道線路に身を横へ、江海に溺れ、樹枝に縊るゝ者も死を畏れず、强盜殺人の惡漢も亦死を畏れざる者が多い。然れば死を恐れざるのが肝要なのではない、生きて悔いず、死して恨みず、死生其處を得て死生を以て念とせざるをよしとするのである。

昔し曹山和尚紙衣道者に問ふ、如何なるか是紙衣下の事と。道者曰く、一裘纔かに體に掛つて萬法悉く皆如なりと。曹山云く、如何なるか是紙衣下の用と。道者近前し應諾して便ち立て脫し去る。曹山云く、汝只恁麼に去るを解して且つ恁麼に來ることを解せずと。道者忽ち眼を開いて問ふ、一靈の眞性胞胎を假らざる時如何と。曹山云く、未だ是妙にあらずと。道者曰く、如何なるか是妙と。曹山云く、不借借と。道者便ち珍重して却て坐脫すといふ。

紙衣道者は禪に於て造詣淺からざるも未だ死生觀に於て眞を得ざる所があつた。故に曹山和尚が如何なるか是紙衣下の事と、死生の一大事に對する所見を問ふた時、彼は一裘體に掛て萬法悉く皆如なりと答へ、一裘一褐に身を包んで心は宇宙萬象の皆不生不滅如々不動なる所に安住するといふた。然れども如實不動の一理のみを見て未だ其活用勇略を缺くが故に曹山和尚は更に紙衣下の用と問はれた。然るに道者は少しも反省せずして立ちながら逝去して如實不動の地に住著せんとした。曹山乃ち云く、汝は是の如く去ることを知て未だ是の如く來ることを知らぬ。其一を知て未だ其二を知らず、其死を知りて未だ其生を知らずと。道者之を聞て始めて反省したるものゝ如く、眼を開いて問ふ、一靈の眞性胞胎を假らざる時如何と、一靈長へに明かにして胞胎を假りて生死せざる時は如何と問ふたのである。曹山和尚の云く、死生を離れて不生不死なりとも未だ妙ならず、死生ありてこそ始めて不生不死の妙も知らるゝなれと。道者曰く、如何なるかを是妙と。曹山和尚云く、不借借と、胎胞を借るの借らぬのといふべきではない。

胎胞を借るも生死するも皆是妙用である。是に於て道者は坐して入寂した。

曹山和尚の一語は萬卷の經を讀むよりも道者の爲めに善い引導である。澤庵和尚云く

谷虛にして山自らこたへ、人無心にして物能く感ず、芭蕉耳なくして雷を聞き、磁石無心にして鐵をてんす。無心の力いくばくぞや、菩提心さへ胸に殘らば煩惱なるべし、まして煩惱を胸におかんや

と。然れば不生不死なり、平等一如なりとて胸中に蓄へて之を珍重する時は却て一種の病となる。菩提心さへ胸に滯らばこれ美食の胃中に停滯したる如くにして其身を害する。故に美食は宜しく消化して血液として全身を活動流行せしむべきが如く平等一實の理も之を精神に消化して死生の間に活用するを要するのである。

北條氏照が宗關寺を再興したる時、土木の事を監督したる中山勘解由は同寺の隨應禪師に禪要を問ふた、禪師は不思善不思惡の則を授けて參究せしめたるに四年を經て屢見解を呈したるも禪師之を肯はず。然るに豐

臣秀吉大軍を以て小田原を攻め、勘解由は八王子に戰ひ一日流箭の額に中りたる一刹那、豁然大悟し、敵の重圍を衝いて山に入り隨翁禪師に見えて悟る所を呈した。禪師乃ち之を印可し金襴の袈裟を與へられたるに勘解由は之を鎧の上に掛け城に入りて自裁し、血を以て遺偈を認めた

提起吹毛劍　凡聖齊潛蹤　清風拂明月　明月拂清風

かくして小田原城殘落の時北條氏政の辭世には

雨雲の覆へる月も胸の霧も
拂ひにけりな秋の夕風
我身今消とやいかに思ふべき
空より來り空に歸れば

同じく北條氏照の辭世には

吹と吹風ないとひそ花の春
紅葉の殘る秋あらばこそ

とある。以て當時の武將が心術を察すべし。また建治元年四月、大元の使

節杜世忠等五人我邦に來り北條時宗の爲に龍の口にて首を刎ねられたるが、使節の一人、奉訓大夫兵部郎中何文着は歳三十八にして絶命の偈を作つた

四大元無主、五蘊悉皆空、兩國生靈苦、今日斬秋風

此等の人々は空觀を專らとしたものと見えて生死を以て一場の夢と觀する傾向が明かに現はれて居る。吾人は空理を以て未だ盡ざる所ありと思惟する。

弘長三年十一月廿二日北條相摸守時頼入道は最明寺に於て卒去したるが臨終に法衣袈裟を著け繩床に上りて坐禪し聊も動搖の氣なくして頌を作りていふ

業鏡高懸　三十七年、一槌打碎　大道坦然　弘長三年十一月廿二日道崇珍重

と。時頼が辭世としてはさもあるべし。然るに本居宣長此事を論じて北條足利の世のほどは、たかきもみじかきも、人みな殊に禪法にまどへりしかば、死なんとするときはに、かゝるさとりがましき、いつはりど

とするを、いみじきわざに思ひためり、いとうるさく、かつはをこなるわざなりけり

といふて居る。北條足利の代に禪宗の行はれたるは云ふ迄もない。然れども時頼が辭世を以て「さとりがましき、いつはりごと」と評したるは酷に失す。禪に參じて心要を咨決したる人は時頼が辭世ほどのことは平生心得居るべき筈なれば、決して珍しき偈にはあらず、時頼が心にもなき虛僞を遺偈として記したりとは思はれぬ。思ふに本居宣長は偏僻なる學者にして佛法を嫌ひ漢學を忌み、無用の嘲罵を加へたることあり。これ宣長が缺點である

と思ふ。宣長また曰く

古今集に、やまひしてよわくなりにける時よめる、業平の朝臣

つひにゆく道とはかねて聞しかど
きのふけふとは思はざりしを

契沖いはく。これ人のまことの心にて、をしへにもよき歌なり、後々の人は、死なんとするきはに至りて、ことゞくしき歌をよみ、あるは道をさとれるよしなどよめる、まことしからずして、いとにくし、たゞなる時こそ、狂言謂語をもまじへめ、いまはとあらんときにだに、心のまことにかへれかし、此朝臣は一生のまこと、此歌にあらはれ、後の人は一生の僞りをあらはして死ぬるなりといへるは、法師の言にもにず、いとたふとし云々

と。寔に契沖のいへる如く、虛榮心の爲めに終焉の際まで表面を飾りて、仰々しき歌を詠じ、悟道がましき偈を作るは嗚呼の沙汰である。依て禪門の宗師は故らに遺偈を留めざる人さへある。俳人芭蕉も、「昨日の發句は今日の辭世、今日の發句は明日の辭世、我生涯言ひ捨てし句に一句として辭世ならぬはなし」とて別に辭世の句を作らず、病重くして夜中眠られざる儘に一句を案じて、「旅に病みて夢は枯野をかけ廻る」と吟じ、「是は辭世にもあらず、辭世にあらざるにもあらず、病中の吟なり、しかれども生死の大事を前に置きながら如何に生涯好みし風流とは云ひながら是も妄執の一とも いふべけん」といひたるが如きは誠實の情人の肺腑に迫るものがある。俳し

辭世を詠ずるものは皆衒誇の心よりすると思ふは僻見といふべきで、ひ[か]れ者の小歌」と高僧の遺偈とを同日に論ずるのである。死生の問題は死の手に捕へられて始めて眞面目に之に對するやうでは致方はない、平生此點に充分の用心なき人は兎角眞摯を缺いで外面を粧ふを免れぬ。

或時京都府知事中井弘が某々を招いて小集を催ほした時、坐中に天田某なる禪僧があつて顏色を正しくして拙僧は精進なれば魚肉の類は一切食はぬといひたるに、主人は冷然としていふ、开は貴僧が修行の未熟といふものだ、肉や魚があつてもそれに頓著なく、傍にある菜漬の香の物でさら〳〵やつてはどうだ、貴僧の精進なるは廣告せんでも皆知つて居る。また魚肉の香さへ避けるとならば食時の頃には一切俗家へ立入らぬがよいではないかといはれた話がある。

表面を衒ひ、清僧がる法師に一人として眞の道人はない。本居宣長の云くうまき物食はまほしく、よき衣きまほしく、よき家にすまほしく、人に貴ふとまれまほしく、たから得まほしく、命ち長からまほしくするは、

皆人の眞心なり……世に先生などあふがるゝ物知り人、あるは上人などたふとまるゝ法師など、月花を見ては、あはれとめづる顏すれども、よき女を見ては、眼にもかゝらぬ顏して過るは、まことに然るにや、若し月花をあはれと見る情しあらば、ましてよき女には、などか眼のうつらざらん、月花はあはれなり、女の色はめにもとまらずといはんは、人とあらんものゝ心にあらず。いみじきいつはりにこそ有けれ云云

と。宣長のいふ所、大いに理あり。われ父母を愛す、われ朋友を愛す、われ憐人を愛す、われ猫狗を愛す、われ小兒を愛す、されどわれ婦人を愛せずといはゞ、いみじき僞りならん。愛の理は則ち一なり、獨り婦人を愛せずといふは矯飾である。矯飾の心がありては深く道に入ることはできぬ。然れば吾人はこと〳〵しき辭世など殘さんとする虛榮心を去りて眞摯に死生の問題に向はねばならぬ。

太田持資入道道灌は智勇絶倫にして武技に秀で且つ和歌を巧みにし、志を傾けて禪法を信じ、城中に靜勝軒を設けて自適したるが、殊に龍穩寺

泰叟和尚を重んじ、禪要を咨ひ、また青松寺雲岡和尚に參じて省悟した り。此時に當りて關東管領山内の顯定、扇谷の定正、兩上杉と稱して互に頑頑しつゝあり、然るに道灌は定正を輔翼したるも屬吏の讒に遇ひて定正の爲めに計られ相州糟谷に詣りたるに、定正、道灌の浴するに當りて四面より鎗刀を執りて之に迫らしむ。諸士曰く、居士平日和歌を好む、是時又如何と。道灌從容として吟ずらく

かゝる時さこそ命の惜からめ
かねてなき身と思ひしらずば

と、五十五歳を一期として恬然として逝いたといふ。

此の如く自然に言ひ出るをよしとする。仙臺の伊達騷動にて有名なる伊達安藝は其忠節義勇に於て大石良雄とも匹敵すべき人物であるが、安藝は遠田郡涌谷の城主で同所の圓同寺石水和尚に參じて禪を學んだ。安藝が愈々伊達兵部宗勝や原田甲斐等の伊達家を横領せんとする姦臣を一掃せんとて證據物件を聚め、訴願を提出して、伊達家の大事を一肩に擔ふて出府せん

とするに臨みて石水和尚を自邸に請じた。

時に安藝衣紋を正して言ひけるは、今回の出府は主家興廢浮沈の係る處、願くは垂示を賜はれかしと。石水乃ち蓦直に問て曰く、如何なるか是劍及上の事。安藝云く、法戰場中勝旗を立つ。石水云く、意旨如何、安藝云く、無二無三。石水更に問ふ、如何なるか是生死の大事、安藝云く、一超直入如來地。石水歎賞して曰く、危きを見て命を致すは卿に非ずして誰か能く之を全うせん、往け、往いて退くこと勿れ

安藝はそれより出府して、勇往邁進百難を排して姦黨を挫き主家を泰山の安きに置いた。然るに大老酒井忠清は兵部、甲斐等の姦臣に私して自邸に於て刄傷の便宜を與へ、遂に原田甲斐をして安藝を要擊せしめ、稀代の忠臣を逆刄の下に斃れしめたるは惜みても餘りある。夫れ安藝は死生の大事を悟了し、劍刄氷上を踐みて悞れざるの決心があつたればこそ、かく忠節を全うすることができたのである。伊達家騷動中、石水和尚は閑老板倉侯其他の重職に謁して伊達家の眞相を告げ忠臣等の爲めに盡力したるが、事

件落著の後、自ら其功に居らず三衣飄然として仙臺を去つた。其時の偈に

石居水宿也風流　到處溪山任杖頭
此去禪棲天下澗　扶桑六十有餘州

眞の風流とは石水の行狀の如きをいふであらう。出處進退二つながら恰然として自得す。生死透脱の禪僧とこそいふべけれ。また普明國師即ち春屋妙葩和尚は細川頼之が台命を奉じ來りて南禪寺に請せんとしたるも堅く方丈の戸を閉ぢて面せず、官命を拒むの罪を得て退去せる時、却て閑散を買ひ得たるを悅びて

一鉢生涯天地寬　滿身風雪幾雲山
多年苦屈今方述　錢樹也須春上顏

と吟じ、また

放捨萬緣唯得閑　乾坤把作一蒲團
既無余債可消遣　杜丈臥雲何處山

と賦して少しも憂ふる色なく山水の間に幽棲した。これ亦生死透脱底の行

履である。太宰春臺は自己特得の安心立命を說いて曰く

一向宗の門徒は彌陀一佛を信ずること專らにして、他の佛神を信せず、如何なることありても祈禱などすることなく、病苦ありても咒術符水を用ひず、愚なる小民、婦女、奴婢の類まで皆然なり……今純は一向宗にあらざれども孔子を信ずること彼等が彌陀を信ずる如く、鬼神に遠かりて祈禱祭祀せざること全く一向門徒の如し。……更に神像佛像を安置せず。宅に方寸の護符を貼せず、身に一封の護符を佩びず、厄難に遭ふと雖も神咒を誦じ佛名を念ずることなし。念誦の恃むに足らざることを知れる故なり。凡そ人は一生に一たび死せざることなし、何事にて死するも死するは死するなり。生ある者の常にて定れることなり。其中に人は首領を保ちて地に歿するを上とす。古の君子の願ふ所なり。然れども義に當れる事には首領を保つことを得ずして死するも命なり。命盡きざる程は必死の地に居ても死せず、命盡くれば耆婆扁鵲が禁方にても、生身の不動觀音の加持にても活かすこと能はず。若し祈禱加持にて厄難

を除き死を免るゝ者ならば天命は尊ぶに足らざるなり。死生の變のみにあらず、一切の禍福吉凶、榮辱昇沈、貴賤貧富皆然なり。かくの如く達觀通知して毫髮も疑惑することなきを知命の君子といふ。純は知命の君子にあらず、至愚陋劣なること只一向門徒の如し、是れ純が安心立命の一なり云云

と。春臺が安心立命は左もあるべし、されど吾人より之を觀れば彼が禍福、吉凶、榮辱、昇沈、貴賤、貧富を一に天命に歸して神佛を祈らずいへるは所謂宿命論にして取るに足らざる愚說なり。若し彼が信ずる如く一切の人事は皆天命の然らしむる所なりとせば吾人が義を守るも不義を行ふも、仁を施すも不仁を行ふも、窮するも達するも、德を布くも不德を犯すも一切皆天命なれば、吾人は袖手して單に天命を待つの外なかるべし。これ明かに自家撞着である。彼が神を祈らず佛を念せずといふは不可なし、されど一切萬事を天命と稱する漠たる一物に歸せしめたるは迂儒の陋見を脫せざる安心立命といふの外はない。かく彼は識見の凡庸なるに拘はらず、其信

る所極めて篤くして死生の變に處するの覺悟あるは尊ぶべきである。されば深信の士は往々死生の變に處して自若たるものあり。

クランマーが其信仰の爲めに一身を犧牲にし、火刑に處せられたるも、猛焰の中に立て右手を捧げ神を讃美して止まざりしが如きは其一例である。而して基督敎の殉敎者には是の如き類例は澤山ある。何れの宗敎にありても其造詣の深きに隨て生死に惑はざるに至る、換言すれば死生透脫に至らずんば眞に宗敎の極致に達したものではない。

上杉謙信は川中島の戰爭にて有名なる猛將なるが、天資勇邁にして最も兵術に長じ、嬪妾を近けず坐禪を好みて諸山の禪僧を延いて法を問ひ自ら所得ありと自負しつゝありたるに、林泉寺の宗謙和尙機鋒峻銳なりと聞いて之を挫かんと欲し、微服して寺に到り、衆僧と共に入室したるに和尙偶〻梁の武帝達磨に見ゆるの公案を擧げ法戰正に闌なり、時に和尙謙信を顧みて曰く、達磨不識の意旨作麼生か會すと、謙信答ふる能はず。和尙云く、大守尋常口吧々地なり這裏に到て什麼としてか說破せざると。

謙信懵然として汗を流し始めて慚服す。和尚云く、此事相應を得んと欲せば直に大死一回して始めて得べしと。茲より謙信退いて參究すること數月にして契悟し薙髮して自ら謙信と稱す。天正六年三月病に嬰りて其月十三日に卒す。臨終の句に

四十九年夢中醉、一生榮耀一杯酒

とある。古來武將の禪に志すもの多く、從ひ而して禪と武士道との離るべからざる關係あるを忘れてはならぬ。さるを現今武士道を云々するもの禪の何たるに論究せずして其眞精神を得んとするは毛を見て馬を相するの誘りを免れぬであらう。

陸象山は紹熙三年十一月下旬に至り一日卒然として家人に告ぐ、吾將に死せんと。家人曰く安んぞ此不祥の語を爲す、將た骨肉を奈何にせんと。時に象山亦自然の三語を與へて其他をいはず。翌月七日疾あり、同十四日、命して室內を洒掃し香を焚き氣を清め、沐浴して新衣を著け端然靜坐し奄然として易簀したりといふ。

さすがは道學者の最後だけありて大いに見るべきものがある。象山も亦死生透脫の人といふべきであらう。

相州成願寺の風外和尚は高蹈山居を好み、樵汲して自ら給し吟じて曰く、

道人坐臥寸心間　火刼不移這裏邊
風動槐安樹下夢　六窓深閉覺還眠

と。晩年遠州金指鄉石岡に抵りて棲居し、一日人を雇ふて靑銅三百文を與へて地穴を鑿らしめ、穴成りて後和尚自ら之を檢し、顧て曰く好し、吾を此中に埋めよと謂ひ畢りて屹然として立ちながら死したる樣、槁木の立てるが如くなりしといふ。

洵に比類稀なる終焉といふべし。然れども是の如きは學んで及ぶべきにあらず、且つ之に倣はんとすれば却て虎を描いて猫に似するの虞れがある。

更に一種變態なる往生あり

上州の有名なる博徒國定忠次は後に國定明神と祭らるゝ程の俠客だけありて、愈磔刑に處せらるゝことゝなり、馬に乘せられ引廻はさるゝ時、

已れが好める將棊に寄せて

金銀をつかひはたして角となり

桂馬に乘て京の一錦

といふ辭世を殘した、這は未だ死生透脫の安心を得たるにあらざるも稜々たる氣魄の人を壓するに足るものがある。然れども吾人は終焉に際して如何に心を用ふべきか、これ大なる疑問である。依て此疑問に答ふる爲め、左に古語を摘記して讀者の參考に供へやう。黃檗のいふ

凡そ人、終らんと欲する時に臨みて、但五蘊皆空にして四大我なし、眞心無相にして去らず來らず、生ずる時、性も亦來らず、死する時、性も亦去らずと觀じ、湛然として圓寂なれば心境一如なり。但能く是の如く直ちに頓に了すれば三世の拘繫する所とならず、便ち是出世の人なり。切に分毫の趣向あることを得ざれ、若し善相の諸佛來迎し、及び種々現前するを見ても亦心隨ひ去ることなく、若し惡相種々に現前するを見ても亦心怖畏することなし。但自ら心を忘れ法界に同うして便ち自在を得、

此即ち是要節なり

と。禪門安心の要訣、黃檗の此語に徵して略推知し得らるゝであらう。

古へより佛敎徒の終焉を見るに或は端坐して瞑するあり、或は直立して逝けるあり、或は倒立して寂するあり、或は猛火に入りて死し、或は石室に籠りて寂し、或は穴に入りて活きながら埋め、或は自ら棺に入りて化し、或は念佛しつゝ往生し、或は彌陀の來迎を拜して滅し、或は日時を刻して死し、或は死して再び蘇生し、或は變異を現はして瞑するなど、畸なるあり、凡なるあり、妙なるあり、一々枚擧に遑あらずと雖も、殊に奇を弄し人と異らんことを覓めたる者の如きは以て吾人の模範とするに足らぬ。然り而して吾人が模範とすべき終焉は敎祖釋尊に如くはない。釋尊は八十の頹齡に加ふるに身に重患ありて起居の自由を失へるに拘はらず最後の弟子須跋陀羅の爲めに特に法要を說き、之を度し畢り入滅に垂んとして諸弟子を集めて敎理の綱要を略敍し、疑ひある者は皆如來在世の間に之を問はしめ、諄々として慈父の兒孫を敎ふるが如くにし、一人も疑ひなきに及んで、

右脇を下して安臥したる儘入滅せられたのである。さすれば釋尊の所謂辭世は平生の敎誨にして、其の入滅にも少しも奇特の異相はない、平凡といはゞ平凡なれども、こゝが釋尊の釋尊たる所以である。吾人は及ばずながらも此平凡なる最後を遂げ、平凡の死生透脫觀の妙味を嘗めんと希ふのである。

吾人は上述せる所によりて旣に生死透脫觀の大意を盡したれば、これより結尾の一言を陳べて本論の始終を明かにしやうと思ふ。

第六　結辭

却說、吾人は上篇に於て守靜の用心を論じ、下篇に於て觀理の工夫を說き、以て禪の積極消極の二面を闡明した。然れども禪を實踐するには積極も消極も全く同時に行はるゝので決して之を分離することはできぬ。精神の安靜を保たんと欲せば觀理の工夫を全うせんと欲せば精神の安靜を要する。故に此二は前後始終を爲すにあらずして同時に存在し

同瞬間に表裏をなして相依り相輔けて禪の全きを得るのである。且つ觀理の工夫に於ても唯心觀と萬有一體觀とは矛盾することなく、萬有一體觀と死生透脫觀とは撞着することはない。此三觀は恰も鞦繪の三點が互に相合して一圓相を成す如く三觀合成して一大禪觀となるのである。

然れば則ち靜の一字を守りて精神の澄淸を來すは心鏡を硏磨して之に映ずる所の眞理を明かならしむるが爲めであり、また心鏡を硏磨して其中に映ずる眞理を明かならしむるは情波識浪を一掃して精神の安靜を得るが爲である。前者は靜止の用心にして後者は活動の工夫である。また後者は正智の動力にして前者は正智の地盤である。前者は錦繡の布にして後者は其文彩の如くである。

更に他の方面より觀察すれば守靜は吾人の心力を浪費せざる用心なればエネルギイを濫りに費やさずして潛勢力を養ふので、觀理は吾人の心力を適當に運用するの術なればエネルギイの適用を誤らず、勢力を應用して現實の事功を奏するのである。之を天台の法門に徵せば守靜は止にして觀理は

觀である。また宏智禪師の語に微せば守靜は默にして觀理は照である。

要するに禪の妙味は此二者を實踐するに方りて生ずる處の道風であるから參禪の實行が何より肝要である。

昔し十返舍一九は磊落奔放にして其家常に貧しく、家具なく裝飾なきが故に、自ら紙を貼りて之に床の間、違棚、花活、懸物を畫き、また傍らには箒筒及び土藏の入口までを描き、七月に至れば精靈棚まで自ら畫きて之を貼り、佛前に供ふる朝の素麵、夕の餅などをも描きて之を貼附したりといふ、

精靈なれば畫ける素麵、畫ける餅にて足るべきも、饑ゑたる吾人にありては畫餅にては如何ともし難い。また

昔し龍潭禪師は未だ出家せざる時、其家餅舗にして天皇道悟禪師の寺前に住したりしが、毎日餅十枚を以つて道悟に上る。道悟受け已りて却て一餅を留て龍潭に與へて云く、汝に惠まん以て子孫を蔭めと。龍潭曰く、是れ某甲の將ち來る所、何を以て返て汝に惠むといふや。道悟云く、是

れ汝將ち來る所、汝に復す何の咎あらん。龍潭因て悟入する所あり遂に投じて出家すといふ。

讀者請ふ十返舍が畫餅を棄て龍潭が餅を喫せんことを。　（大尾）

附錄

坐禪儀（原漢文）

夫れ般若を學ぶの菩薩は先づ當に大悲心を起し弘誓願を發し、精く三昧を修し暫て衆生を度し、一身の爲に獨り解脫を求めざるべし。乃ち諸緣を放捨し萬事を休息し、身心一如にして動靜間なく、其飲食を量り、多ならず、少ならず、其睡眠を調へ、節ならず、恣ならずして、坐禪せんと欲する時は閑靜の處に於て、厚く坐物を敷き、寬く衣帶を繫け威儀齊整たらしむべし。然して後に結跏趺坐し、先づ右の足を以て左の脛の上に安じ、左の足を右の脛の上に安せよ。或は半跏趺坐も亦可なり。但だ左の足を以て右の足を壓するのみ。次に右の手を以て左の足の上に安じ、左の掌を右の掌の上に安じ、兩手の大拇指の面を以て相拄へ、徐々として身を舉げ、前後左右反復搖振して乃ち身を正くして端坐し、左に傾き右に側ち前に躬まり後へに仰くことを得ざれ。腰脊、頭頂、骨筋をして相拄へ狀ち浮屠の如くならしめよ。又身を聳ること太だ過ぎて人をして氣急に不安らしむることを得ざれ。耳と肩と對し鼻と臍と對し、舌は上の腭を拄へ、唇齒相著けしむることを要す。目は須く微く開き昏睡を致すことを免るべし。若し禪定を得れば其力最勝なり。古へ習定の高僧あり、坐して常に目を開く、向きの法雲の圓通禪師も亦人の目を閉ぢて坐禪するを訶して以て黑山鬼窟と謂へり。蓋し深旨あり。達者焉を知るべし。身相既に定り、氣息既に調ふて然して後、臍腹を寬放し一切善惡都て思量することなし。念起らば既ち覺せよ、之を覺すれば即ち失す。久々に緣を忘すれば自ら一片と成る。此れ坐禪の要術なり。竊に謂ふに坐禪は乃ち安樂の法門なり、而して人多く疾を致すことは蓋し用心を善くせざるが故なり。若し善く此意を得れば則ち自然に四大輕安に精神爽利、正念分明にして法味神を資け、寂然として清樂ならん。若し已に發明すること有らば謂ふべし、龍の水を得るが如く虎の山に靠るに似たりと。若し未だ發明すること有らざる者も亦乃ち風に因て火を吹き力を用ふること多らず、但だ冥心を辨せよ、必ず相賺らず。然れども

道高ければ魔盛んにして逆順萬端なり、但だ能く正念現前せよ、一切留礙すること能はず。楞嚴經、天台の止觀、圭峯の修證儀に具に魔事を明す。豫め不虞に備ふる者は知らざるべからず。若し定を出んと欲せば徐々として身を動し、安靜として起ち、卒暴なることを得ざれ。出定の後も一切時中常に方便を作し、定力を護持すること嬰兒を護るが如くせば即ち定力成し易し。夫れ禪定の一門は最急務たり、若し坐禪靜慮にあらずんば這裏に到て總に須く茫然たるべし。所以に珠を探るには宜しく浪を靜むべし、水を動かせば取ること應に難かるべし。定水澄清なれば心珠自ら現ず。故に圓覺經に云く、無礙清淨の慧、皆禪定に依りて生ずと。法華經に云く、閑處に在て其心を修攝せよ、安住不動なること須彌山の如くなるべしと。是に知ぬ、超凡入聖は必ず靜緣を假り、坐脫立亡は須く定力に憑るべし。一生取辨するすら尙ほ蹉跎たらんことを恐る、況や乃ち遷延して何を將てか業に敵せん。故に古人云く、若し定力の死門を甘伏する無くんば目を掩ふて空く歸り、宛然として流浪せんと。幸に諸禪友斯文を三復せば自利々他同じ

く正覺を成せん。

正法眼藏生死

道元禪師

生死のなかに佛あれば、生死なし、またいはく、生死のなかに佛なければ、生死にまとはす、こころは夾山定山とはいはれし、ふたりの禪師のことばなり、得道の人のことばなれば、さためてむなしくまうけし、生死をばにれんとおもはむ人、まさにこのむねをあきらむへし、もし人生死のほかにほとけをもとむれば、なかえをきたにして越にむかひ、おもてをみなみにして北斗をみんとするかことし、いよいよ生死の因をあつめて、さらに解脫のみちをうしなへり、たた生死すなはち涅槃とこころえて、生死としていとふへきもなく、涅槃としてねがふへきもなし、このとき、はしめて生死をはなるる分あり、生より死にうつるところうるは、これあやまりなり、生はひとときのくらゐにて、すでにさきありのちあり、かるがゆへに佛法のなかには、生すなはち不生といふ、滅もひとときのくらゐにて、またさきありのちあり、これによりて滅すなはち不滅といふ、生といふときには生よりほかにものなく、滅といふときは滅のほかにものなし、かるがゆえに生きたらはたたこれ生、滅きたらはこれ滅にむかひて、つかふへしといふことなかれ。

1/5/40

禪の妙味 終

れかふことなかれ、この生死はすなはち佛の御いのちなり、これをいとひすてんとすれば、すなはち佛の御いのちをうしなはんとするなり、これにととまりて、生死に著すれば、これも佛の御いのちをうしなふなり、佛のありさまをとむるなり、いとふことなく、したふことなき、このとき、はじめて佛のこころにいる、たたし心をもてはかることなかれ、ことばをもていふことなかれ、たたわが身をも心をも、はなちわすれて、佛のいへになげいれて、佛のかたよりおこなはれて、これにしたがひもてゆくとき、ちからをもいれず、こころをも、つひやさずして、生死をはなれ佛となる、たれの人がこころにととこほるへき、佛となるにいとやすきみちあり、もろもろの惡をつくらず、生死に著するこころなく、一切衆生のために、あはれみふかくして、かみをうやまひ、しもをあはれみ、よろつをいとふこころなく、れかふこころなくて、心におもふことなくうれふることなき、これを佛となつく、まことほかにたつねるこ　なかれ

明治三十九年十一月九日印刷
明治三十九年十一月十三日發行

著作者　忽滑谷快天
發行者　山中孝之助　東京市京橋區築地二丁目三十番地
印刷者　河本龜之助　東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷所　株式會社國光社　東京市京橋區築地二丁目廿一番地
發行發賣所　上宮教會出版部　山中孝之助　東京市京橋區築地二丁目三十番地
井洌堂
關西賣捌所　合資會社積文社　大阪市東區南本町四丁目

（定價金四十錢）

不許複製

井洌堂發賣書目

文學博士 村上專精先生序
加藤咄堂先生著　大內青巒先生跋

○增補 死生觀

全一冊　定價金四十錢　郵稅金八錢

死生は人生の一大事實にして千古未解の問題たり本書は古來哲人の精到なる思索と英雄豪傑が決死の覺悟とに照し學説と事實との兩方面よりこの問題を解決したるものにして議論確乎文章明晰大に江湖の喝采を博し茲に第十五版を發行するに當り更に死生雜話數十題を加へ其遺を補ひ本問題を論明せんとす乞一本を贈ふて此千古未解の問題を決せよ。

文學博士 前田慧雲先生序
文學博士 南條文雄先生跋
加藤咄堂先生著

○運命觀

全一冊　定價金卅五錢　郵稅金六錢

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる抑運命とは何ぞや本書は著者が嶄新なる論を以て舊運命觀を擊破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ更に深遠なる哲學科學の眞理により新運觀を建設して個人國家社會の運命を論じ終りに人生の眞趣を解し國家の運命と奮鬪して成功の位地に達せるの實例を示す讀め浮世の波に漂へる士來れ開運の鍵を得んとするの從本書は成功の秘訣なり開運の守符なり。

文學博士 井上圓了先生序
加藤咄堂先生著　島地默雷先生跋

○女性觀

全一冊　定價金卅五錢　郵稅金六錢

美神の權化として崇拜すべきか惡魔の化身として厭忌すべきか本書は流麗の文を以て女性觀の變遷歷史上の活動を叙し實貿京奪等の奇習異俗より名媛才女が佳話亦に闇黑面の女性に及び婚姻獨居職業等の問題を究めて社會上の地位を明にし更に歷愛嫉妬等の心理的現象を示し筆を女性の教育嬉德の養成に掬くし神か冤か請ふ一讀を吝む勿れ。

加藤咄堂先生著

○通俗講話 佛教要義

全一冊　●極クロース美本●紙數五百ページ　正價金一圓卅五錢　郵稅金拾錢

本書は著者が多年の研究を傾け盡くして、浩瀚なる佛教の要を摘み萃を拔き秩序嚴然たる一大組織とし、高遠なる教理を平易明快の筆を以てし、何人にも知り易く而し易き語體に説述し先づ佛教以前の印度哲學より釋迦牟尼の傳記に入り、大小乘の區別並に其發達變遷を説き、教理を示しては佛教の宇宙觀に筆を起し、宇宙は如何にして成立せしや、又宇宙は如何なるものなるや、其現象は如何なる根原に發生し、前世と後世との狀態は如何なる關係あるか、靈魂は如何なる人生問題に於ては其本體は如何なる關係あるか、因果の道德的説いては性善惡並に善惡の標準を論じ、輪廻生死の根原を明し、苦樂の原理を叙し、涅槃の説に及び、唯心現識の順序を示し、深く三界唯一心の妙理に入り、微密に其分類を説き、極樂の説に及び、身心の關係より、組織の狀態に律を結び、地獄の説に及び、世出世の道德、成佛の修惡を離れて樂を得、苦を逃れて悟を開く、佛教の要義は綱要ししてこれを更らに佛教發達の歷史を説くに至りて各宗派の特色を示し教理を擧げ、終りに其一貫の理を論じたる空前の好著なり請ふ一本を贈ふて佛教の妙趣を一味はれむことを。

理學士 石川成章先生著

○宇宙の默示

全一冊　定價金七拾錢　郵稅金八錢

石川先生は我が國有數の科學者たると共に又熱烈なる宗教信者たり、宗教眼を以て自然を觀察し、科學眼を以て宗教を評論す、天に閃く星辰も、地を彩る山川も皆な之れ自然の妙音たり、宇宙の默示たるなからむや、先生流麗の筆を以て之れを寫し、時に人生の情熱を論じ、自然の光線を説明し、時に水火の作用を説ひて人心の煩悶を寫し、時に自然美を示し、時に地球の生命を論ずる所何人か美妙に渴仰し、其秘密に歡喜せざらむ、苟くも宇宙人生に疑を抱くの徒、希くは本書の妙音によつて大悟する所あれ。

醇庵　鈴木券太郎先生著

○犯罪論及女性犯人

●菊判全一冊總クロス美本●紙數五百五十ページ　定價金一圓五十錢　郵稅金拾五錢

犯罪とは何物か、犯人とは何者か、女性とは何物か、女性犯人とは何物か、本書は此等問題に答へんが爲めに犯罪生理學、犯罪心理學、犯罪社會學の見地に拠り刑罰の根本哲學を開立し、世の法曹家の犯罪及犯人定義に一大動搖を與へ、女性犯人に就ては其解剖的及生理的特狀を詳說し、其人相、毛髮、乳房、生殖器、音聲、筆跡、感覺、色慾、文身の如き亦之を遺傳の法に商量し或は模型の理に依證し、先天犯者熟情犯者其他の分類下に於ては各其特質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に參考し以て理實配合の巧を究て造化の微を開き人情の細に入り女性の秘密を暴露し其罪惡を檢案する處觀察犀利思索超凡洵に之れ科學の精華文學の上乘たり而して考證は則廣く百家に出入し論斷は則浮薄を避け一言一句悉く根底あり、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、理論深邃風神崇高の一大文章此書を指して現世紀の一大產物、思想界の一大革命と云はずんば將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也。

前東京高等師範學校教授　小山左文二先生著

○日本文法の解說及び練習

全一冊　三百八十ページ餘　定價六十錢　郵稅十錢

大學豫科、男女兩高等師範學校、各種高等專門學校入學受驗者、並に文部省教員檢定受驗者參考書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生及び小學校教員檢定受驗者の參考書として、著者苦心の作に係る。解說周到にして明快、載するところの練習問題實に一千五百餘。添ふるに明治三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學校入學試驗文法及び明治十八年以降本年まで二十年間に於ける文部省教員檢定試驗文法問題の全部を以つてし、一々適切にこれを解說指導せり

文學博士　南條文雄先生著

○修養錄

定價金四十錢　郵稅金六錢

溫厚篤實、而も道心堅固の聞えある、南條博士の實驗的修養を詳細に記載したる者は本書なり。章を分つ六、節を分つ二十、著者得意の趣味ある談柄は細大漏さず擧げて本書の中にあり。人生問題の解決に惱める者、若くは樂しき生活を送らんと欲する者は速に來て本書を讀み給へ。本書は蓋し煩悶者の慰藉劑なり、求道者の好資料なり。

渡邊國武先生序　加藤咄堂先生著

○心的生活英雄史

全二冊　定價金五十錢　郵稅金八錢

本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷とを觀察し、波瀾あり抑揚ある彼が行動の裏面には煩悶あり慰安ある心的生活の存するを說破したるものにして、其名は英雄史たりといへども、實は是れ武士道發達史たり、思想變遷史たり。英雄傳たり。隱逸傳たり。趣味に富むことは小說に優り教訓を含むことは倫理書に過ぎたり。

アーサー、ロイド先生序　忽滑谷快天先生著

○怪傑マホメット

全一冊　挿畫　定價金五十錢　郵稅金八錢

序論にはアラビヤの奇風異俗抱腹絕倒すべき者詩趣津々たる者枚擧に遑あらず本論には宗教家としてのマホメットが迫害逆辱の中に隱忍默耐する預言者的高風を叙し更に將軍として渠が千里の馬に跨り屍山血海を蹈破する雄姿を描き進んで渠が政治家としての怪腕鬼術を述べ最後に渠が個人として起居動靜の瑣より閨門の秘事に至る迄悉く詳記して裸々赤條々たる眞面目を現はす我國空前の大著なり。

ペークマン先生原著　杉村縱橫先生譯補

○改訂增補強肺術

全一冊　定價金四十錢　郵稅金四錢

肺病を恐るゝものは讀め、肺病に罹れるものは讀め、歐米に於ける最新式の體力養成法を說め、此書に六の特色あり

第一、時間を要せざること。
第二、費用を要せざること。
第三、場所を要せざること。
第四、勞力を要せざること。
第五、官文一致なること。
第六、總ふり假名付なること。

故に男子は勿論、婦人小兒と雖も、容易に理解し、容易に實行し、而して確實に其功果を收め得べし。

加藤咄堂先生著

○演說文章應用修辭學

全一冊　近刊

文名噴々江湖に知られたる加藤咄堂先生は又我が國屈指の雄辯家なり、本書は先生が多年の經驗と修辭の原則により、演說并に作文に關する原理を說述して其應用を示し、言語の組立、音聲の抑揚、文章の組織、推敲の工夫に至るまで叮嚀反覆に之れを說明し、古今東西の文話并に演說家の經驗談を加へ、實益に富むるに趣味を以てしたる近來稀に見るの好修辭學たり。

曹洞宗管長　森田悟由禪師序　加藤咄堂、峯玄光兩先生共著

○禪觀錄

全一冊　定價金三十錢　郵稅金四錢

禪とは何ぞや曰く冒ひ離しの禪を脫き盡して餘蘊なく更に發して武士道の根底となり凝つて文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し逸話あり警句あり神韻縹緲一讀卷を擱く能はざらしむ。

曹洞宗大學講師　忽滑谷快天先生著

○禪學講話

全一冊　定價金四十錢　郵稅金六錢

適切簡明以て精神の修養に資する者は禪也。古往今來、偉人哲士の眞骨頭を鍛錬したるものは禪也。痛言快語以て人生の眞意義を示し、處世の妙諦を說く者は禪也。本書「人生の謎」以下各章、明快の說、有趣の筆、禪の眞髓を發揮けて餘蘊なし。

文學博士　松本文三郎先生著

○宗教と哲學

全一冊　定價四十五錢　郵稅金八錢

文學博士　三宅雄次郎先生著

○小泡十種

全一冊　近刊

『每日新聞』記者　島田三郎先生著

○我觀人生

全一冊　近刊

文學博士　根本通明先生著

○易學新說

全一冊　近刊

隱逸哲學博士　在米國　鈴木大拙先生譯　バウル、ケーラス先生著

○阿彌陀佛

全一冊　近刊

發行發賣所

東京市京橋區築地二丁目卅番地
上宮教會出版部

井刕堂

山中孝之助

東京市小石川區原町六番地
丙午出版社

高島圓

17